

京都府埋蔵文化財情報

第129号

平等院旧境内遺跡(宇治川河床)出土の軒瓦	引原茂治	1
丹後の台付「甕」	桐井理揮	9
古墳時代の鞍金具における法量検討	清水早織	19
美濃山廃寺出土新羅系軒丸瓦について	筒井崇史	27
平成27年度発掘調査略報		33
4. 下水主遺跡第8次(L・M・O地区)		
5. 佐伯遺跡第7次		
6. 出雲遺跡第20次・三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次		
7. 岡田国遺跡第3次		
長岡京跡調査だより・125		42
現地公開状況(平成27年11月～平成28年2月)		44
普及啓発事業(平成27年11月～平成28年2月)		45
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター		
設立35周年記念事業の実施報告	岡村美知子	47
センターの動向(平成27年11月～平成28年2月)		50

2016年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

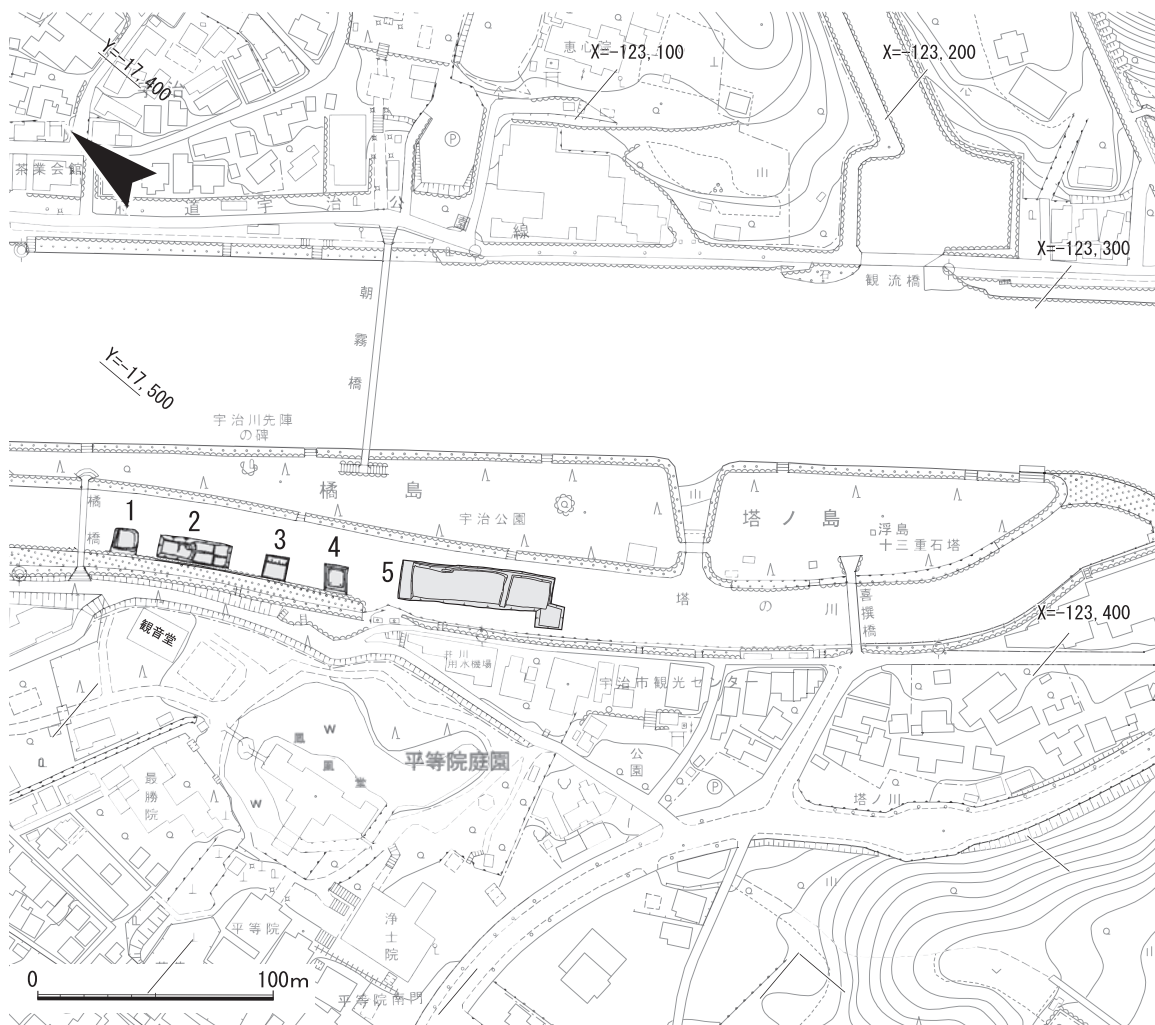
平等院旧境内遺跡(宇治川河床)出土の軒瓦

引原茂治

1. はじめに

平成26年度に実施した平等院旧境内遺跡の調査地は、宇治川の分流である塔の川の河床で、世界遺産平等院の東側に位置する。平等院は、父藤原道長から宇治の別業を継承した藤原頼通により、永承7(1052)年に寺として創建された。当時の境内地は現在よりかなり広範であったと考えられている。想定される旧境内地が平等院旧境内遺跡として捉えられている。

平成26年度は、河床に5か所のトレンチを設定して調査を実施した。遺構は5トレンチで検出した堤状遺構S X01のみであるが、遺物は瓦が多数出土した。特に、2トレンチと5トレンチに集中する。また、軒瓦が多く含まれる。平等院およびその周辺で出土した軒瓦については、『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書(宗教法人平等院 2003)』(以下、整備報告書とする)で分類して報告されている。それで、過去の調査で出土した軒瓦と整合性をもたせるため、軒瓦の型



第1図 トレンチ配置図

式名は整備報告書に準ずることとする。

2. 出土した軒瓦

(1) 2 トレンチ

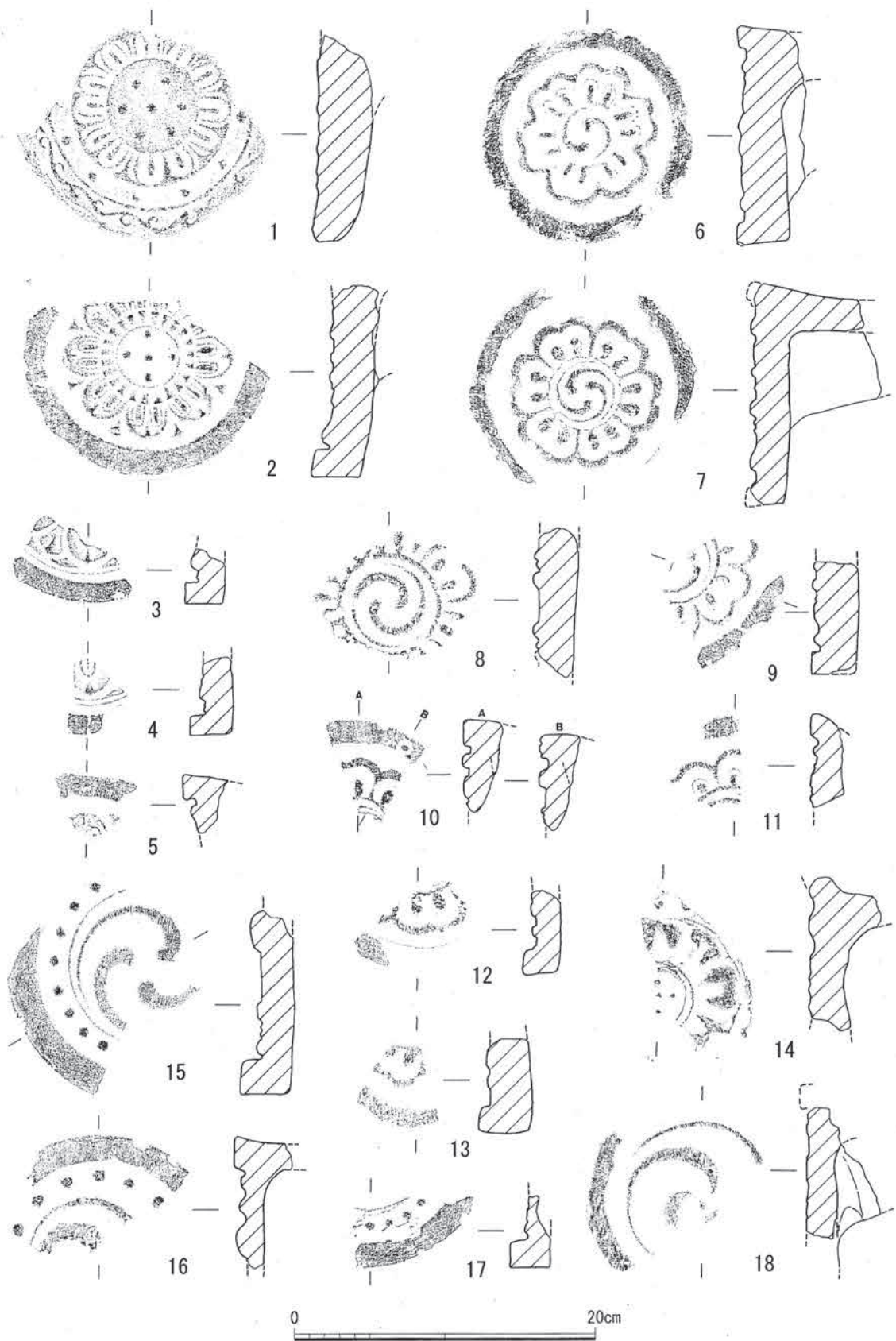
1は複弁蓮華文を内区主文とする軒丸瓦である。中房には1 + 6の蓮子を配する。蓮弁文の周囲には珠文と圏線が巡り、外周には唐草文が巡る。整備報告書のNM016系とみられるが、唐草文がやや萎縮気味である。平等院創建期の11世紀中葉頃の瓦と考えられるもので、南都系の瓦とみられる。2は複弁八葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房には1 + 4の蓮子を配する。中房の周囲には^{しべ}葉を表す。文様は扁平気味で角が立ち、シャープな印象を受ける。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、11世紀頃の瓦とみられる。3は単弁蓮華文を主文とする軒丸瓦である。11世紀頃の瓦とみられる。4は単弁蓮華文を主文とする軒丸瓦で、NM004系とみられる。11世紀頃のものとみられる。5は蓮華文を主文とする軒丸瓦である。小片のため詳細は不明であるが、2と同文とも考えられる。

6は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は右巻きの二巴文である。子葉の周囲に圏線をもつ。NM033系のものとみられる。12世紀初頭の平等院改修期に使用されたと考えられる瓦で、河内向山系である。7は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は右巻きの三巴文である。NM037系のものとみられる。12世紀中葉頃のものとみられ、河内向山系である。8～13は、上記2点と同様、河内向山系の軒丸瓦である。8は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は左巻の二巴文である。子葉に圏線はなく、NM038系とみられる。9～13は中房が不明であり、形式は不明である。10は周縁部に「○」の刻印がある。整備報告書の刻印瓦形式のK01にあたる。11は、子葉の周囲に圏線があり、NM032・033系とみられる。9・10・12・13は、NM034～039系にあたるものとみられる。

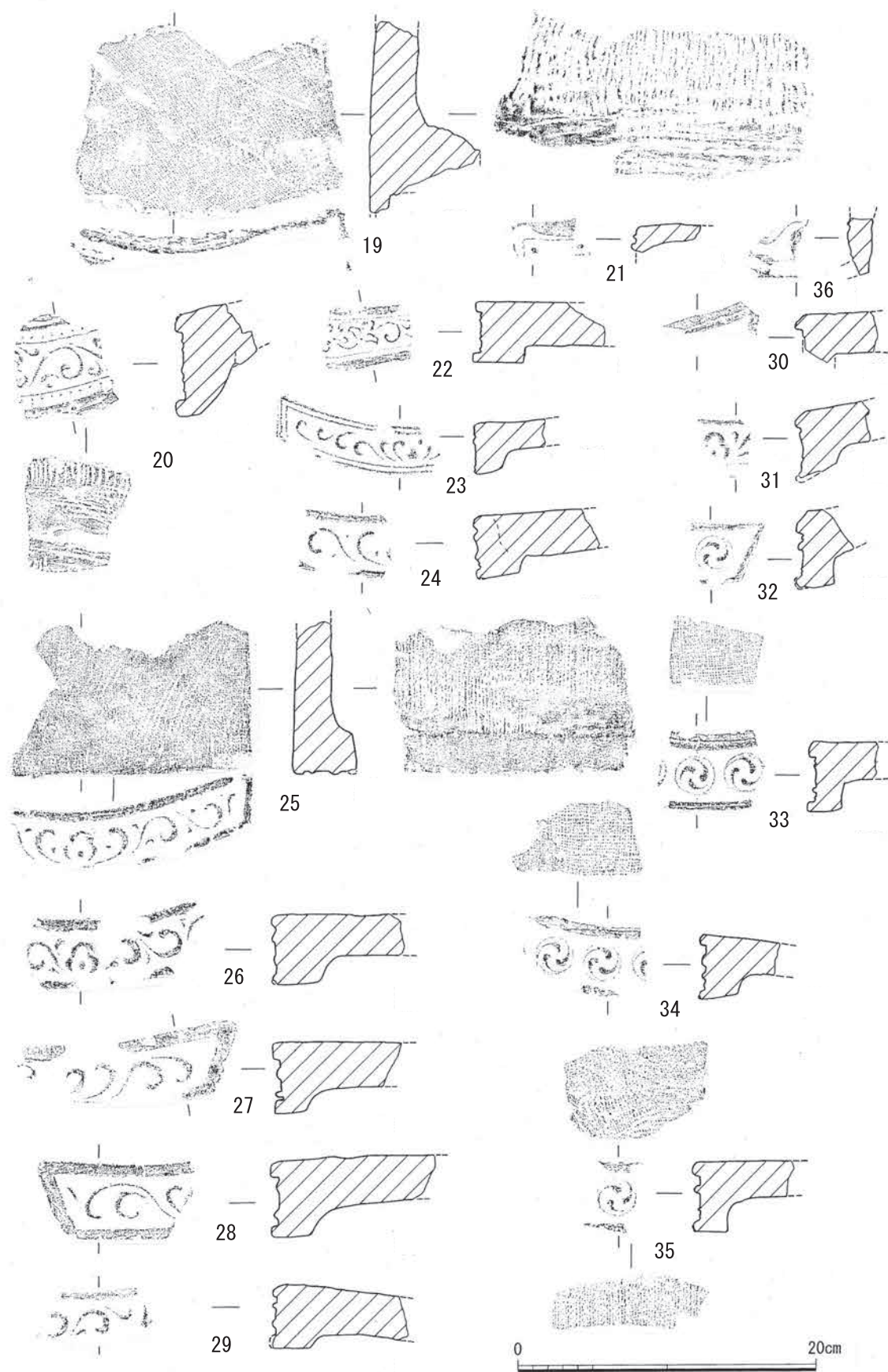
14は複弁八葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房には1 + 4の蓮子を配するものとみられる。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、平安時代の瓦とみられる。

15は左巻三巴文を主文とする軒丸瓦で、周囲を珠文が巡る。整備報告書のNM102系のものとみられ、近世瓦である。16も同様の三巴文軒丸瓦で、珠文が15より大き目であるが、同系の近世瓦とみられる。17は右巻三巴文軒丸瓦とみられるが、小片であり詳細は不明である。珠文が15・16より小粒で、中世の瓦の可能性も考えられる。

19は軒平瓦で、凹面に布目、凸面に縄タタキ痕が残る。顎部には粗いタタキ痕残り、丹波篠王子瓦窯の製品とみられる。瓦当面は剥落しており、文様は不明である。藤原道長が建立した法成寺跡からも同様の技法の瓦が出土しており、11世紀前半頃の瓦とみられる。20は唐草文を主文とする軒平瓦で、周囲を圏線および細かい珠文が巡る。顎部に粗いタタキ痕残り、丹波篠王子瓦窯の製品とみられる。19も同文である可能性も考えられる。整備報告書では、丹波系の軒瓦は報告されていない。なお、法成寺跡と考えられている京都府立鴨沂高校出土と伝える同文の軒平瓦が、同高校に所蔵されている。



第2図 2・3トレンチ出土軒丸瓦実測図



第3図 1・2トレンチ出土軒平瓦実測図

21は珠文と圈線が巡る軒平瓦で、主文は不明である。平安時代の瓦とみられる。22は宝相華唐草文を主文とする軒平瓦で、周囲に圈線が巡る。NH003系のもので、11世紀頃の瓦とみられる。やや小型の瓦である。

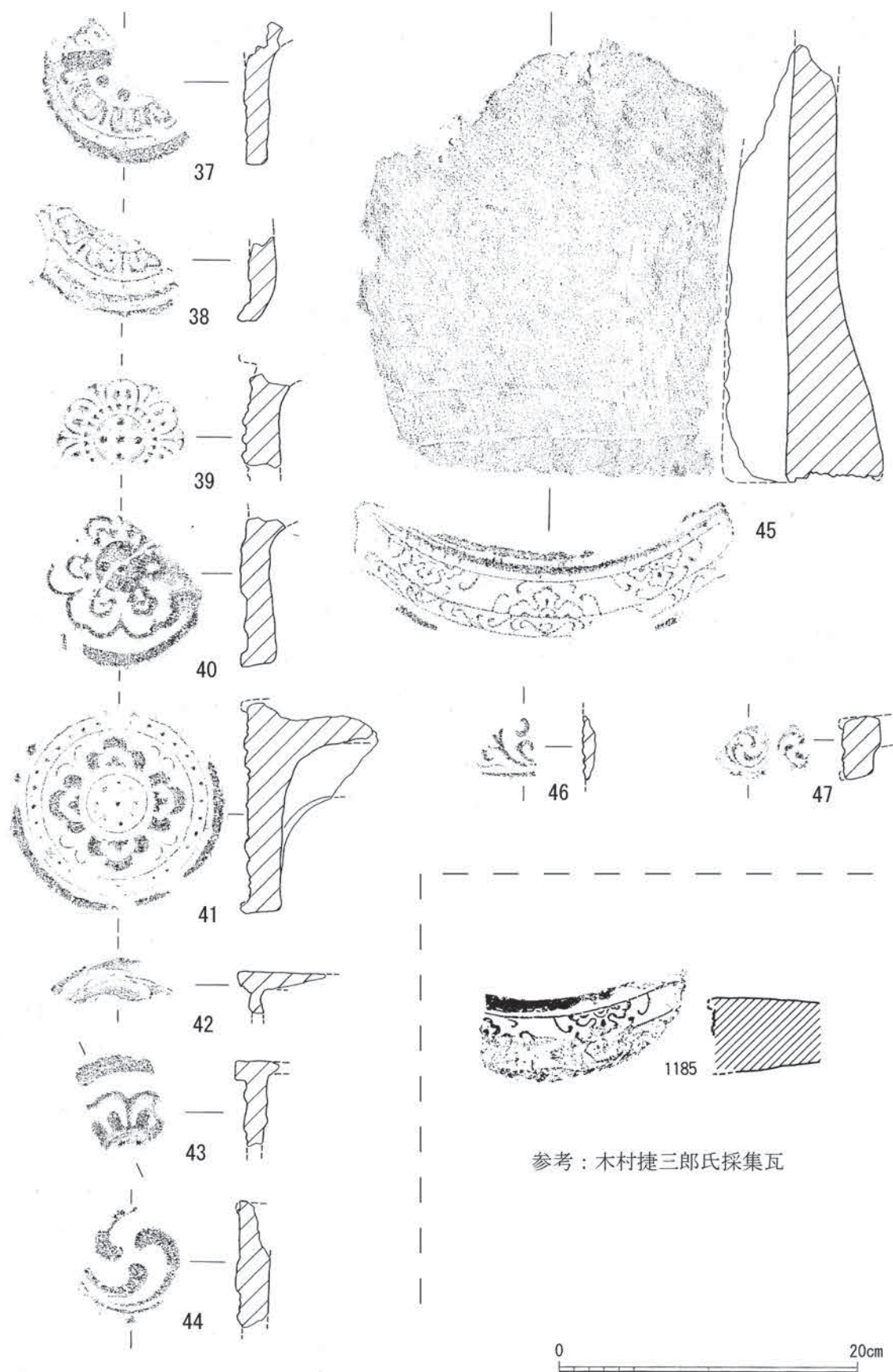
23～31は河内向山系の唐草文軒平瓦で、中房に巴文を持つ複弁六葉蓮華文軒丸瓦と対になるものとみられる。この系統の軒平瓦は多くの文様パターンがあり、拓本の比較ではどの形式に属するのか判断するのは困難である。25はNH058系に、28は唐草文の端部の形状からNH045系に属するものか。30は文様は不明であるが、胎土や整形の状況から河内向山系の瓦と考えられる。いずれも、12世紀初頭～中葉頃にかけての瓦とみられる。

32～35は連続する左巻三巴文の軒平瓦である。全容がわかるものはない。巴文の周囲に圈線がないので、NH064もしくは065系とみられる。河内向山系の瓦と考えられる。整備報告書によると、12世紀初頭頃の三巴文軒丸瓦と対になるものとみられるが、今回の調査では、それに該当する軒丸瓦は出土していない。

(2) 5 トレンチ

37は複弁八葉蓮華文軒丸瓦とみられ、中房に大粒の蓮子をもつ。瓦当面に帯状の范傷がある。蓮弁文の周囲に圈線・珠文が巡る。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、11世紀頃の瓦とみられる。38も複弁八葉蓮華文軒丸瓦とみられる。37に近い文様構成とみられるが、詳細は不明である。39は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には1 + 4の蓮子をもち、中房の周囲に葉が巡る。文様およびその表現は2トレンチ出土の軒丸瓦2に類似しており、ほぼ11世紀頃の瓦とみられる。40は六葉蓮弁文軒丸瓦で、中房には1 + 4の蓮子をもつ。整備報告書に同文瓦は掲載されていないが、弁の形状が、巴文の中房をもつ複弁六葉蓮華文軒丸瓦に類似しており、それと同じ時期の瓦とも考えられる。なお、この瓦当の文様は、子葉の形状から、宝相華文とも考えられる。41は四葉宝相華文軒丸瓦で、中房には1 + 8の蓮子をもつ。宝相華文の周囲を、圈線・珠文・圈線が巡る。NM041系の瓦とみられる。11世紀頃のものとみられる。42は軒丸瓦で、文様等は不明であるが、胎土等から平安時代の瓦とみられる。43は中房に巴文をもつ河内向山系の軒丸瓦である。子葉に圈線をもたない。12世紀の瓦とみられる。44は右巻の三巴文である。時期は不明であるが、中近世の瓦の可能性も考えられる。

45は半裁花文を主文とする軒平瓦である。半裁花文の周囲を圈線が巡り、その下方に均整唐草文が展開する。明瞭な顎部をもたない。凹面には布目痕が残る。整備報告書には同文瓦の記載がないが、ほかの半裁花文軒平瓦の例からみて、11世紀頃の瓦と考えられる。なお、この瓦と同文とみられる軒平瓦が『木村捷三郎収集瓦図録』に掲載されている。鳳凰堂南溝で採集されたものということである。この瓦も平等院と関係のある瓦とも考えられる。46は唐草文軒平瓦である。瓦当の一部が剥がれたもので、型式は不明であるが、平安時代の瓦とみられる。47は連続する左巻三巴文の軒平瓦である。巴文の周囲に圈線がないので、NH064もしくは065系とみられる。河内向山系の瓦で、12世紀初頭頃の瓦と考えられる。



第4図 5トレンチ出土軒瓦実測図

(3) その他のトレンチ

36は唐草文軒平瓦で、1 トレンチから出土した。文様の詳細は不明であるが、NH209系の可能性があり、近世瓦とみられる。18は左巻三巴文軒丸瓦で、3 トレンチから出土した。文様は扁平気味で、中世の瓦とみられる。

3. まとめ

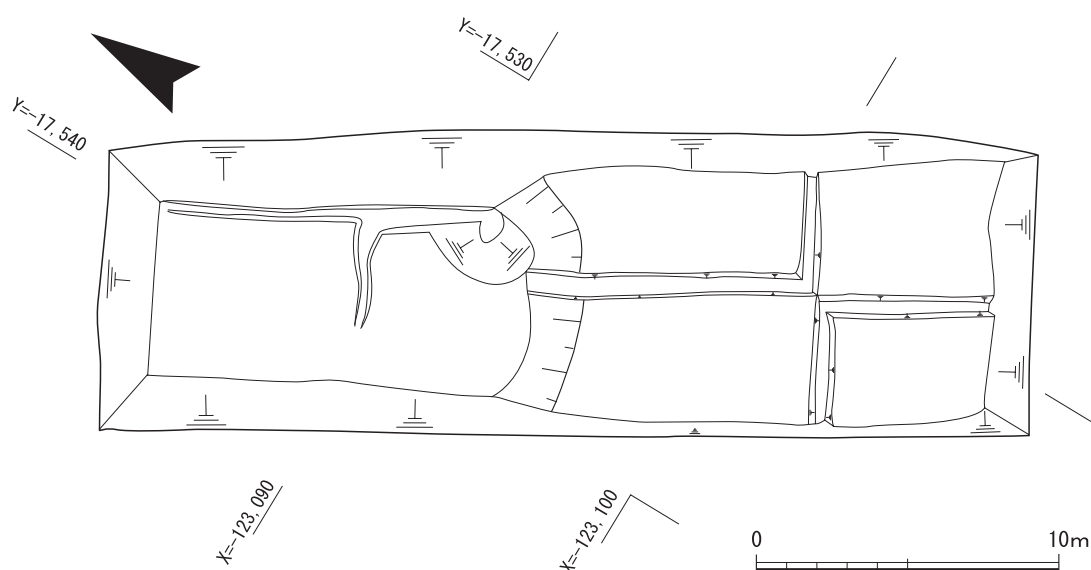
藤原道長は宇治に別業を所有していたが、万寿4(1027)年の道長の死後、子の藤原頼道に伝領された。頼道は、永承7(1052)年にこの別業を寺に改めて、平等院と号した。その後、康和3(1101)年以降に藤原忠実によって平等院の大規模な改修が行われたと考えられている。

平安時代には平等院本堂が現観音堂の位置にあったとされる。文献により、本堂から宇治川に向かって翼廊が延び、その先端に宇治川に張り出して釣殿があったと想定されている。『宇治旧記』によると、釣殿は中世後期まで残存しており、元亀・天正の頃に焼失したと伝える。

2 トレンチは観音堂の東側の位置に設定した。釣殿の想定地付近にあたる。トレンチ付近では、昭和48(1973)年の災害復旧工事中に大面取をした角柱が1本見つかり、釣殿の柱と考えられた。昭和48年2月23日付けの『洛南タイムス』第6048号に記事が掲載されている。

このトレンチの調査では、釣殿に関連する遺構の検出を主たる目的とした。調査の結果、このトレンチからは、釣殿に関連する遺構は確認できなかった。また、昭和48年に確認された釣殿の柱と考えられる柱材についてもトレンチ内には残存していなかった。しかし、平等院に関係すると考えられる瓦類が、あまり摩滅を受けていない状態で多数出土した。中世の土師器皿等も出土している。

調査地は、宇治川分流の塔の川の川底である。宇治川は急流として知られ、また、河川改修も行われている。洪水などにより、また工事により、多くの遺物が流下し失われたものと考えられ



第5図 2 トレンチ平面図

る。そのような状況の中で川底に残存したのが、今回の出土遺物と言える。

2トレンチからは平等院に関係すると考えられる瓦類が多数出土した。特に、12世紀前半期の藤原忠実による改修時に使用されたと考えられる瓦が多い。軒丸瓦では、中房が巴文となる河内向山系の瓦がそれにあたる。軒平瓦では、河内向山系の唐草文軒平瓦や連続する左巻三巴文の軒平瓦がそれにあたる。軒丸瓦では出土点数17点のうち8点で約47%を占める。軒平瓦では出土点数17点のうち13点で約76%と、多数を占める。これは、藤原忠実によって行われた改修事業の規模の大きさを示すものと考えられる。また、その改修により、平等院が最も栄えた時期を迎えたことをも示すと考えられる。

2トレンチの出土瓦で注目されるのは、丹波篠王子瓦窯産の軒平瓦が含まれていることである。上記のとおり、藤原道長が創建した法成寺の故地と考えられている京都府立鴨沂高校出土瓦に同文の軒平瓦が含まれている。このことから、今回出土した丹波産軒平瓦は、平等院創建以前の宇治別業に関係する遺物とも考えられる。別業の中に瓦葺きの仏堂的な建物があったことを示唆するものであろうか。そのように考えると、興味深い資料と言える。

2トレンチから出土した瓦は、これまでの平等院の修理等で不要になった瓦を付近に投棄したものともみることができよう。また、上記のとおり、出土した瓦には水流によって磨滅した痕跡がなく、遠隔地から流下したものとはみられない。付近に何らかの平等院関係の建物があった可能性も否定できないと考えられる。

(ひきはら・しげはる = 当調査研究センター調査課調査第1係副主査)

参考文献

- 『平等院境内遺跡発掘調査報告書』(宗教法人 平等院)2000
『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』(宗教法人 平等院)2003
『木村捷三郎収集瓦図録』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)1996
福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」(『佛教芸術』68 毎日新聞社)1968
平安博物館編『平安京古瓦図録』(雄山閣出版株式会社)1977
引原茂治・竹村亮仁「平等院旧境内遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第165冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2016

丹後の台付「甕」

桐井理揮

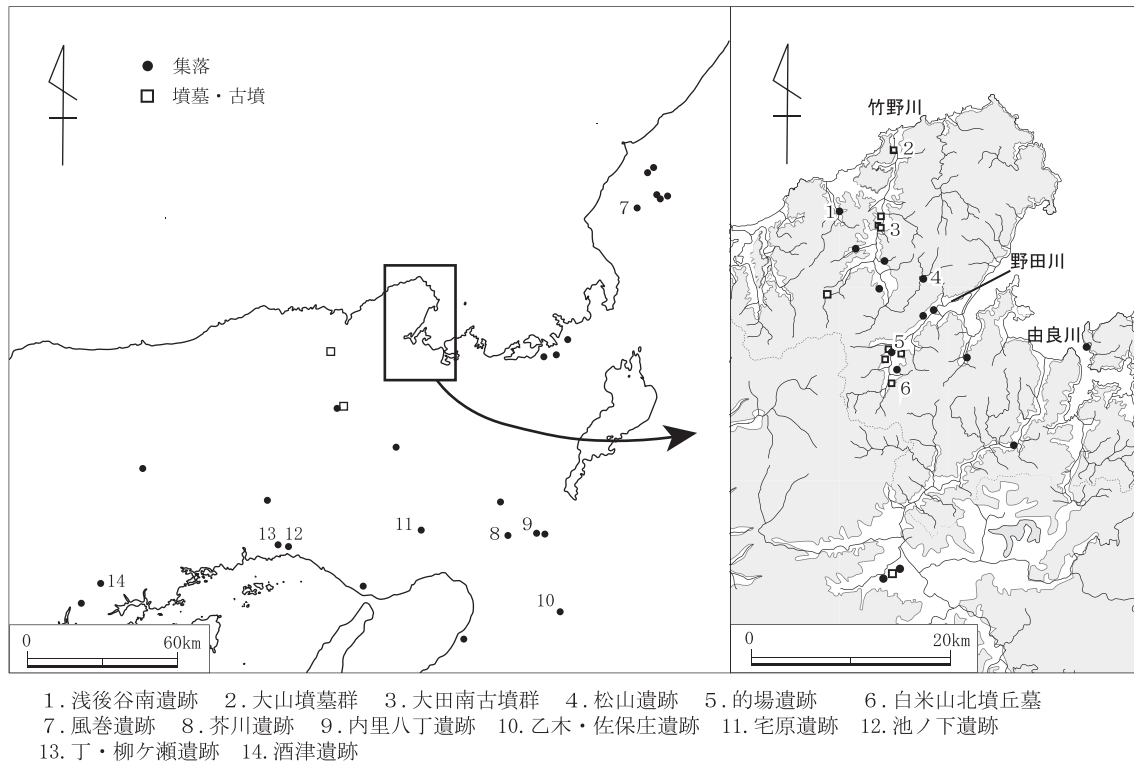
1. はじめに

弥生時代後期、近畿北部では甕形を呈する体部に「ハ」の字形の脚台がつく、脚台付甕がみられる。しかし、その評価に関しては報告者によって一様ではなく、台付の壺、甕、鉢など認識の差異がある。また、精製された胎土で製作されるものや朱が付着するもの、漆が塗られたものなど、明らかに日常的な用途から乖離したものもみうけられ、儀礼的な用途が想定されることもある。この種の土器は丹後を中心として北陸などで出土することは知られていたが、1遺跡からの出土量は1点ないし多くとも数点程度であり、とりたてて議論の俎上に挙げられることは多くなかった。

ところが、近畿北部系土器の集成を行った際に、^(注1)意外にも畿内地域およびその周辺にも類例が散見されることを知った。そこで、本論ではこの脚台付甕^(注2)の展開について整理することを目的とする。そして、周辺地域での出土例を挙げ、とくに当該期の地域間交流という側面に注意しながら、台付甕の意義について考えてみることにしたい。

2. 研究小史

本論で主題となる弥生時代後期の周辺地域を見渡すと、脚台をもつ甕は紀伊半島南部や伊勢湾



第1図 有段口縁をもつ台付甕の分布

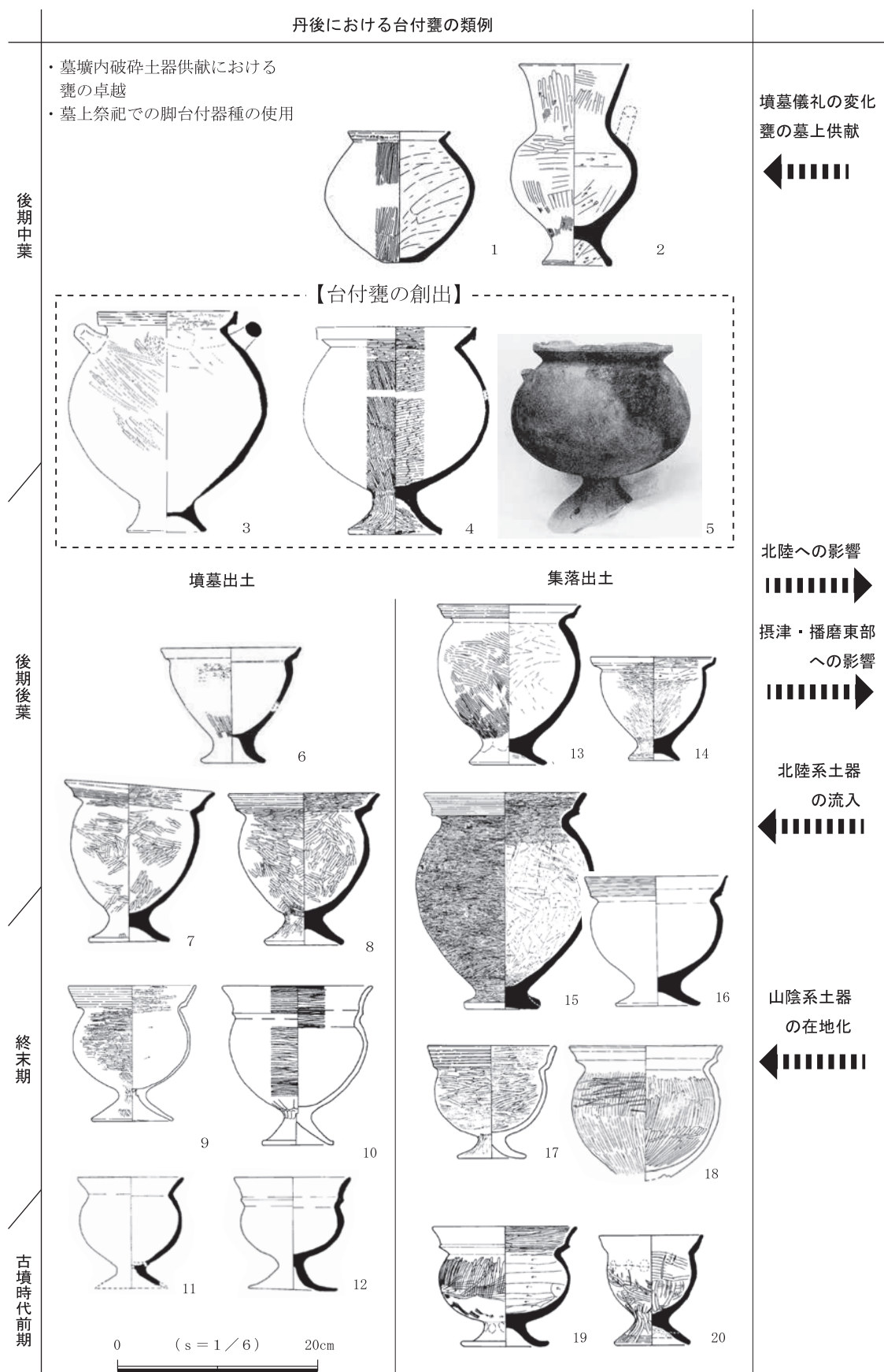
岸などで日常雑器として使用されている。また、中部高地でも中期後半の栗林式にすでに台付甕が認められるなど、その存在自体は珍しいものではない。これら日常雑器的な性格を有する台付甕に対して、本論で対象とする丹後の台付甕は1遺跡からの出土量が著しく少ないうえに、丁寧に作られるものも多く、周辺諸地域の台付甕とは性格を大きく異にしていると考えられる。丹後の弥生時代後期土器の編年を提示した肥後弘幸の器種分類では、装飾壺以外の台付壺の総称としての壺F、もしくは有段口縁の鉢Bbとされたものであり、特に詳述はされていない。^(注3)このように、丹後の土器様式の中でも付帯的な扱いとなることが多いが、これまで全く注目されてこなかったわけではない。白米山北墳丘墓墳裾の礫敷状遺構に供献された状態で3個体が原位置を保ったまま出土しており、報告者は在地産の精製された胎土を持つ台付鉢であるとの所見を述べ、「野田川流域に集中する器種らしい」と指摘している。^(注4)また、藤本康司は小羽山墳墓群の報告書の中でこれらの器種の類例を提示して検討を行い、甕と器台が結合した器種であり、「捧げる器」として特殊化したものであると論じた。そして、「丹後系台付甕」と呼称することを提唱し

- ① 有段口縁で口縁部内面及び体部外面がヘラミガキ調整であること
- ② 脚台は「ハ」の字状に横へ張り出す形状で端部が丸みを帯び、外面がヘラミガキを主体とすること

というように定義した。また、藤本は「丹後系台付甕」は弥生時代終末期以降、北陸と丹後の影響を受けて生まれた土器であると指摘する。^(注5)藤本の論は、丹後の土器祭祀の中で重要視された甕に祖型を求める点など参考にすべき点が多い一方、その発生に北陸からの影響を想定する点や出現時期を弥生時代終末期とした点など疑問点も残った。また、「ヘラミガキ」という点を重視したため、資料も限定的であった。終末期に白米山北墳丘墓でみられるような全面にヘラミガキを施す丁寧に製作されたものが一定数存在することは間違いないが、丹後ではその定義に入らないような台付甕も多く展開する。例えば藤本は大田南2号墳のものを(第2図12)台付鉢として認識しているが、ほかの類例を参照する限り、筆者は台付甕の系譜として捉えるべきであると考えられる。また、体部の最終調整がミガキでなく、通有の甕と同じようにハケ、ナデで終わるものも多くみられ、まさに甕に脚台を取り付けたものも存在する。以上のような理由から、本論では藤本のいう狭義の「丹後系台付甕」という定義からははずれるが、広く、丹後にみられる有段口縁の台付甕およびその類似資料を包括して台付「甕」と認定し、資料集成を行いたい。

3. 台付甕の出現と展開

他地域の事例に触れるまえに、丹後での台付甕の発生と展開について整理しておこう。今回集成しえた有段口縁の台付甕およびその類似資料は、丹後を中心に56遺跡90点である。網羅的に資料集成を行ったわけではないが、北陸にも分布がみられるなど東へは広く影響がみられるのに対して、山陰の土器組成のなかに台付甕は定着しない。また、後述するように畿内地域および東部瀬戸内地域においても類例は散見される。その出現の契機として、藤本は甕に器台が結合した形状を呈することから、墳墓に捧げる器として成立したと論じている。まずはこの視点から検証し



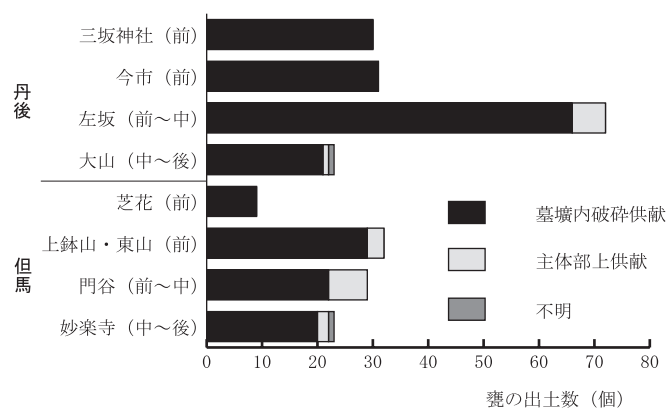
第2図 丹後における台付甕の出現と展開
(出土遺跡は、18頁参照)

てみよう。

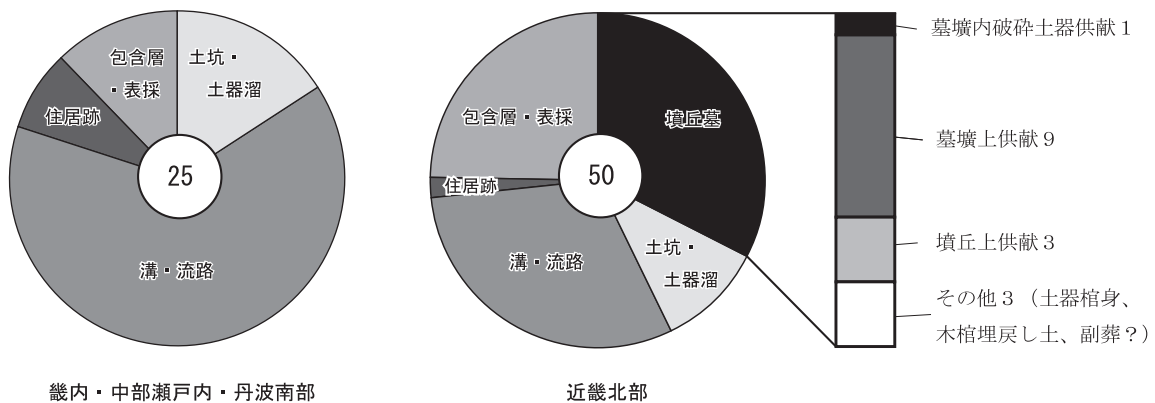
出現期の例として考えられるのは後期中葉に比定される大山墳墓群17主体部例である^(注7)。丹後の台付甕は出現の時点ですでに、体部にミガキを施し胴部最大径を中位に持つという、通有の甕とは異なった型式的特点を備えているといえる。これに近い時期の所産と考えてよい古天王5号墓第10主体例や的場遺跡例をみても、体部に把手が取りつく以外は同様の特徴をもつ(第2図3～5)。そのようなことから、そもそも「甕」に脚台が取りついたものなのかという根本的な疑問が残るが、三坂神社3号墳第3主体部や大山墳墓群28号主体部に破碎供献されているような、体部中位に最大径を持つやや球胴形を呈する異形の甕は少数ながら存在する(第2図1)。この異形甕が台付甕の直接の系譜となったことを示す積極的な根拠は示しえないが、ほかに類似する器種も見当たらないうえ、後期後葉以降の台付甕の体部は通有の甕形を呈するものも増加することから、ひとまず甕に脚台を付けたものであり、後期中葉に登場するとして認識しておこう。

丹後の墓制において、「甕」という器種が重要視されていたことは従前から指摘されており、甕は後期を通じて墓壇内破碎土器供献の中心をなす器種として使用される。その構造に変化がみられるのが後期中葉であり、「後期中葉を境にそれまで調理容器(甕・水差し等)とともに墓壇内に破碎供献されていた飲食容器(高杯・鉢・台付壺・器台)^(注8)が分離して墓壇上で破碎供献される^(注9)」ようになり、同時に破碎土器の配置位置や副葬品構成にも若干の変化がみられる。この墓壇内破碎土器供献から墓壇上土器配置への変化には、中期後半からすでに墓壇上での土器供献がみられる中部瀬戸内地域や山陰地域を含めた広域の地域間交流の影響を想定する意見がある^(注9)。近畿北部地域内でも丹後に先行して但馬の東山墳墓群で後期初頭の段階ですでに甕を墳丘上に供献する事例も確認されている(第3図)。後期後葉の西谷2号墓で墓上供献に用いられていた甕は、ヘラミガキ調整で丁寧に仕上げられており、体部にはススが付着しないなど、台付甕と共通した特徴を有しており興味深い。また、初期の台付甕に把手がつく例が2例あることも示唆的である。丹後では高杯や水差しに半管状の把手が取り付くことはあっても甕に取り付く事例はほとんどみうけられず、それはむしろ但馬的な要素であるといえる。丹後では後期前葉から中葉を中心に水差しや壺など、通常脚台がつかない器種に脚台が取り付く例が散見されるが(第2図2)、これらは集

落で出土することは稀であり^(注10)、墳墓に供献するために創出された蓋然性が高い。このように後期中葉、すなわち墓壇内破碎土器供献から墓壇上土器配置への移行期に台付甕として、甕が墳丘上に供献されるために仮器化したと解釈することは許されよう。やや根拠に欠けるものの、丹後での墳墓祭祀の変化、そして台付甕の発生には西からの影響を考える



第3図 墳墓祭祀における甕の使用方法



第4図 台付甕出土遺構の性格

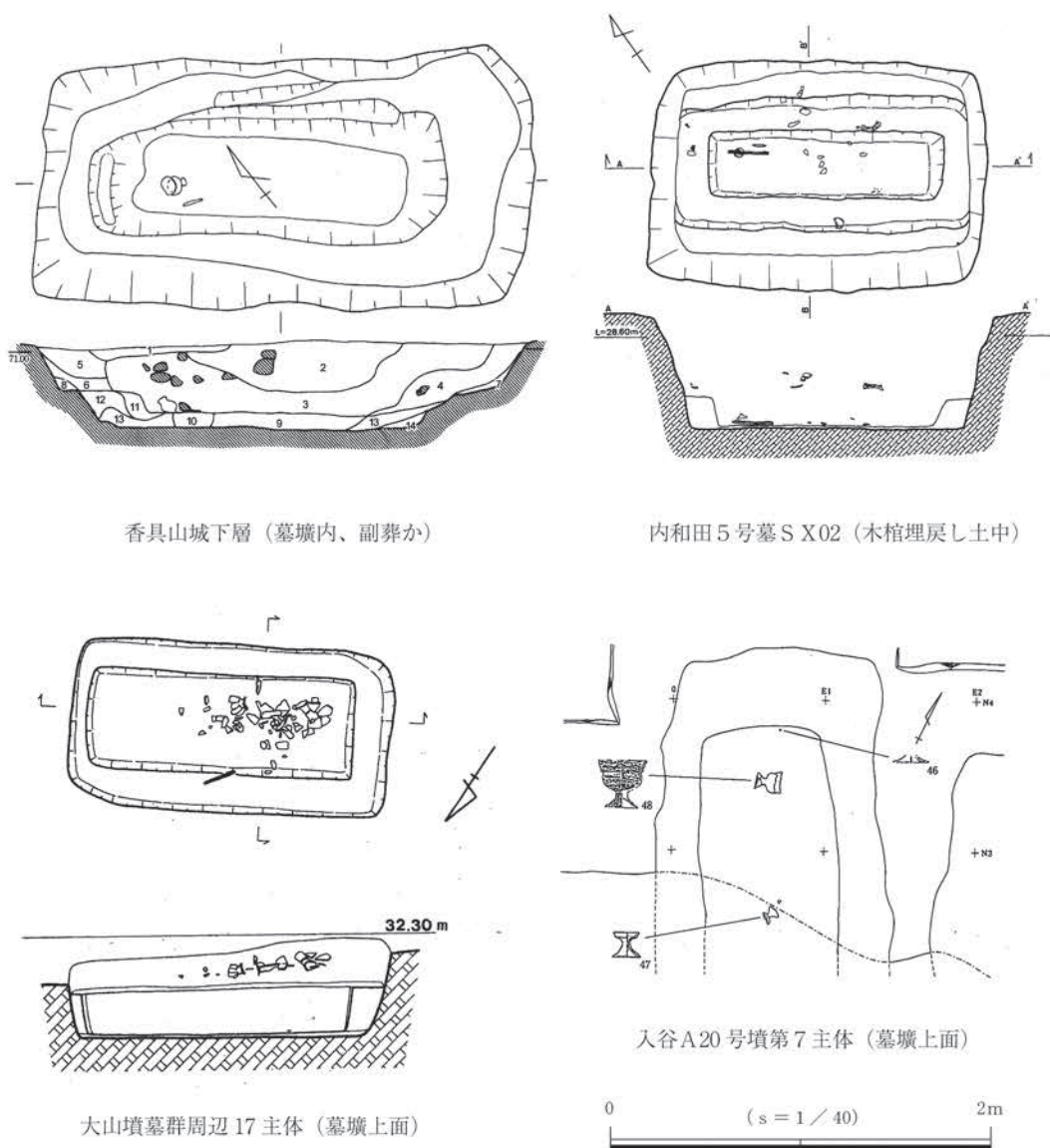
ことができる可能性を指摘しておきたい。

しかし、出現期の例を改めて確認すると、墓上供献に使用されているのは大山墳墓群例のみであり、第2図をみても、後期後葉の墳墓に台付甕が供献される例はそれほど多いとは言えない。出現の契機を墓上祭祀の変質に求めることには一定の蓋然性が得られようが、その後の展開は必ずしも墓上祭祀と結びついているわけではないのである。このことは、今回集成しえたもののうち墳墓の例はほぼ丹後半島に限られており、全体の7割以上が集落からの出土であることから推察されることである(第4図)。前述したように丹後では台付きの器種が散見されるが、それに対して台付甕はその出土が必ずしも墳墓に限定されるわけではない点で供献用の台付きの器種とは性格や使用用途を異にしているようである。台付甕の出現の契機を墓上祭祀の変質に求めることができる可能性はあるが、創出当初から、集落でも使用される器種であったのである。

では、その使用方法是甕と共通するのであろうか。出土状況から使用状況が復元可能な墳墓の事例で確認しておきたい。先述したように、近畿北部において甕は墓壇内破碎土器供献に用いられるなど墳墓祭祀の中心をなす器種となるが、台付甕の中で破碎供献に使用されているのは但馬の加陽土屋ヶ鼻の1点のみである。後期末の内和田2号墓では煮沸痕跡をもつ台付甕が木棺埋戻し土中から破碎された状態で出土しているなど、一部には甕と同じような使用状況を示す例もあるが、甕とは別の器種として認識され、異なる使用用途が付与されていたと推察される。墓上供献されたものは多く存在するが、筆者が知りえた範囲でススなど煮沸痕跡がみられるものは存在せず、台付甕は実際に調理や共飲共食を伴う儀礼には使用されないことを基本とする。注目すべき事例として白米山北墳丘墓の例を挙げておきたい。白米山北墳丘墓では墳裾の礫敷遺構で河内産、北陸系の壺の破碎儀礼が行われ、その後礫敷上面に台付甕、器台、高杯が配置された状況が復元されている。供献土器のなかに煮沸用の甕が含まれないことから、埋葬儀礼に際しては実際に共飲共食を伴う儀礼は行われなかったと考えられる。また集落では、出土状況から明確に使用方法がわかる事例は確認できていないが、近畿北部以外の地域でみられるものはすべて集落からの出土であることから、前述したように台付甕の使用は墳墓での祭祀に限定された性格ではないことは明らかである。出土遺構も生活域というよりもむしろ、土器を一括廃棄したような溝や土壇などからの出土が多いことも示唆的である。特殊な事例ではあるが、口縁部に朱が塗布さ

れ、体部にはススが付着した石田谷遺跡例や、口縁部に漆が塗られ体部に煮沸痕跡が認められる風巻遺跡例など、日常的な用途とは乖離したような状況を呈するものも存在する。このようなことから、具体的な使用状況を復元しうる材料は持ち合わせていないが、墳墓と同様何らかの祭祀行為に用いられたと考えたい。

台付甕のその後の展開についても簡潔に整理しておこう。丹後では後期末から終末期にかけて北陸や山陰の強い影響を受け、後期に発展した擬凹線文土器様式が急速に衰退する。台付甕は後期末から終末期前半には白米山北墳丘墓や内和田墳墓群で内外面にミガキを施した祭祀用土器として展開し、体部も丸みを帯び器高が低くなるなど小型化する。また、他地域からの影響が著しく、北陸系の口縁部を持つものや脚台にやや段を持つようなものが散見されるようになる。山陰系の要素が顕在化してくる終末期後半から古墳時代初頭にかけては、香具山城下層墳墓や浅後谷南遺跡などで出土した台付甕のように山陰系口縁を持つものが増加し、本来の「丹後系」の口縁



第5図 台付甕の出土状況の諸例(報告書に加筆)

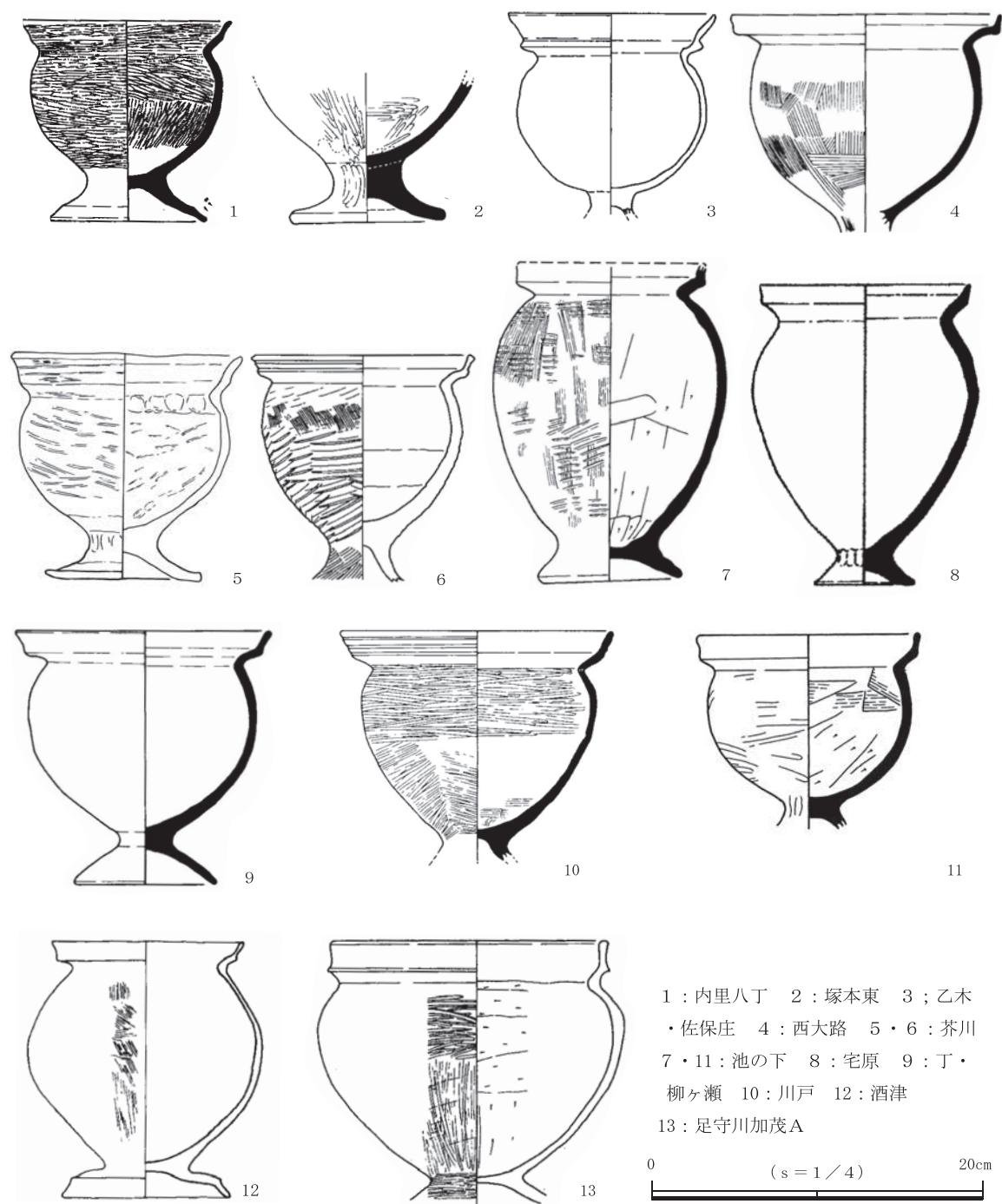
部を持つ台付甕は著しく減少する。このように、他地域の強い影響を受けながらも、北陸や山陰の土器様式には本来存在しない台付甕という独自の器種を丹後地域内では保持し続けるということとを重視したい。台付甕の墳墓への供献は大田南2・5号墳まで続き、古殿遺跡では古墳時代に入っても使用されるなど、弥生時代後期以降の丹後では確実に看過することのできない器種として存在し続ける。脚台付きの甕は祭祀用という特別な意義を与えられ、弥生時代後期から古墳出現期にかけての丹後の土器様式の中に存在することとなったのであろう。

4. 周辺地域での事例

このように台付甕は丹後では何らかの特殊な意味を付与されて使用されていた器種であると考ええる。そして前述したように、意外にもこの台付甕は丹後以外の地域でも一定数出土例がみられる。丹後でも多量に出土する器種ではないにも関わらず、近畿北部の土器様式外でみられる近畿北部系土器の総量に対しては比較的高率で出土するのである。主要な事例に関して以下概略を述べたい。^(注11)

播磨・摂津 弥生時代後期後半、摂津から播磨東部では土器様式じたいに近畿北部系土器の影響が強くみられ、地元で変容した形の近畿北部系土器が多数みられる。そのため、筆者は畿内地域と近畿北部地域との交流ルートの一部として機能していたと考える。^(注12) 台付甕も畿内地域ではもっとも多く得られており、播磨で4遺跡、摂津で2遺跡からの出土がある。宅原遺跡では、畿内第Ⅴ様式系の体部に口縁端部をつまみあげた、近畿北部の影響下で製作された甕に脚台がつくものが存在する(第6図8)。同様の資料は池ノ下遺跡でも出土している(第6図7)。両者ともススなどの使用痕跡を確認することはできず、甕本来の用途である煮炊具としては使用されていないといえる。摂津ではほかにも芥川遺跡で後期後葉の溝から2点が出土している(第6図5・6)。一方は丹後のものと類似度が高く、外面をヘラミガキし、内面にはケズリが施される。もう一方は外面にタタキ痕を顕著に残すなど折衷型式の甕に脚台が取りついたものである。後者には著しくススが付着しており、少なくとも1回の調理を経験したことは確実である。また、今回図示しえなかったが、吉田南遺跡では後期後葉の土器群に伴って台付甕が1点出土している。内外面に橙色の塗布が部分的に認められる。これらは東海や紀伊半島南部を故地とする台付甕とも製作技術を根本的に異にしており、播磨・摂津の在地の甕そのものに脚台を付ける例は存在しないことから、丹後の台付甕を意識して製作された土器であるといえる。このように、近畿北部でみられる土器そのものではなく、近畿北部の影響を受けた甕に脚台をつけるものがあるということは、折衷型式の土器を製作した集団を考えるうえで示唆的である。

播磨西部では川戸遺跡や丁・柳ヶ瀬遺跡で丹後のものと類似度の高いものが出土している(第6図9・10)。川戸遺跡のものは胎土分析で地元の胎土で製作されたものであることが示されており、丹後、もしくはその周辺の集団が移動した先で製作した蓋然性が高い。いずれも終末期の溝状遺構から出土しており、同じ遺構からは他にも甕や西谷式高杯、有孔鉢などの近畿北部系土器が得られている。



第6図 有段口縁台付甕の類例

河内・大和・山城 大和では乙木・佐保庄遺跡で、古墳時代初頭の土器が一括廃棄されたと考えられる遺構から台付甕が出土している(第6図3)。脚部を欠くものの、山陰系の口縁部にミガキを施した体部をもつ。先述したように山陰地域では台付甕はみられず、むしろ丹後の大田南古墳や古殿遺跡などで類例が認められることから、近畿北部を故地とすると考えられる。平等坊・岩室遺跡ではほかにも近畿北部系土器が得られているが、时期的には終末期前半のものであり、本例よりも前出する資料である。山城では内里八丁遺跡で近畿北部系の口縁部を持ち、体部の形状なども近畿北部のものと類似度が高い精製品が出土している(第6図1)。同じ遺構からは他に

も精製された胎土で製作された完形の土器が出土したと報告されており、土器を一括廃棄した土坑であろう。ともに布留Ⅱ式に並行する時期のものであり、搬入品の可能性も考えられる。

中部瀬戸内 中部瀬戸内では吉備で2点、美作に1点の類例がある。筆者自身で実見していないが、参考資料として挙げておきたい。足守川加茂A遺跡の住居跡から出土したものは、「外面に丹塗りがされ、内面に朱が付着」していると報告されている。同一の遺構からは朱生産と関連のあるL字状石杵が共伴しており、興味深い事例である。また、酒津遺跡出土資料の中にも類例が認められる。口縁部の形状や体部の器形は丹後の台付甕に類似するが、脚部形状から故地を北陸に持つ可能性も考えられる^(註13)。いずれも後期末の所産である。

以上のように、後期には播磨東部から摂津に在地で変容した形のがみられ、終末期には広域で類似度の高い臨地製土器、もしくは搬入品と考えても大過ないものがみられるようになるという、ほかの近畿北部系の器種と同じような出土傾向にあるといえる。筆者が実見した限り、摂津・播磨の例にかんしていえば被熱痕跡は認められないものが多数を占め、通常の甕としての使用状況は考え難い。台付甕は日常的な用途で使用されていない器種であるにも関わらず、近畿北部系土器の様式圏外でも散見されるのである。出土遺構からみても、墳墓からの出土がみられないことを除いては近畿北部での様相と大きく変わることはない。住居跡など生活域と想定される区域ではなく土器が一括廃棄された溝や土坑から出土する事例が多いということも台付甕の使用実態の一端を示しているのであろう。近畿北部での出土事例をさらに整理する必要があるが、集落においても何らかの祭祀に用いられたと考えるならば、他地域で出土する台付甕の持つ意義は当該期の地域間交流を考える上で軽視することはできない。

5. 小結

以上、丹後にみられる特殊な台付甕について集成と若干の検討を行った。この特殊な台付甕は後期中葉に丹後で誕生し、墳墓祭祀だけでなく集落での祭祀にも使用されたと考えた。そして、他地域においてもしばしば丹後の台付甕に影響をうけて製作されたと考えられる資料がみうけられることから、ある意味「重要な」器種であった可能性を指摘しておきたい。小稿では資料集成に終始し、その出現の契機や拡散の背景に関しては推論に推論を重ねたきらいがある。また、自身で実見しえなかった資料も少なくなく、実際の使用状況にまで踏み込んで言及することはできなかった。検討不足ではあるが、今後の課題としておきたい。

(きりい・りき＝当調査研究センター調査課調査第3係調査員)

【第2図】 1：大山墳墓群第28号主体部 2：左坂墳墓群G支群 3：古天王5号墓第10主体部 4：大山墳墓群第17主体部 5：的場遺跡 6：金谷1号墓 7・8：白米山北墳丘墓礫敷遺構 9：内和田2号墓 10：香具山城下層墳丘墓 11：大田南2号墳 12：大田南5号墳 13・14：松山遺跡 15：石田谷遺跡 16：浦入遺跡 17・18：浅後谷南遺跡 19・20：古殿遺跡

なお、遺構・遺物の実測図および写真は各報告書から引用したが、その出典の多くは紙幅の関係で省略せざるを得なかった。ご容赦願いたい。

- 注1 拙稿「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」（『京都府埋蔵文化財論集』第7集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2016
- 注2 以下、台付甕とする。
- 注3 肥後弘幸「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年（上）」（『太邇波考古』第7号 両丹考古学研究会）1995
- 注4 河野一隆「白米山北古墳」（『京都府遺跡調査概報』第57冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター）1994
- 注5 藤本康司「丹後系台付甕点描－弥生時代終末における有段口縁台付甕の様相－」（『小羽山墳墓群の研究』清水町教育委員会）2010
- 注6 本論での時期区分は高野陽子「丹後地域」（『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター）2006に拠る。三坂神社式＝後期前葉、大山式＝後期中葉、西谷式＝後期後葉とする。
- 注7 前掲・河野1994、藤本2010においても、出現の1点を示す可能性があると示唆されている。
- 注8 肥後弘幸「墓壇内破碎土器供献」（『みずほ』14・15号 大和弥生文化の会）1994
- 注9 石井智大「第2節 北近畿の弥生墳墓における二種の土器出土状況とその意義」（『香住門谷遺跡群』豊岡市教育委員会）2003
古屋紀之『古墳の出現と葬送祭祀』雄山閣 2007
- 注10 ただし、後期前葉の集落の調査事例自体が寡少であることに起因する可能性はある。
- 注11 紙幅の関係で、第5図の出典のうち、前掲・注1文献と重複するものは省略した。
芥川：橋本久和編『芥川遺跡発掘調査報告書―縄文・弥生集落跡の調査―』高槻市文化財調査報告書第18集 高槻市教育委員会 1995 5は筆者実測・製図。資料見学に際しては高槻市教育委員会、三好裕太郎氏に便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げる。
宅原（有井地区）：安田 滋・斎木 巖「31. 宅原遺跡（有井地区）」（『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会）1992
乙木・佐保庄：鈴木裕明編『乙木・佐保ノ庄遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告代第92冊 奈良県立橿原考古学研究所 2005
足守川加茂A：島崎 東編『足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡（本文）』足守川河川改修工事に伴う発掘調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94 岡山県教育委員会 1995
酒津：間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」（『瀬戸内考古学』第2号）1958
- 注12 前掲・注1文献
- 注13 吉備では津守遺跡で北陸系の甕と装飾器台が出土しており、北陸との土器交流を示す資料が散見される。それに対して、近畿北部系土器が直接搬入された例は知られていない。

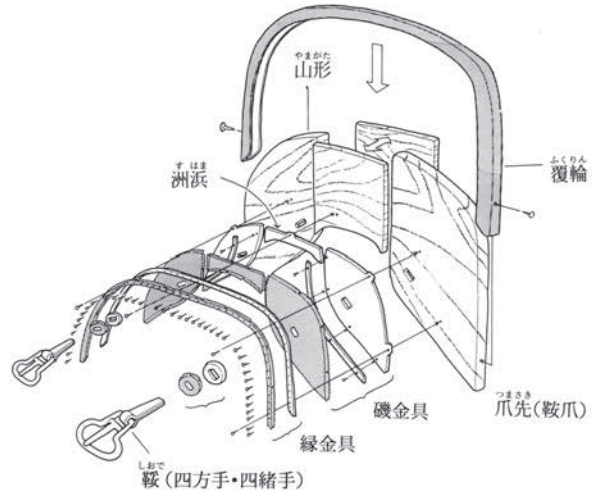
古墳時代の鞍金具における法量検討

清水早織

1. はじめに

古墳時代の鞍は様々な技術を集結させたものであり、多くの部材から構成されている。しかし、大部分は木製で製作されるため、腐食が起こり全貌を復元することが難しい。

鞍は前輪と後輪に区分され、左右の磯金具、その両者に挟まれた中央に洲浜金具を取り付ける。それらは鉄板の上に金銅板を取り付けて、縁金具を鋳で固定する構造となっている(第1図)。鞍の規格性は田中由理氏が磯金具の外形線を重ね合わせ2種類の形態に分類した。そして、磯金具の長さが共通しているとし、規格性を示した。^(注2)



第1図 後輪の鞍の構造(注1から転載)

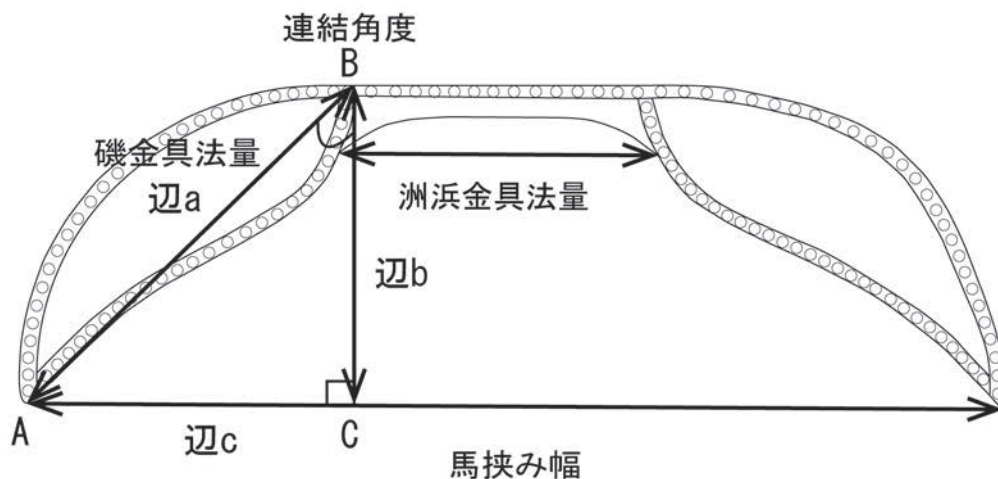
今回は、磯金具の計測だけではなく、金銅製鞍金具の各部材が規格化されているか否かについて資料を通してみていきたい。

2. 法量計測

まず、金銅製鞍金具には、磯金具と洲浜金具が繋がった状態の一体造りのものと磯金具と洲浜金具が別々に取り付けられる別造りのものがある。今回、磯金具と洲浜金具の法量がなければ計測できない部分を含むことから、別造りで製作されたものを取り扱った。法量検討では磯金具の先端部分の斜辺の数値、洲浜金具は金具の最下部両端の法量、馬挟み幅を対象として計測した。各部位の計測を行うとともに、磯金具と洲浜金具は連結していることが分かることから、その連結角度の差異についても計測を行った。計測位置は第2図に示した通りである。ただし、法量の検討を行う上で、馬挟みの法量については、数値を正確に検出するために磯金具・洲浜金具が完存していることを条件とした。時期としては、6世紀前半から7世紀前半の資料を中心として取り上げる(表1)。

なお、法量の計測においては、発掘調査報告書や論文に掲載されている図面からデータを抽出した。また、金銅板の下に鉄を使用していることから錆による形状変化のために正確な数値を計測するのは難しいことを念頭においておく必要がある。

鞍金具の前輪と後輪は基本的に同じ形状をしている。しかし、区別がないわけではない。それ

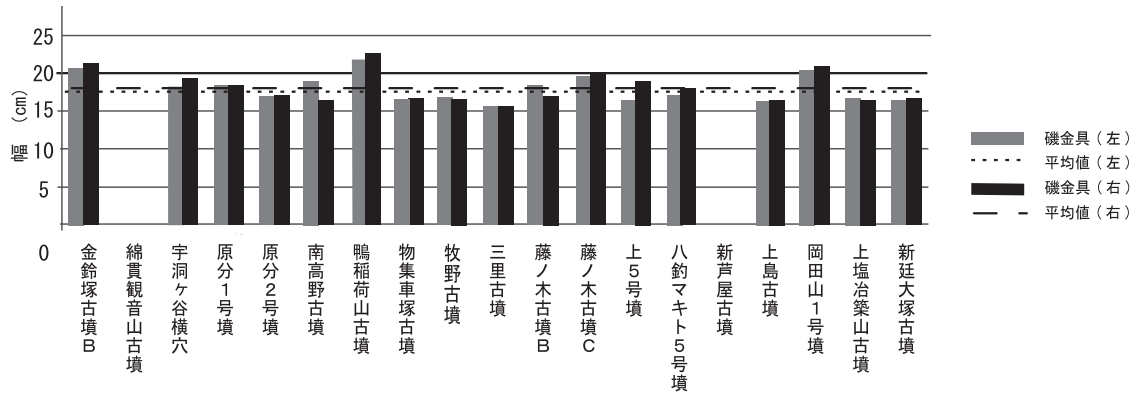


第2図 鞍計測位置模式図

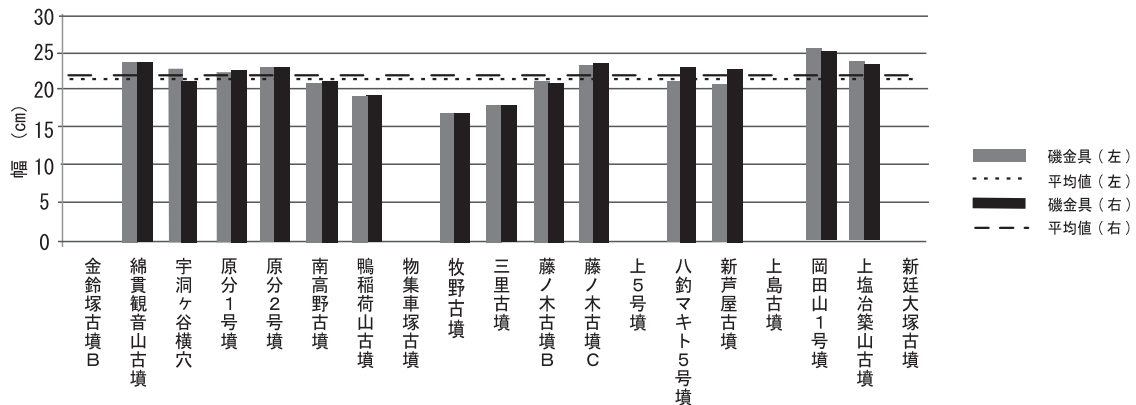
表1 法量検討資料

番号	出土古墳・ 横穴墓	出土地	磯金具 (cm)				馬挟み幅 (cm)		洲浜金具 (cm)		連結角度 (°)		参考文献
			前輪		後輪		前輪	後輪	前輪	後輪	前輪	後輪	
			計測値 (左)	計測値 (右)	計測値 (左)	計測値 (右)							
1	金鈴塚古墳 B	千葉県	20.8	21.2	—	—	—	41.2	—	—	—	—	注 3
2	綿貫観音山古墳	群馬県	—	—	23.8	23.8	30.2	41.6	—	14.9	33	38	注 4
3	宇洞ヶ谷横穴	静岡県	18.6	19.2	22.5	21.3	30.0	36.6	13.2	12.9	31	34	注 5
4	原分 1 号墳	静岡県	18.6	18.6	22.2	22.5	30.6	43.2	11.7	15.0	30	41	注 6
5	原分 2 号墳	静岡県	18.3	18.3	23.1	23.1	29.7	39.5	9.0	13.1	33	37	
6	南高野古墳	岐阜県	18.9	17.1	21.6	21.6	27.1	43.8	10.2	14.1	32	44	注 7
7	鴨稲荷山古墳	滋賀県	21.6	22.0	19.2	19.2	—	—	—	—	—	—	注 8
8	物集女車塚古墳	京都府	16.8	16.9	—	—	33.9	—	5.7	—	40	—	注 9
9	牧野古墳	奈良県	17.6	17.0	17.0	17.0	26.2	—	8.8	—	29	—	注 10
10	三里古墳	奈良県	15.6	15.9	18.3	18.3	30.6	37.7	9.6	12.2	42	46	注 11
11	藤ノ木古墳 B	奈良県	18.6	17.8	21.8	21.6	29.2	40.6	6.6	13.8	41	40	注 12
12	藤ノ木古墳 C	奈良県	19.8	20.0	23.2	23.6	34.2	40.6	10.2	13.0	37	36	
13	上 5 号墳	奈良県	17.1	18.9	—	—	30.9	—	9.9	—	36	—	注 13
14	八釣マキト 5 号墳	奈良県	18.2	18.6	21.6	23.0	—	42.6	—	13.0	—	43	注 14
15	新芦屋古墳	大阪府	—	—	20.7	22.5	—	—	—	—	—	—	注 15
16	上島古墳	島根県	17.6	17.8	—	—	31.6	—	10.4	—	36	—	注 16
17	岡田山 1 号	島根県	20.5	20.9	26.3	25.3	33.0	—	10.9	—	33	—	注 17
18	上塩冶築山古墳	島根県	17.6	17.2	23.8	23.2	29.2	43.9	10.4	15.1	33	40	注 18
19	新廷大塚古墳	福岡県	17.4	17.7	—	—	28.5	—	10.5	—	29	—	注 19
平均値			18.4	18.5	21.8	21.9	30.3	41.1	9.6	13.7	34.1	40	

は馬の尻には雲珠や辻金具、杏葉といった飾り金具を装着することから判断することができる。それらをつなぐ繫といわれるものを鞍金具で固定する。鞍金具は一部例外もあるが後輪に取り付けられることが多く、鞍金具の有無によって鞍の前輪と後輪の認識がなされている。しかし、本稿では、法量を前輪と後輪の両方を計測することで前後の関係性について数値から確認していく。



第3図 前輪礧金具法量



第4図 後輪礧金具法量

①礧金具

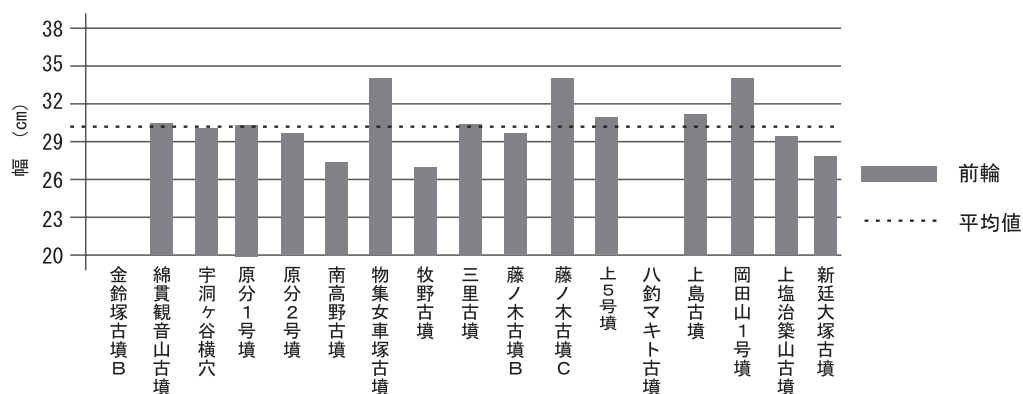
礧金具を計測するために取り扱った資料は左右の礧金具が完存しているものに限定した。計測位置は第2図の左側の礧金具に示している。第2図のA点とB点を結ぶ線「辺a」と示された斜辺の数値を計測した。なお、礧金具は左右にあることから、右側の礧金具も左側の礧金具の計測位置と同様に計測した。計測結果は表1の通りである。

その数値をグラフ化したものが第3図と第4図である。このグラフを見ると、若干の誤差は見取れるが、どの古墳から出土した礧金具も、左右ともほとんど同じ数値であることが見て取ることができる。つまりは、左右に取り付けられる礧金具は、精密に同じ形状をしていることがこのグラフから読み取れ、両者の礧金具は左右対称に製作されていると考えられる。

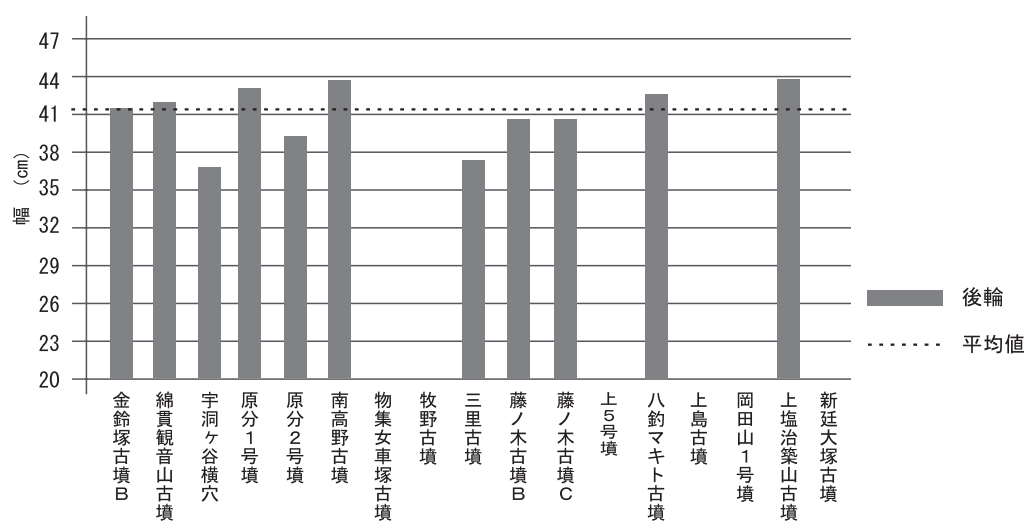
なお、前輪と後輪に分けて平均値を計測すると、前輪は左側が18.4cm、右側が18.5cm、後輪は左側が21.8cm、右側が21.9cmである。そして、前輪と後輪の礧金具が両者とも完存している資料を計測すれば、前輪の数値が後輪の数値よりも大きくなることはなく、礧金具の形状から前輪と後輪では規模に差があることが分かる。

②馬挟み幅

馬挟み幅の計測は、左右の礧金具の先端を結んだ距離を指す(第2図)。ただし、左右の礧金具と洲浜金具が完存していなければ計測することはできないので、この条件を満たす資料を計測の対象とした。この計測結果も表1に示している。表1に記載した数値をグラフ化したものが第5



第5図 前輪馬挟み幅法量



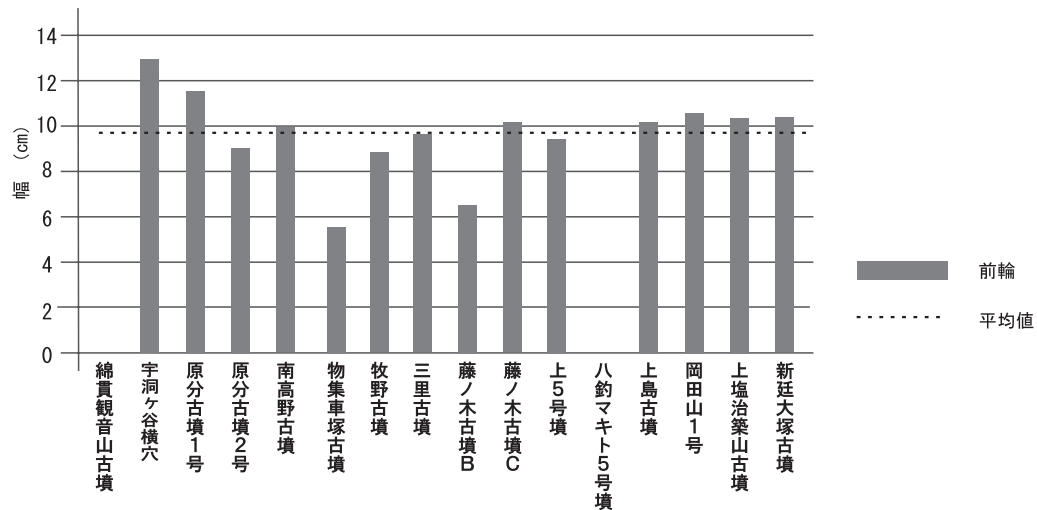
第6図 後輪馬挟み幅法量

図と第6図である。この両者は数値に多少のばらつきが認められるが、その数値が大きく変わるものではない。

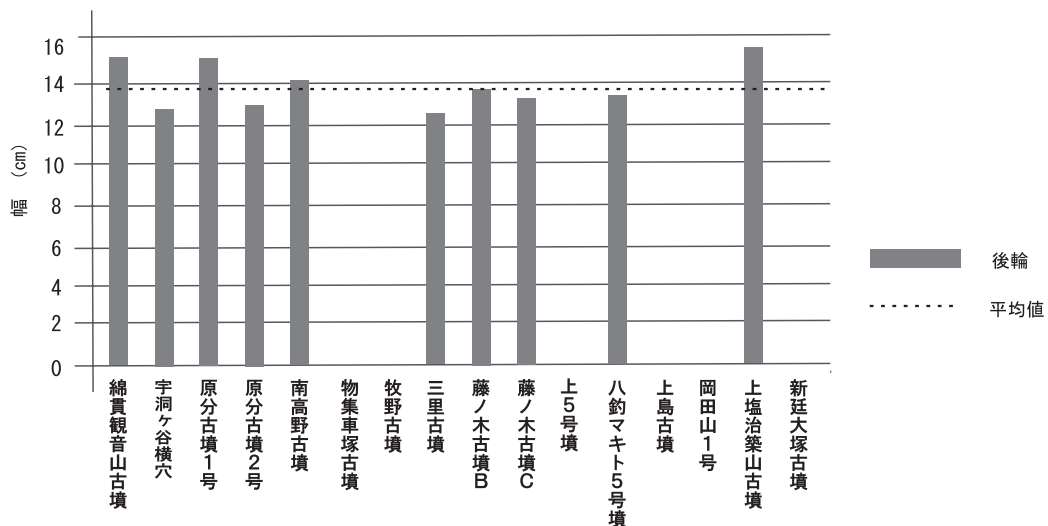
ところで、馬挟み幅の前輪の平均値は30.3cm、後輪の平均値は41.1cmという算出結果になった。その平均値を比べると、前輪と後輪で10.8cmの差が認められる。馬挟み幅に差があるということは、単純に考えると左右の磯金具の幅が離れているということである。つまり、左右の磯金具を繋ぐ洲浜金具の法量と磯金具と洲浜金具の接続部分の角度に差があると考えられるため、次はこの洲浜金具の法量を見ていきたい。

③洲浜金具

洲浜金具は、下部の爪先の先端部分の幅を計測した(第1図)。計測結果は、表1に示した通りである。第7図と第8図で個々の前輪と後輪の数値を比べても後輪の方が前輪より大きい。また、前輪の平均値が9.6cm、後輪の平均値が13.7cmである。この平均値で前輪と後輪の洲浜金具を比較しても、どの鞍金具においても後輪の洲浜金具の法量の方が大きい。ここで鞍の製作が洲浜金具の法量において前輪と後輪の規模に差がつけられていることが分かる。しかし、洲浜金具の法量のみで規模の差がついているわけではない。それを確認するには前輪と後輪の洲浜金具の法量



第7図 前輪洲浜金具法量

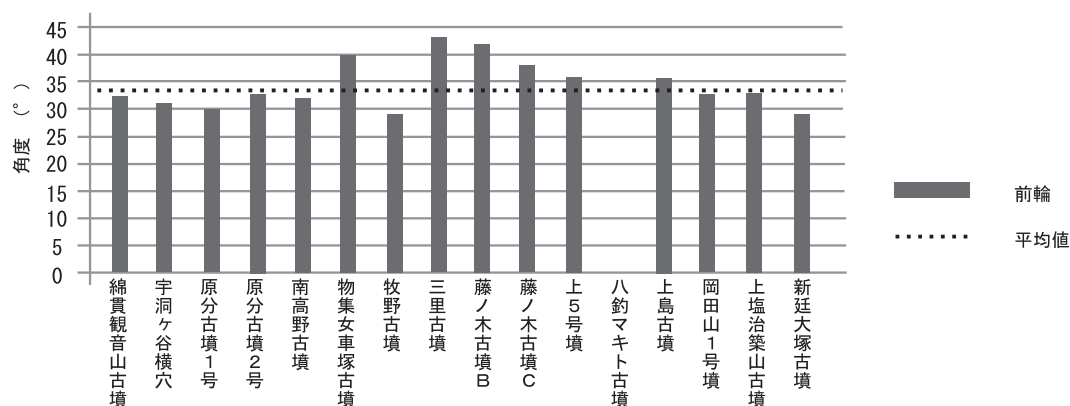


第8図 後輪洲浜金具法量

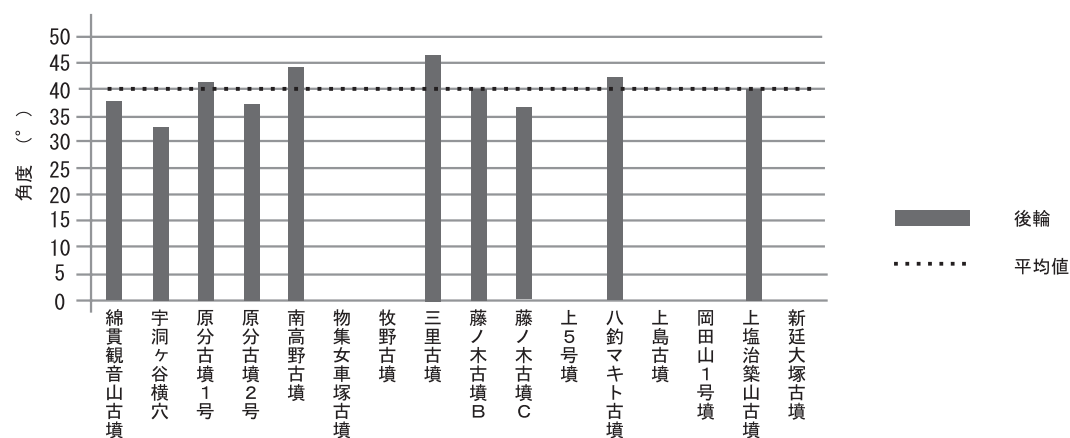
が同じか、ほぼ変わらないものを比較し、馬挟み幅の法量が異なっていることを明らかにしなければならない。ここでは、宇洞ヶ谷横穴の前輪の洲浜金具と原分2号墳の後輪の洲浜金具について見ていきたい。宇洞ヶ谷横穴の前輪の洲浜金具は13.2cmで原分2号墳の後輪の洲浜金具は13.1cmである。両者の洲浜金具は0.1cmの差異しか見受けられないが、馬挟み幅の数値が9.5cmも異なる。洲浜金具の法量がほぼ同じであるにも関わらず、馬挟み幅の法量に差がある。つまり、馬挟み幅の法量が確定するのは洲浜金具の法量だけではないということである。それは、洲浜金具と磯金具の接続部分における連結している角度の差が、関係していると考えられる。次にこの角度の差(以下、連結角度と称する)を計測することによって金銅製鞍金具を製作する際に、法量だけでなく角度も関係していることを見ていきたい。

④連結角度

これまで、磯金具、馬挟み幅、洲浜金具といった直線的な法量を計測してきたが、これらは部材単体の法量であった。馬挟み幅においてはこの連結角度の計測方法に関しては若干の工夫をほ



第9図 前輪連結角度



第10図 後輪連結角度

どこした(第2図)。まず、先述した磯金具の先端部分のA点とB点を繋ぐ磯金具の法量の部分を辺aとし、B点と馬挟み幅の線上に90°のばした線で直角三角形を作る。その際に磯金具と洲浜金具が接続されている角度を連結角度とした。その結果、計測した結果は表1の通りである。第9図と第10図で前輪と後輪がそろっている資料を個々で見比べても前輪より後輪の方が角度が広がっていることが分かる。また、全ての連結角度の平均値は、前輪が34.3°、後輪が40°であり、この平均値からも前輪と後輪の大きさの関係は後輪の方が大きいことが分かる。

3. まとめ

今回、金銅製鞍金具の各部材の計測を行った。磯金具、馬挟み幅、洲浜金具、連結角度について順番に見てきたが、磯金具は前輪の左側が18.4cm、右側が18.5cmで、後輪では左側が21.8cm、右側が21.9cmという平均値が検出できた。前輪・後輪ともに計測した左右の磯金具の法量はほとんど変わりのないものであり、磯金具の形状だけで見ると左右対称に製作されていることが分かる。磯金具の後輪は前輪より大きく製作されている。馬挟み幅も前輪と後輪との平均値では10.8cmの差異が確認され、後輪は前輪より大きく製作されていることが分かる。また、その馬挟み幅の確定は洲浜金具の長さや磯金具の傾きによって変化した。その連結角度においても、前輪

は34.1°で後輪は40°という平均値を確認した。法量だけでなく連結角度においても大幅に異なる角度が表れることはなかったことから、金銅製鞍金具の各部材の法量だけでなく、左右の磯金具の傾きにも規格があったと考えられる。

金銅製鞍金具の各部材の法量計測により鞍製作に規格性があったと考えられる。今回計測したどの部分においても、前輪と後輪の関係性は、後輪の方が前輪より馬挟み幅が大きく製作されているということが明らかになった。この関係性は馬の体形が関係していると考えられる。また、鞍は馬に装着させる際に、馬の皮膚を傷つけないためのクッションとして使用された下鞍を装着させる。そのクッションが馬の腰と鞍の間に挟まれており、馬挟み幅が馬の腰幅に合う規模で製作されているとは考えにくい。一方、馬の背で鞍を固定し、安定させるためには前輪と後輪の馬挟み幅に馬の体形に合わせて違いを持たせる必要があり、規格性を持って製作されたと考えられる。また、各鞍は汎用性を持たせるために実際の馬の体形よりも少し大きく製作されていることも考えられる。馬の体格との関係性は今後の課題としたい。

(しみず・さおり＝当調査研究センター調査課調査第2係調査員)

- 注1 『黄金に魅せられた倭人たち』 島根県八雲立つ風土記の丘資料館 1996
- 注2 田中由理「馬具製作における技法の差異と規格性」(『菟原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論文集－』菟原刊行会) 2012
- 注3 宮代栄一「金鈴塚古墳出土馬具の研究」(『金鈴塚古墳研究』第2号 木更津市郷土博物館金のすず)2014
- 注4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫観音山古墳Ⅱ石室・遺物編』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第225集 群馬県教育委員会・(財)群馬県文化財調査事業団 1999
- 注5 静岡県教育委員会『掛川市宇洞ヶ谷横穴発掘調査報告』静岡県文化財保存協会 1971
- 注6 鈴木一有『原分古墳 平成19年度(都)沼津三島銭重点街路整備事業(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 調査報告編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第184集 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008
- 注7 青木健太郎 他『南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡 岐阜県文化財保護センター調査報告書』第51集 (財)岐阜県文化財保護センター 2000
- 注8 小野山節「琵琶湖周辺の6世紀を探索」(『平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査研究成果報告書』 京都大学文学部考古学研究室) 1995
- 注9 向日市教育委員会『物集女車塚古墳』向日市教育委員会 1988
- 注10 広陵町教育委員会『史跡牧野古墳』奈良県立橿原考古学研究所 2005
- 注11 右島和夫『平郡・三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第33集 奈良教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1977
- 注12 奈良県立橿原考古学研究所編『斑鳩藤ノ木第一次調査報告書』 1990
- 注13 奈良県立橿原考古学研究所編「上5号墳」(『奈良県文化財調査報告書』第92集) 2003
- 注14 明日香村教育委員会文化財課編『明日香村遺跡調査概報－平成11年度－』 1999

注15 新芦屋古墳においては筆者が資料調査において実際に計測した数値である。

注16 『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第17集 出雲市教育委員会 2007

注17 西尾良一『出雲岡田山古墳』 島根県教育委員会 1987

注18 松尾充晶『上塩冶築山古墳の研究』 島根県古代文化センター調査研究報告書4 島根県教育委員会・島根県古代文化センター 1999

注19 「新廷大塚古墳」(『鞍手町文化財調査報告』第3集 鞍手町教育委員会) 1985

謝辞

本論は2015年に提出した修士論文を一部加筆修正したものである。執筆するに当たって当時担当教員である奈良大学文学部の豊島直博先生、副担当教員坂井秀弥先生に暖かいご指導とご鞭撻を得たことを記したい。また資料調査やご意見、ご教示などを以下の方々から賜った。(敬称略)

安倍みき子、諫早直人、梅本康広、大江克己、岡田大、春日井恒、阪口英毅、澤田正明、清水篤、高木清生、高橋真希、田中由理、塚本敏夫、中西克宏、西田絢香、初村武寛、花谷浩、桃崎祐輔、森本徹

美濃山廃寺出土新羅系軒丸瓦について

筒井崇史

1. はじめに

美濃山廃寺は、京都府八幡市美濃山古寺に所在する古代寺院である(第1図)。昭和初期から軒瓦などが出土することや「古寺」という小字名などから古代寺院の存在が考えられていた。昭和52年に初めて発掘調査が行われ、瓦や掘立柱建物などが確認されたものの、寺院の概要を明らかにするまでには至らなかった。^(注1)その後、平成11～15年の5か年にわたって、八幡市教育委員会による美濃山廃寺の範囲確認調査が行われた。その結果、寺域がほぼ確定するとともに寺域の内外で多数の掘立柱建物が検出された。しかし、礎石建物や基壇等は確認できず、塔や金堂は発見されなかった。一連の調査で出土した遺物から美濃山廃寺は奈良時代前半ごろに創建され、平安時代前期には廃絶したものと考えられた。^(注2)

その後、新名神高速道路の整備事業が本格化するとともに、美濃山廃寺の立地する丘陵に対する開発計画が明らかになり、関係機関と調整の上、当調査研究センターと八幡市教育委員会が調査を実施することとなった。調査は平成23・24年度に実施し、その調査の成果についてはすでに報告済みである。^(注3)これらの報告によって、美濃山廃寺の寺院としての構造や変遷を明らかにするとともに、美濃山廃寺における渡来系要素の存在を指摘した。

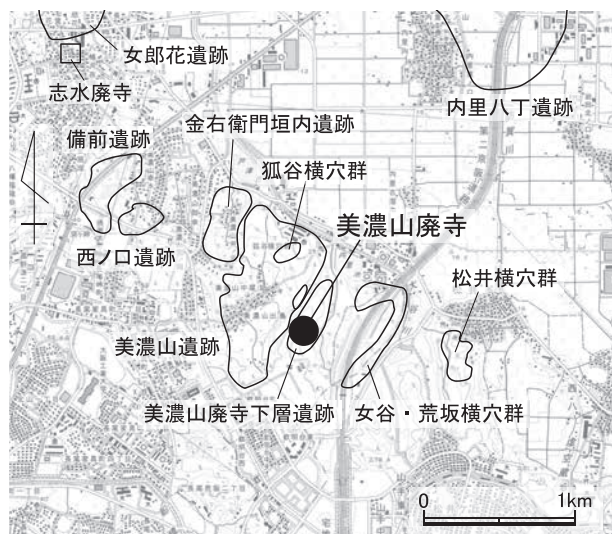
本稿では、報告で指摘した美濃山廃寺における渡来系要素のうち、新羅系とされる軒丸瓦について再検討を行い、この軒丸瓦の出自について私見を述べることにしたい。

2. 新羅系軒丸瓦と美濃山廃寺

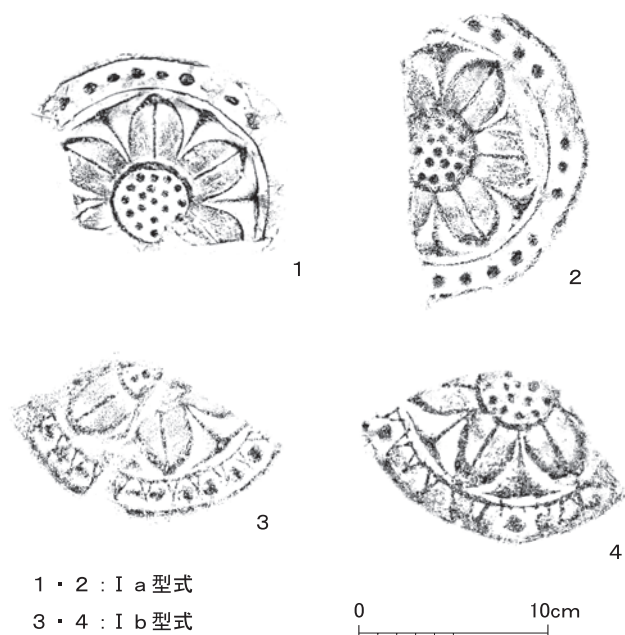
①美濃山廃寺出土の新羅系軒丸瓦

報告では美濃山廃寺軒丸瓦Ⅰ型式に分類しており、範の掘り直しから細分型式としてaとbに分けることができる(第2図)。

軒丸瓦Ⅰ型式は、単弁六葉蓮華文で、瓦当径16cm前後に復元できる。Ⅰa型式(第2図1・2)は内区の各蓮弁の中央には稜線を入れ、根元が窪み、弁端にいくにしたがって反り上がっている。中房の蓮子は1+6+16である。外区には大粒の珠文が密にめぐっている。このことが本型式の大きな特徴となっている。瓦当と筒部は、瓦当裏面上端で接合する。接合部である瓦当裏面にはヘラに



第1図 美濃山廃寺および主要遺跡分布図
(国土地理院 1/50,000 京都南西部)



第2図 美濃山廃寺出土軒丸瓦Ⅰ型式拓影

を施し、刻みは認められない。瓦当側面は縦方向のケズリである。瓦当部上面はナデ、丸瓦筒部凸面はケズリ、凹面は布目である。胎土、焼成、色調はほぼⅠa型式に準じる。なお、先述の九頭神廃寺では、この軒丸瓦と同範もしくは同文様のものは出土していない。

②美濃山廃寺の概要と軒丸瓦Ⅰ型式の出土状況

美濃山廃寺では、近世以降の農地開墾等により、大きく攪乱を受けており、発掘調査では塔や金堂の痕跡を確認することはできなかった。しかし、寺域を区画する一辺93～96mの方形区画の存在や礎石と掘立柱を併用した建物跡、多数の掘立柱建物を検出し、さらに大量の瓦類の出土から一定の寺観を整えた寺院跡であることが明らかになった(第3図)。そして、瓦が集中的に出土した寺域南部に塔や金堂が存在した可能性が高いと考え、「金堂相当施設」を推定した。

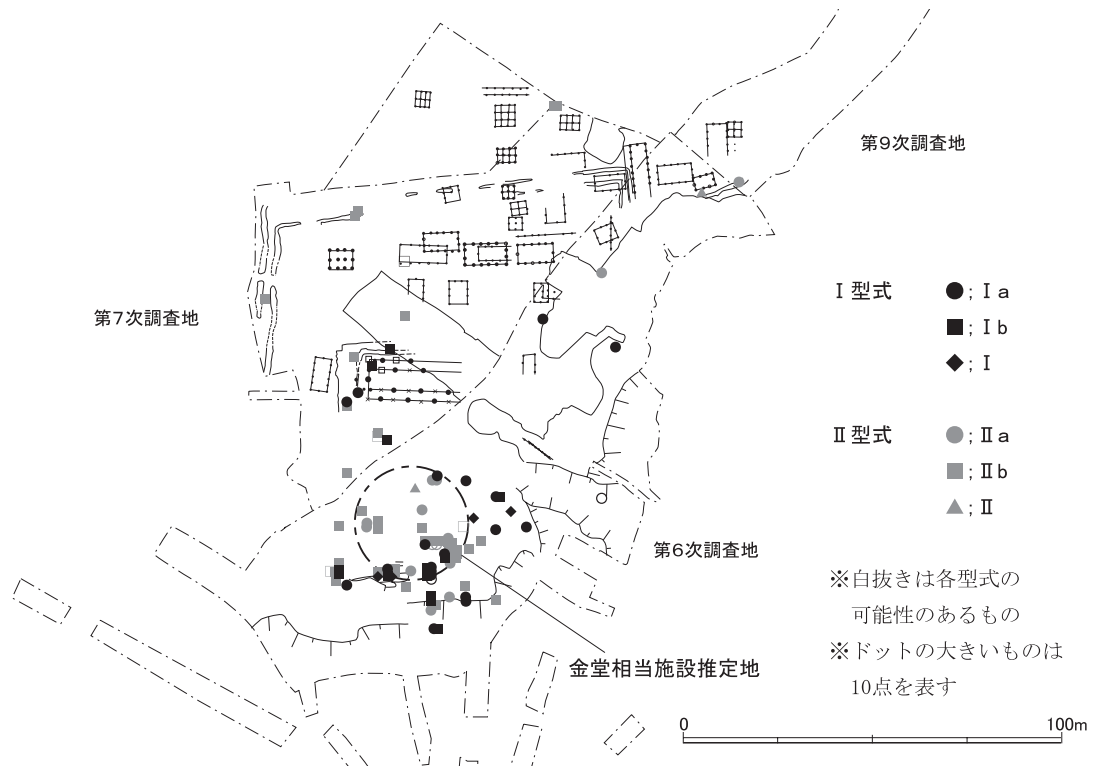
ところで、美濃山廃寺では軒丸瓦を9型式、軒平瓦を3型式確認した。このうち、軒丸瓦Ⅲ型式以降のものは寺域の拡充期や堂宇の補修時のものと考えている。また、軒平瓦には軒丸瓦Ⅰ型式と組み合うものはないと考えている。

軒丸瓦Ⅰ型式は、上述の「金堂相当施設」の推定地とした寺域の南部で集中して出土した(第3図黒点の分布)。Ⅰa・Ⅰb両型式を合わせて47点^(注5)が出土している。ただし、金堂相当施設推定地周辺では、軒丸瓦Ⅱ型式(複弁八葉蓮華文)の出土点数(131点)がⅠ型式の出土点数を大きく上回っており、その出土量からⅡ型式が美濃山廃寺の創建瓦と判断した。しかし、Ⅰ型式も一定の出土量がみられることや型式学的に古い特徴を有することなどから、Ⅰ型式もⅡ型式とともに、美濃山廃寺の創建瓦の1つである可能性を考えた。

③美濃山廃寺の時期区分

美濃山廃寺では、上記の瓦類の分析や出土器の型式、遺構の重複関係などから、大きく4期区分(第Ⅰ～Ⅳ期)の遺構の変遷を考えている。このうち、第Ⅰ期が軒丸瓦Ⅰ型式と同Ⅱ型式が使用

より刻みを入れる。瓦当部側面はケズリあるいはナデで調整し、裏面の調整はナデである。色調は黒灰色ないし青灰色を呈する。胎土は密で、砂粒をほとんど含まない。焼成は軟質なものが多い。大阪府枚方市九頭神廃寺出土軒丸瓦K Z M24型式と同文様^(注4)である。Ⅰb型式(第2図3・4)は内区の特徴はほぼⅠa型式と同じであるが、外区に線鋸歯文を施す点が異なる。線鋸歯文は本来の範を掘り直すことで追加されており、Ⅰb型式がⅠa型式に後出することは明らかである。また、瓦当と筒部の接合部である瓦当裏面にはナデ



第3図 美濃山廃寺遺構配置図および軒丸瓦 I・II 型式出土分布図

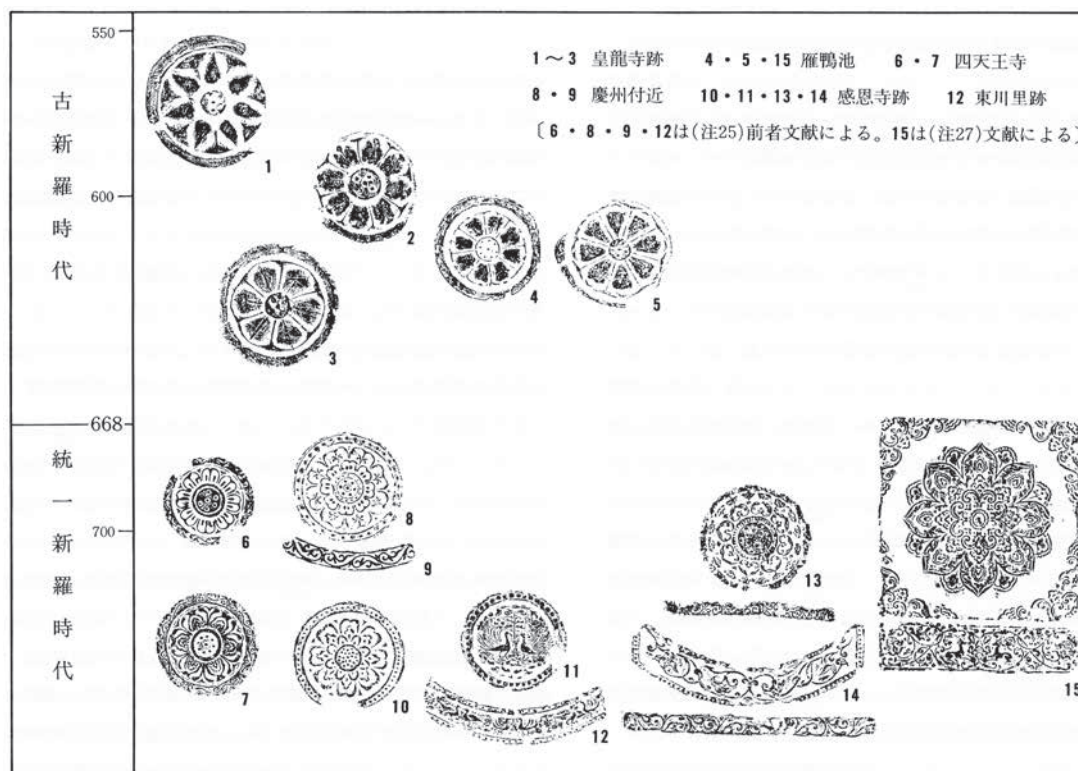
された、美濃山廃寺の創建期と考えている。その年代については、出土した土器等から7世紀後半～8世紀初頭の年代を与えた。

3. 軒丸瓦 I 型式の再検討

①軒丸瓦 I 型式と新羅出土軒丸瓦の比較

軒丸瓦 I 型式の最大の特徴は、外区に大粒の珠文を密にめぐらせる点である。このように外区に珠文をめぐらす軒丸瓦について、亀田修一氏は「外区に珠文だけをめぐらすものは日本ではあまりみられず、新羅の瓦では比較的多くみられる特徴」と指摘されている。^(注6) 亀田氏が作成された新羅軒瓦の変遷図(第4図)によると、外区に珠文を有するものとして8・10がある。これらの内区には蓮華文や宝相華文を主体とし、かつ複合花文となっているものも多いという。8は慶州市雁鴨池で出土したもので、創建時の軒丸瓦とされる資料であるが、同時期の軒平瓦の類例資料に「儀鳳四年(679年)」銘のものがあることからそのころのものと推定されている。また、10は同じく慶州市感恩寺で出土したもので、8のような軒丸瓦から変化したものとされるが、感恩寺の創建は『三国遺事』によると、「682年創建」と伝えられている。こうした年代観から8や10のような軒丸瓦は、668年の三国統一以降の統一新羅時代に盛行するとされている。^(注7)

一方、稲垣晋也氏によれば、珠文(なお、稲垣氏は「連珠文」と表記されているが、以下でも「珠文」と表記する)を有する軒丸瓦は、唐の2代皇帝太宗(在位626～649年)の陵墓である昭陵で使用されていた軒丸瓦にみられ、初唐(7世紀代)にこうした珠文が盛行するという。^(注8) これが70年代には新羅に伝わったとされる。



第4図 新羅軒瓦変遷図(注7文献より引用)

次に、内区の単弁蓮華文は統一新羅以前(古新羅時代)の軒丸瓦によく見られ、その外区外縁は素縁文であることが多い(第4図2・3)。また、必ずしも6葉とは限らず、8葉の例も多い。第4図の2・3はともに皇龍寺跡出土資料で、特に3は同文様のものが芬皇寺跡、雁鴨池などで出土しており、その後の統一新羅時代に創建された寺院からは出土していないことから、7世紀前半から680年代まで使用されたと考えられている。

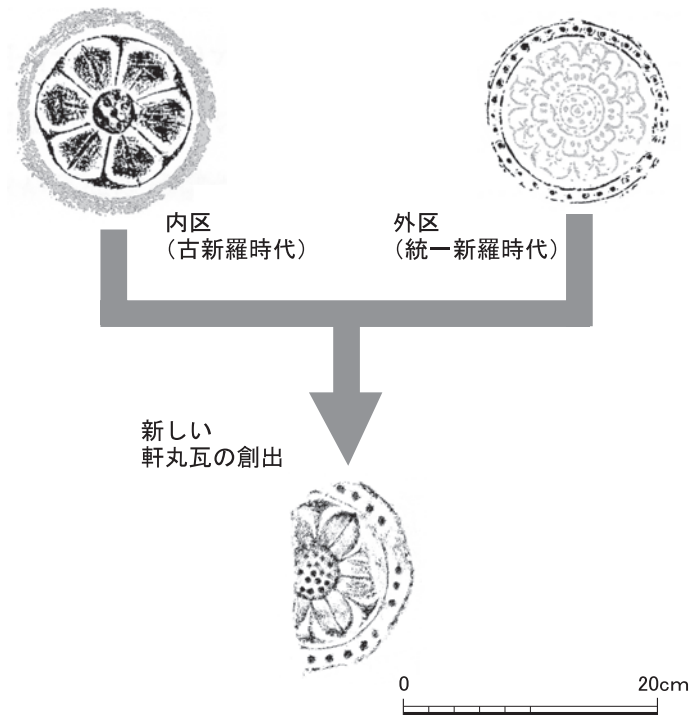
②軒丸瓦Ⅰ型式の創出とその年代

以上の点をふまえて、軒丸瓦Ⅰ型式の特徴をまとめると、内区に古新羅時代の軒丸瓦の特徴とされる単弁六葉蓮華文を配するのに対して、外区に統一新羅時代以降に顕著になる珠文を配していることになる。すなわち「新旧の要素が複合した軒丸瓦」ということができる(第5図)。なお、稲垣氏はこうした外区の珠文が新羅を経由して初唐の瓦様式の影響を受けたものとの考え方を示^(注9)しておられる。

軒丸瓦Ⅰ型式の特徴を以上のようにまとめると、このような軒丸瓦がどこで考案、製作されたのが問題になる。しかし、今のところ、この軒丸瓦の考案地やその製作地を明らかにするための材料に乏しいのが実情である。朝鮮半島の実態は不明であるが、日本国内における同文様の例が美濃山廃寺と九頭神廃寺に限られること(かつ両者は同範ではない)は、両寺院の近くで生産されたと考えることは可能であろう。したがって、考案地も両寺院の周辺であると考えた方がよさそうである。このように考えるならば、新羅による朝鮮半島の統一後、間もない頃に外区の珠文に関する情報が日本に伝わり、それまでの内区の文様に、新たな外区の珠文を複合させた新しい

軒丸瓦を日本国内で創出したと考えることができよう。

その製作時期については、以上のような過程あるいは影響が想定できるとすれば、軒丸瓦Ⅰ型式の出現は、外区における珠文の存在から、新羅による朝鮮半島の統一以降であることになる。その具体的な時期は、断定しにくいだが、古新羅時代の軒丸瓦の特徴を残していることからみて、7世紀第4四半期と考えるのが妥当であろう。このことは、同じく外区に珠文を有する軒丸瓦Ⅱ型式の存在とともに、美濃山廃寺の創建年代を7世紀後半ないし末と想定した報告時の見解ともうまく整合する。



第5図 軒丸瓦Ⅰ型式創出過程(イメージ)

4. まとめ

八幡市に所在する美濃山廃寺出土の新羅系とされる軒丸瓦について検討を加えた。瓦当文様の比較による検討にとどまり、製作技法について議論することができなかった。しかし、報告時に十分な検討ができていなかった新羅系軒丸瓦について、先行研究の成果を参考にしながら、多少なりともまとめることができたのではないかと考えている。ただ、軒丸瓦Ⅰ型式が美濃山廃寺の創建瓦の1つとして採用された経緯については明らかにできなかった。

軒丸瓦Ⅰ型式が主体的でない点を踏まえれば、必ずしも渡来系氏族を美濃山廃寺の造営氏族と断定することはできない。しかし、美濃山廃寺をめぐる渡来系要素は軒丸瓦だけにとどまらず、ほかにも見出すことができる。今回は触れることができなかったが、これらも合わせて検討しなければ美濃山廃寺の造営氏族や造営の背景を明らかにすることは困難と考える。今回検討できなかった遺物や遺構についても機会を見て再検討を加えることにしたい。

(つつい・たかふみ＝当調査研究センター調査課調査第3係主査)

注1 江谷寛『美濃山廃寺発掘調査報告』八幡市教育委員会 1977

注2 大洞真白『美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査(1～5次)報告書』(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第39集 八幡市教育委員会) 2006

- 注3 ①村田和弘・関広尚世ほか「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013
- ②筒井崇史・山崎美輪ほか「美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013
- ③小森俊寛・大洞真白ほか「美濃山廃寺(第8次)・美濃山廃寺下層遺跡(第11次)発掘調査報告書」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集 八幡市教育委員会) 2013
- ④竹原一彦・加藤雅士ほか「八幡インター線関係遺跡発掘調査報告 八幡美濃山廃寺第9次・美濃山廃寺下層遺跡第12次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第160冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2014
- 注4 竹原伸仁『九頭神遺跡－九頭神廃寺－』(『枚方市文化財調査報告』第32集 枚方市教育委員会) 1997
- なお、九頭神廃寺の瓦当径は17.1cm前後と美濃山廃寺のものよりも一回り大きいのが特徴である。
- 注5 ただし、個体数ではなく、破片の点数である。軒丸瓦Ⅱ型式についても同様である。
- 注6 亀田修一「朝鮮半島からみた枚方の寺院と瓦生産」(『枚方歴史フォーラム 継体大王と渡来人』大巧社) 1998
- 注7 亀田修一「百済の瓦・新羅の瓦」(『佛教藝術』第209号 毎日新聞社) 1993
- 注8 稲垣晋也「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅的要素」(『新羅と日本古代文化』吉川弘文館) 1981
- 注9 注8文献

4. ^{しもみずし}下水主遺跡第 8 次 (L・M・O 地区)

所在地 城陽市寺田今橋

調査期間 平成27年4月24日～10月9日

調査面積 6,000m²

はじめに 下水主遺跡は城陽市の南西部に位置し、木津川右岸の微高地とその後背湿地に立地する遺跡である。遺跡は南北1,200m以上、東西540m以上と広範囲に分布する(第1図)。今回の調査は、一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。

調査地は、遺跡の北端にあたるO地区と、平成26年度に調査を実施したL・M地区の隣接地に当たる。(今回の調査地をL2区・M2区と呼称する：第2図)。

調査概要 今回の調査は、平成26年度の調査で確認された島畑の全容と縄文時代晩期の氾濫流路の延長部を明らかにすることを目的として調査を実施した。また、M地区とL地区の境界が、東西方向の坪境部分にあたることから、その坪境における島畑の状況を明らかにすることにも留意して発掘調査を実施した。

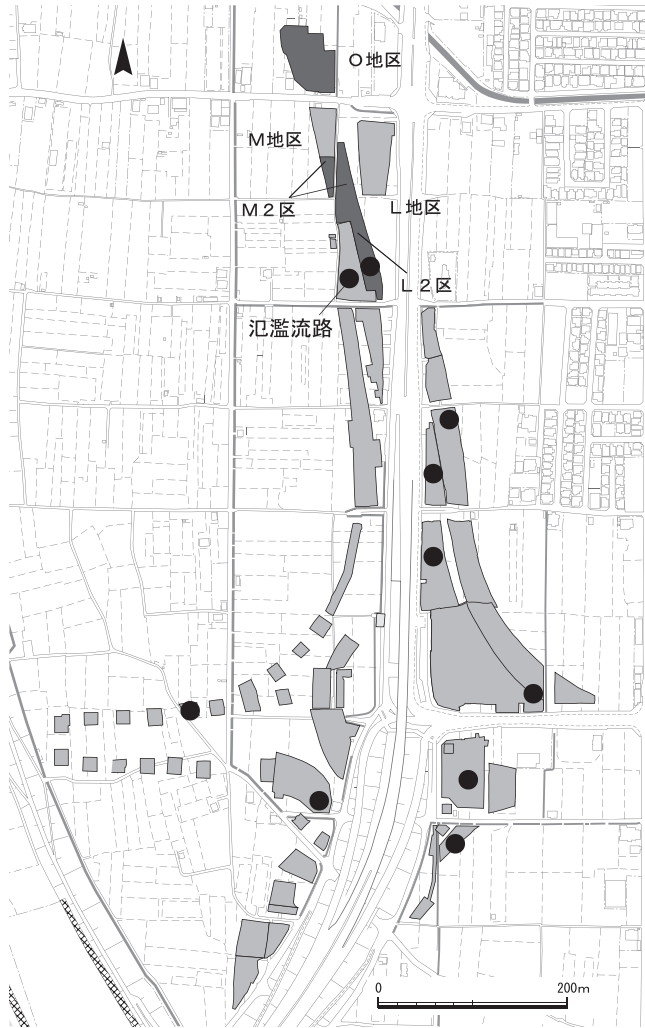
①上層遺構(第3図) L2区では、南北方向の島畑3か所を検出した。いずれも平成26年度に確認している島畑の北半部にあたる。島畑69は幅9.5m、長さ46m以上、島畑71は幅7.2m、長さ68.6mであることが明らかとなった。また、L2区西端で検出した島畑72は、他の島畑のような



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 宇治)

堅く締まった黄褐色系のシルトである基盤層の削り出しが認められず、小河川の堆積層である粗粒砂上面に盛土を行って島畑を造成していた。島畑72は幅9.3m、長さ20.9m以上で、断面観察では島畑71の造成後、一時期遅れて造成されていることが明らかとなった。

M2区では、西半部で平成26年度に検出した島畑80の南延長部を検出し、長さが60m以上であることを明らかにすることができたが、南端部分は調査地外となり確認できなかった。また、調査区東側で南北方向の島畑90を検出した。島畑90は幅11m、長さ35.4m以上で、南半部部分を検出したものの北端部は調査地外となり、確



第2図 下水主遺跡・水主神社東遺跡調査区配置図
(●：縄文遺構・遺物検出地点)

時代の遺構を検出した。弥生時代の遺構としては、島畑80の北半部で円形の土坑2基(S K51・75)が、島畑90の南半部で土坑2基(S K68・69)がある。

S K51は、東西83cm、南北55cm、深さ21cmの楕円形土坑である。S K75は、直径30cm、深さ10cmの円形土坑である。S K69とS K68は約3mと近接した位置にあり、S K68は東西125cm、南北205cm、深さ33cm、S K69は東西185cm、南北330cm、深さ56cmで、いずれも弥生時代中期の土器が出土した(写真1)。また、S K69では土器とともに有茎式石鏃・石槍各1点が出土した。

L2区では明確な弥生時代の遺構は検出できなかったが、島畑の基底面を除去し、さらに掘り下げたところ、標高13.5m付近で平成26年度のL地区調査で検出した縄文時代晩期の氾濫流路を3条検出した(第4図)。

これらの流路は、軟弱な堆積土が木津川の洪水による強い力で生じた氾濫流路である。流路内には極粗粒砂・粗粒砂・細粒砂・シルトが何層にも堆積していた。さらにシルト層を中心に倒木・流木・堅果類の種実などが多量に出土した。

認できなかった。

島畑90の南では、N地区で検出した島畑73の西端部分を検出した。島畑73は島畑72と同様、泥質細粒砂を基盤として成形したものである。なお、島畑上面で認められ耕作土と判断した堆積土からはイネ科植物の花粉が多量に出土している。

島畑73の南側の条里坪境ラインでは、上面幅3.0m、深さ2.0mの幅広で深い東西溝を検出した。

O地区では、南北方向の島畑を5か所検出した。島畑92・93は幅8m、長さ約65mで、島畑の配置は南北方向の長地形を呈している。各島畑間の溝底部には、排水を意図した溝幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.3mの小溝が島畑に平行して数条掘削されている。

②下層遺構 島畑の調査終了後、島畑上面から10～15cm掘削して、島畑造成以前の下層遺構の調査を実施した。その結果、O・L2区では検出できなかったが、M2区では島畑の基底面で、弥生

果、O・L2区では検出できなかったが、M2区では島畑の基底面で、弥生

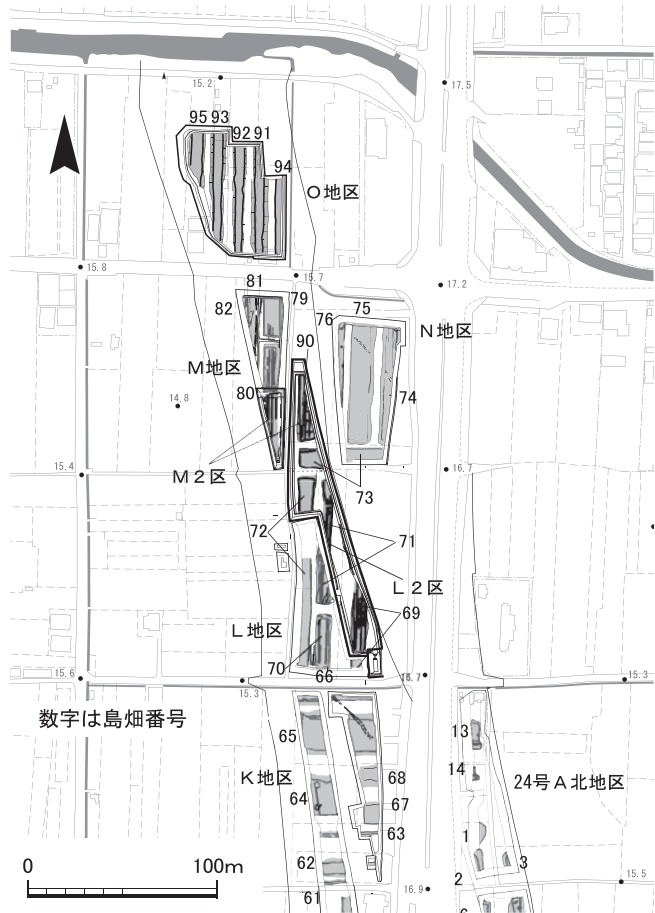
最下層の流路N R60は、砂粒の状況から北西から南東方向に流れており、さらに東側に延びているものと思われる。流路N R60の上面最大幅(南北)は40mである。なお、狭い調査区であるため安全を考慮して流路の底まで調査していないが、流路の深さは1.5mまで確認した。流路内からは大木のほか、堅果類の種実などが多量に出土した。土器は出土しなかったが、植物遺体の放射性炭素年代測定では 2820 ± 30 年yrBPという年代を得ている。

流路N R60が埋没した後、新たに洪水によって生じた上面幅9.8～17.1mの流路N R42がある。流路N R42も流路N R60と同様、大木に混じって堅果類の種実が多く含まれていた(写真2)。平成26年度の調査では、多数の土器が出土しているが、今回の調査では、コンテナ・バット1箱にも満たない出土量である。出土した縄文土器の中には篠原式浅鉢がある。なお、流路N R42の植物遺体の放射性炭素年代測定では 2730 ± 30 年yrBPという年代を得ている。

流路N R42のさらに上層には調査区東壁の観察で幅3.4～5.9m、深さ0.6～0.8mの流路N R38を確認しているが、平面としては明確に確認することができなかった。流路N R38では土器の出土はなかったが、植物遺体の放射性炭素年代測定では 2290 ± 30 年yrBPという年代を得ている。

③出土遺物 調査面積6,000㎡に対して出土遺物はコンテナ・バットで27箱である。出土遺物の内容は、13世紀以降の土師器・陶磁器、弥生時代中期の壺・甕・高杯、石鏃・石槍の石製品、縄文時代晩期の浅鉢などである。

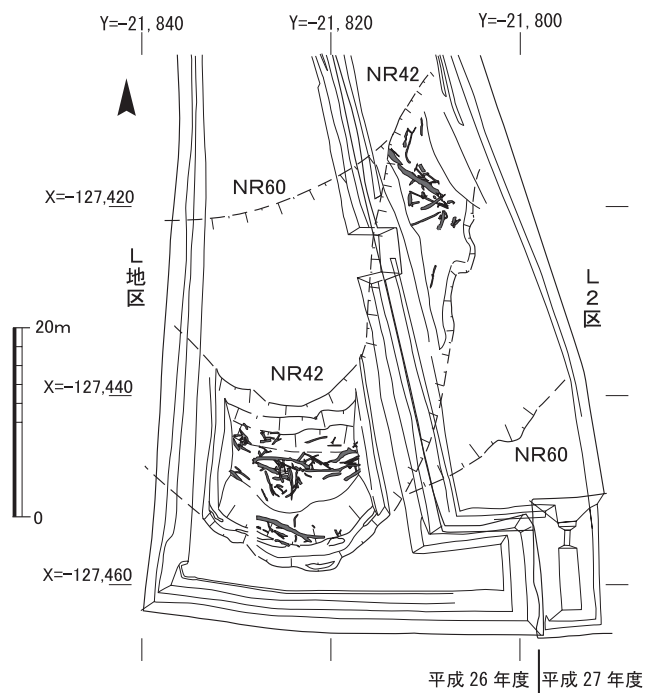
まとめ 下水主遺跡第8次(L・M・O地区)調査では、島畑を検出するとともに、下層遺構として弥生時代の土坑や縄文時代の流路を検出した。今回の調査成果をまとめると、以下の通りで



第3図 下水主遺跡北辺部検出島畑分布図



写真1 M2区土坑S K68・69全景(北から)



第4図 L2区流路NR42・60平面図



写真2 L2区流路NR42樹木出土状態

多くの自然木や堅果類の種実が埋没していた。現在、種実や樹木の種類について分析中であるが、縄文時代晩期の調査地周辺における植生の復原や栽培食物の有無について検討できる材料が得られることと思われる。

ある。

①平成26年度の調査で検出していた島畑の規模を明らかにすることができた。

②島畑は一斉に造成されたのではなく、島畑72のように一時期遅れて造成されているものが存在することが明らかとなった。

③島畑73は、花粉分析の結果、イネ科植物の花粉が多量に含まれていることが明らかとなった。高まりの上で稲作を行っていたのか、今後の検討課題である。

④下層遺構として弥生時代中期の土坑を検出した。弥生時代の遺構は、平成26年度のL・M地区のほか、今回の調査区の東にあるN地区でも確認しており、竪穴建物などの検出には至っていないものの、周辺に弥生時代中期の集落が存在したと思われる。

⑤L2区南部で縄文時代の流路を3条検出した。この流路は、放射性炭素年代測定結果からみると、縄文時代晩期の100年前後の間に洪水による強い力で生じた流路であることが確認できた。

⑥流路内には流木あるいは倒木などの

(石井清司)

5. さえき 佐伯遺跡第 7 次

所在地 亀岡市葦田野町佐伯

調査期間 平成27年 5 月25日～12月 4 日

調査面積 4, 920㎡

はじめに 佐伯遺跡は、亀岡市葦田野町佐伯に所在する平安時代から中世にかけての遺物が出土する散布地として知られている遺跡である(第 1 図)。西側の丘陵裾部には佐伯古墳群が所在する。

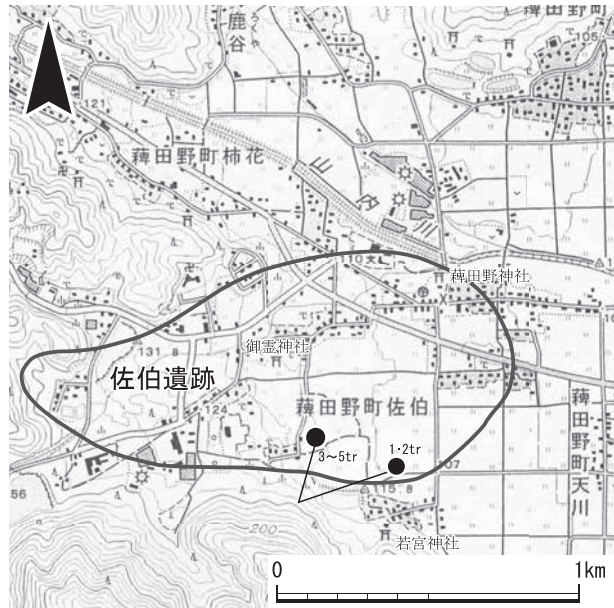
これまで 6 度の調査が実施され、平成18 年度(第 1 次調査)の菰川の河川改修および付け替え工事に伴う試掘調査で縄文土器や中近世の土器が出土したが、明確な遺構は検出できなかった。

今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受け、京都府教育委員会と亀岡市教育委員会の調査結果を踏まえ、5 か所のトレンチを設定して発掘調査を実施した(第 2 図)。

調査概要 調査地周辺は畑地および水田地帯であり、西から東へ緩やかに傾斜し、各調査トレンチでは現地表面(耕作土上面)から約20cmの深さで遺構を検出した。遺構を検出したのは 1・4・5 トレンチで、そのほかのトレンチは少量の遺物が出土したのみであった。

① 1 トレンチ 自然流路 1 条を検出した。自然流路からは平安時代の須恵器杯蓋を転用した硯や中世の土器片が多く出土し、これらに混じって縄文時代中期(約5,500～4,500年前)の土器片が出土した。

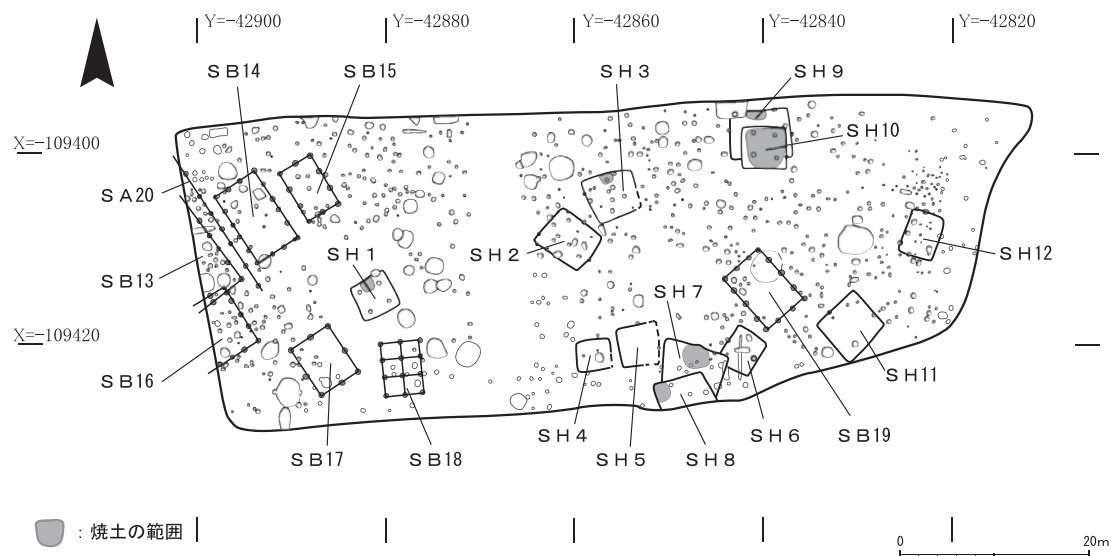
② 4 トレンチ 古墳時代後期と考えられる竪穴建物が12棟、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物 7 棟や柵 1 列、土坑や柱穴などの多くの遺構を検出した(第 3 図)。



第 1 図 調査地位置図(国土地理院 1 / 25, 000 亀岡)



第 2 図 調査トレンチ配置図



第3図 4トレンチ平面図

竪穴建物 一辺が約3.5～6mの方形を呈する12棟の建物を検出した。そのうち床面が焼けたものや、カマドの痕跡を検出した。SH1の床面から古墳時代後期(6世紀後半)の須恵器の杯身などが出土した。竪穴建物SH6～8や9・10のように重複しており、建て替えが行われていたことも確認できた。

掘立柱建物 真北から西に約30度傾いた建物(掘立柱建物SB13～17・19)と真北から西に約5度傾いた2間×3間の総柱建物(SB18)を検出した。SB13～17と柵SA20については向きをそろえて建てられたものと考えられる。柱穴から奈良時代から平安時代にかけての土器が出土した。

③5トレンチ 竪穴建物1棟や土坑などの遺構を検出したが、4トレンチに比べると希薄な状況であった。また、堆積層から古墳時代の耳環が1点出土した。

まとめ 今回の調査によってわかったことを時代ごとに整理する。

①縄文時代：1トレンチから縄文時代中期の深鉢の破片が出土したことから、周辺に縄文時代の集落があったことが考えられる。

②古墳時代：遺跡範囲内の西部で調査した4・5トレンチで、古墳時代後期の竪穴建物を13棟検出し、古墳時代の集落があったことがわかった。また、遺物では耳環や須恵器の特殊器台片など古墳の埋葬品と思われるものが出土しており、近隣の古墳との関連も想定される。

③奈良時代から平安時代：4トレンチで掘立柱建物7棟や柵1列、土坑などを検出した。奈良時代から平安時代の集落があったことがわかった。平安時代には、近隣に京から丹波、但馬へ向かう「山陰道」が通っており、この周辺は交通の要衝であったと考えられ、今後注目すべき遺跡である。

これまで佐伯遺跡は、遺物の散布地として周知されていたが、今回の発掘調査で建物群が見つかったことから、断続的ではあるがこの一帯に集落が営まれていたことがわかった。集落の広がりや周辺の遺跡との関連など、今後の発掘調査に期待したい。(村田和弘)

6. いずも 出雲遺跡第20次・みっかいち 三日市遺跡第13次・くるまづか 車塚遺跡第11次

所在地 亀岡市千歳町千歳

調査期間 平成27年 5 月 7 日～12 月 4 日

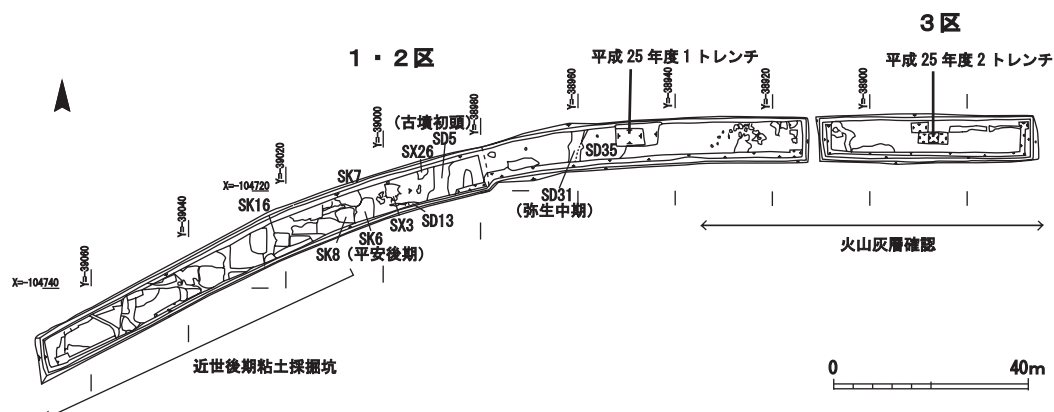
調査面積 2, 600㎡

はじめに 今回の発掘調査は、主要地方道路亀岡園部線(北々伸)防災・安全交付金事業に先立ち、京都府建設交通部の依頼を受け、実施した。調査は、計画路線上において、南北に約 1 km 離れた 2 か所の地点で実施した。北部調査地は、三日市遺跡・車塚遺跡の遺跡範囲にあり、南部調査地は出雲遺跡と中古墳群の遺跡範囲にある。中古墳群については、今回の調査によって、その範囲は調査地の南を中心に展開し、調査対象地にまで拡がらないことが判明した。北部調査地は、調査面積 1, 900㎡を測り、南部調査地は 700㎡を測る。

調査概要 平成25・26年度の計画路線上における部分調査の成果を受け、三日市遺跡・車塚遺跡の範囲となる北部調査地では、1～3 区の 3 か所の調査区を設定した。1 区では、不整形の掘形をもつ土坑群(長軸長約 3～4 m)を検出した。土坑の底面は不規則な平面形状を呈し、深さ 0.5～0.8m を測る。土坑の 1 基から合子形の曲物が出土し、共伴土器から平安時代後期の土坑と推定される。この周辺の基盤層は良好な緑灰色粘土であり、土坑の形状から粘土採掘坑である可能性が高い。1 区西半は攪乱が著しく、江戸時代後期から近現代に至る大形の方形を呈する攪乱坑群を確認した。一部から、廃棄されたとみられる多量の瓦や焼土とともに、天明 8 年(1788 年)の銘をもつ火舎が出土した。これらの攪乱坑は、瓦造りのための粘土採掘坑とみられる。1 区東では、幅約 2 m の古墳時代初頭の流路を検出し、2 区では幅約 1.5m の弥生時代中期の流路を検出した。また、その下層では縄文時代の可能性がある流路の一部を確認している(幅 4～5 m)。いずれの流路も旧地形に規制され、北東から南西に流れる。3 区では、基盤層の下層で旧石器時代の 2 層の火山灰層を確認した。表土下約 1.7～2.2m (標高 97.8～98.3m) で、大山東火山灰(DH g)と始良 T n 火山灰(AT)の 2 層のテフラを検出した。約 3 万年前に降下した始良 T n 火山灰は、3 区東端から 2 区中央までの範囲で検出し、3 区東半では水性堆積とみられる良好な状態で約 20cm の厚さで検出している。こ



第 1 図 調査地位置図
(国土地理院 1 / 25, 000 亀岡)



第2図 三日市遺跡・車塚遺跡平面図(北部調査地点)



写真 出雲遺跡(南部調査地点・北東から)

うした点から周辺部は湖沼とその水際を含む湿原にあったと考えられるが、旧石器時代の石器等は出土していない。出雲遺跡を対象とした南部調査地点では、弥生時代後期後半の流路、平安時代前期の溝や、平安時代後期と推定される石組み井戸や柱穴群などを検出した。柱穴群は、出土土器から平安時代後期以降と推定されるが、建物を復元するには至っていない。

まとめ 三日市遺跡・車塚遺跡の範囲にある北部調査地では、旧石器時代の始良Tn火山灰層など2層の火山灰層を確認し、旧石器時代の古環境を復元する資料を得た。また、弥生時代中期後半と古墳時代初頭の流路などを検出したことから、調査地の周辺に弥生時代～古墳時代の集落が近在するとみられる。一方、平安時代後期の土坑群は、粘土採掘坑の可能性が高いものである。三日市遺跡では、丹波国分寺の創建瓦を生産した平安時代前期の瓦窯の灰原が検出されており、今回の調査で検出した土坑群は、平安時代の瓦生産との関係が注目される。南部調査地の出雲遺跡では、弥生時代後期の流路のほか、平安時代の溝や井戸、柱穴群を確認した。特に平安時代後期を中心に遺跡南部にも集落が拡大することが明らかとなった。(高野陽子)

7. 岡田国遺跡第3次

所在地 木津川市木津地先

調査期間 平成27年11月2日～平成28年1月29日

調査面積 900㎡

はじめに 今回の調査は一般国道163号木津東バイパス事業に伴い、国土交通省京都国道事務所の依頼を受けて発掘調査を実施した。岡田国遺跡は井関川中流域右岸に位置し、調査地北東には岡田国神社が位置する。昭和52年度に発掘調査が実施され、旧石器が出土している。

調査概要 対象地内の11か所に調査トレンチを設定した。

①古墳時代 古墳時代の遺構は検出していないが、調査地西側の遺物包含層より車輪石2点が出土した。周辺に副葬された古墳が存在したか、製作した遺跡が存在したと想定されるが、後世に移動したものであると考えられる。

②奈良時代 調査地中央部で南北方向の溝と掘立柱建物を検出した。溝は南北方向に掘削されており、溝底部から奈良時代の須恵器杯と土師器壺が出土した。掘立柱建物は東西棟である。柱穴の平面形は隅丸方形で、最大で長辺80cm、短辺70cmを測る。調査区外に広がるため、建物規模は不明である。柱穴の埋土より奈良時代の須恵器杯と土師器甕が出土した。また、各トレンチより奈良時代の瓦片が出土している。

③平安時代 調査地南側より井戸と掘立柱建物が出土した。井戸は平面形が長方形であり、井戸枠などは遺存していなかった。掘形と井戸枠内埋土の土層区分が見られず、人為的に埋め戻された埋土であるため、井戸枠が抜き取られたと考えられる。埋土から黑色土器が出土した。掘立柱建物は調査区外に広がるため、建物規模は不明である。柱穴の埋土から黑色土器が出土した。

④鎌倉時代以降 各トレンチより耕作に伴う素掘溝を検出した。鎌倉時代以降は耕作地になっていたと考えられる。

まとめ 今回の調査では、全トレンチより4時期の遺構、遺物を検出したことから、調査対象地全域に遺構が広がると考えられる。特に、奈良時代には計画的に建物が配置されていることが判明した。
(福山博章)

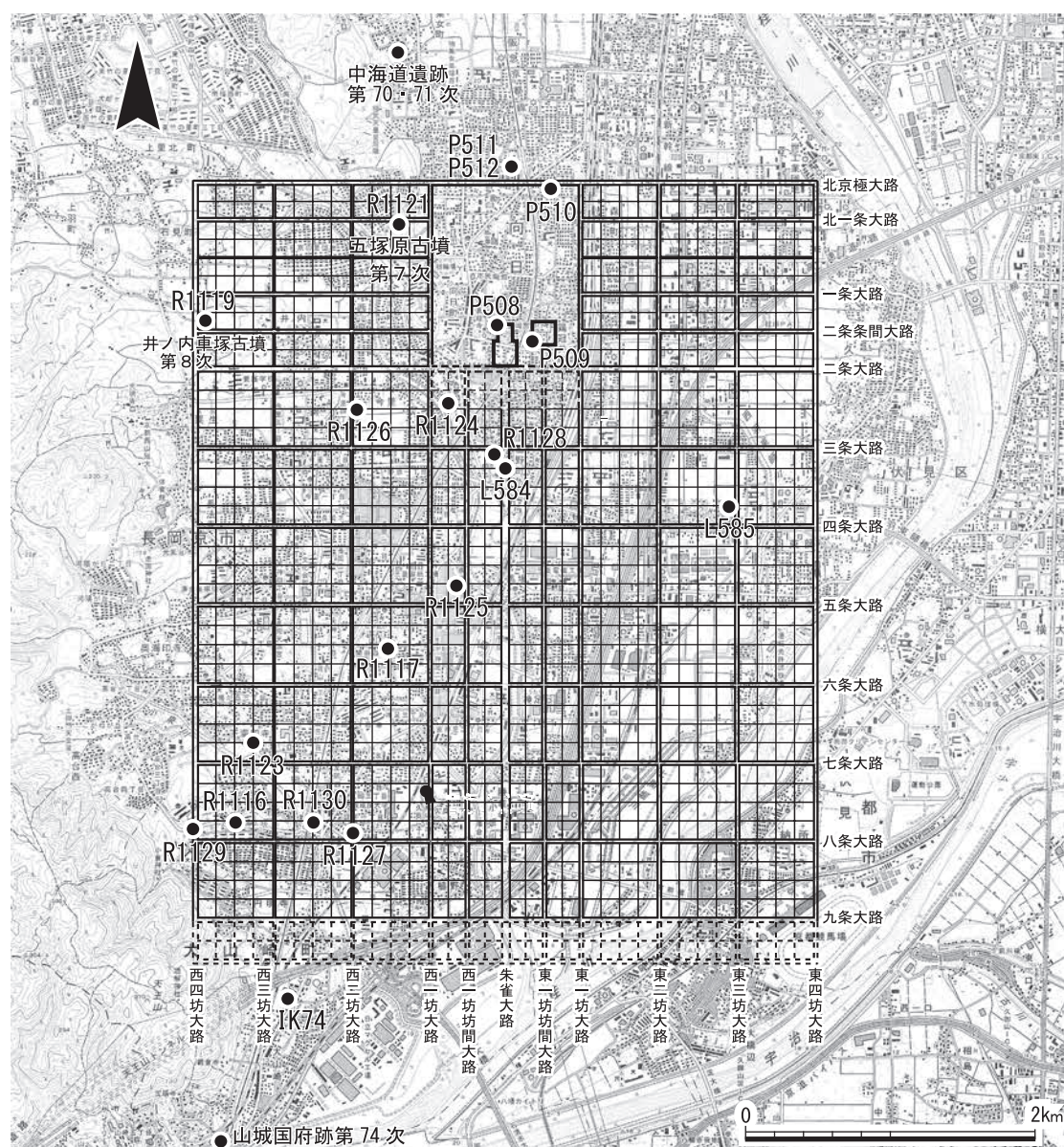


調査地位置図(国土地理院 1/25,000 奈良)

長岡京跡調査だより・125

長岡京跡における発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成27年11月から平成28年2月の例会では、宮域5件、左京域2件、右京域12件、京域外4件の合計23件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域 大極殿院回廊の北西部が確認されていた第508次調査(向日市鶏冠井町)では、下層で古墳時代の周濠2条と土器棺が新たに検出された。古墳は宮第46次で検出されていた山畑4号墳(方墳)の周濠とみられ、内部から武器形埴輪が出土した。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

第509次調査(向日市鶏冠井町)では、第二次内裏の西面を画す内郭築地回廊の雨落ち溝および築地本体の寄柱・廂柱、瓦溜まりが検出された。

長岡宮北辺官衙域に位置する第510次調査(向日市寺戸町)では、長岡京期の南北棟と推定される掘立柱建物の柱穴が検出された。

阪急電鉄「東向日」駅の西に隣接する第511・512次調査(向日市寺戸町)では、316次で確認されていた東西棟の掘立柱建物の南側柱の延長が検出され、南北2間×東西7間の建物形式が確定した。北側約47mの地点に妻柱筋を揃える東西棟建物があり、長岡宮「北苑」における建物配置を知る上で資料を提供した。

左京域 第584次調査(向日市上植野町)は朱雀大路路面位置であるが、小畑川旧流路が長岡京期の遺構を開析した状況が確認された。

羽束師菱川城の堀遺構が検出された調査区の南に隣接する第585次調査(京都市伏見区菱川町)では、規模の大きな柱掘形をもつ長岡京期の掘立柱建物が検出された。

右京域 規模の大きな側溝を付随する西二坊坊間小路が確認されていた第1117次調査(長岡京市開田)では、この小路に西面する六条二坊十一町を東西に二分する位置で南北区画溝が検出された。その西側で甕据え付け穴を有する規模の大きな南北棟の掘立柱建物が検出された(第131回埋蔵文化財セミナー要旨を参照)。墳丘の西側くびれ部に造り出しをもつ全長39mの前方後円墳の井ノ内車塚古墳(長岡京右京第1119次調査、長岡京市井ノ内)では、後円部墳丘に位置する攪乱穴から人頭大の礫が二次的に集積し、その下部から赤色顔料や須恵器(6世紀中ごろ)が出土した。巨石は未確認ではあるが、横穴式石室の存在を示唆する成果を得た。西造り出しの周辺から多量の埴輪類が出土し、新たに鶏形埴輪の存在も確かめられた。

第1121次調査(五塚原古墳第7次、向日市寺戸町)では、3段築盛された後円部墳丘の各斜面に施された葺石と段間の平坦面が良好な状況で遺存しており、墳丘盛土の築成と葺石施行が同時に行われていることが判明した。これまでの調査成果も総合すると後円部の平面形は正しく円形を呈することが明らかとなった。古墳時代の遺物は全く出土しなかったが、葺石基底石に長岡京期の土師器皿が据え置かれた状態で出土した。第1124次調査(向日市上植野町)では、小畑川の河道の歴史的変遷を追跡できる情報を得ることができた。

第1125次調査(長岡京市馬場)では、堀状の溝や礎板をもつ柱穴などの中世の遺構が散在するなかで、長岡京期の土器を多量に出土する土器溜まりを1基検出した。第1126次調査(長岡京市今里)では、甕据え付け穴をもつ掘立柱建物の南庇柱列を検出し、流路状堆積土から旧石器から平安時代にかけての遺物が出土した。なかでも平安時代の遺物は多種多様で、猿投産の緑釉陶器や鳥形硯の出土は、乙訓寺との関連性が窺われ注目される。

京域外 西国街道に面する大山崎町 I K74次調査(百々遺跡、大山崎町字大山崎)では、集石を伴う遺構や礫敷広場、平面方形の炭化物を埋土に多く含む土坑が検出され、緑釉・灰釉陶器・西寺同範瓦類など9世紀の遺物および瓦器を含む中世の遺物が出土した。(伊賀高弘)

現地公開状況(平成27年11月～平成28年 2 月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査をしている京都府内の遺跡の現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

現地見学会

11月7日(土)、八幡市の女谷・荒坂横穴群にて、京田辺市立松井ヶ丘小学校のふろさと体験学習として現地見学会が実施された。

新名神高速道路の橋脚横での調査を見学し、当日は116名の方が参加され、調査中の御毛通2号墳の説明を聞き、展示された過去の横穴調査の写真パネルや出土した遺物の説明を受けた。



古墳周溝を見学

者の説明に聞き入り、数多くの質疑のやりとりがあった。

参加した子どもも大人も熱心に調査担当

現地説明会

11月21日(土)に、亀岡市の佐伯遺跡にて現地説明会を実施した。

今回の調査では、縄文時代中期の土器や古墳時代後期の竪穴建物、奈良時代から平安時代の掘立柱建物などの遺構が見つかった。

この地域で竪穴建物や掘立柱建物のまとまった遺構が出土したのは初めてであり、一帯には集落があったとみられる。



佐伯遺跡現地説明会

当日は、風は強かったが晴天に恵まれ、84名の方が参加された。地域の方だけでなく、他府県からも多くの方が来られ、地域の歴史についての質問をされたり、説明を熱心に聞かれたりして、関心の高さが感じられた。

(岡村美知子)

普及啓発事業(平成27年11月～平成28年2月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

藤森中学校「生き方探究チャレンジ体験」

11月4日(水)・5日(木)・6日(金)に京都市立藤森中学校2年生3名が、京都市の推進事業である「生き方探究チャレンジ体験」で発掘現場と当調査研究センターにて体験学習をした。

「生き方探究チャレンジ体験」は、京都市が平成12年度から行っている事業で、中学生が自ら考える力などの「生きる力」を身につけるとともに、集団や社会の一員としての自己の在り方を考えるきっかけを生み出すために、生徒の興味・関心に応じた勤労体験・職場体験・ボランティア体験などを行うものである。

11月4日(水)・5日(木)は京都市内の発掘現場にて、発掘調査の説明を受け、土層断面の観察・遺構の検出作業・レベルや光波測距機での測量・土坑の平面図作成などを体験した。

11月6日(金)は当調査研究センターにて、遺物洗浄・ネーミング・実測・拓本・報告書作成・写真撮影・展示についてなど、整理作業→報告書作成→展示の時系列の順を追って体験した。

生徒は、初めての発掘調査に参加し、緊張感をもった3日間を過ごした。特に、生徒からは働くことの大変さ、厳しさを知り、今回の経験を将来の職業に生かしたいと感想が聞かれた。



藤森中学校生き方探究チャレンジ体験

2015.向日市まつり

11月14日(土)・15日(日)の2日間、向日町競輪場を会場として開かれた向日市まつりに「拓本にチャレンジ! 美しい拓本とのであい!」と題して、出展した。

このブースでは、江戸時代後期に屋根の飾りとして使われていた小菊瓦の歴史について説明し、実際に墨を使って画仙紙に模様を写しとる拓本を行った。小さなお子さんは大人と一緒に、



向日市まつり拓本

小学生から年配の方まで幅広い年齢の方々に拓本のとり方を知っていただき、細かい作業を丁寧に取り組んでいただけた。できた拓本は、持ち帰っていただいた。1日目は雨であいにくの天候となったが、2日目は快晴と天候に恵まれ、2日間の催しで143名の方々に拓本を経験していただくことができた。



第131回埋蔵文化財セミナー

埋蔵文化財セミナー

第131回埋蔵文化財セミナーを、2月20日(土)に長岡京市立産業文化会館1階大会議室で実施した。

今回のセミナーでは、『京都・三都城ものがたり』と題して、「1. 恭仁宮跡の発掘調査成果について－最古級の正月行事を示す遺構－」京都府教育庁指導部文化財保護課古川匠副主査、「2. 長岡京跡の発掘調査成果について－右京第1117次調査を中心に－」公益財団法人長

岡京市埋蔵文化財センター木村泰彦総括主査、「3. 平安京跡の発掘調査成果について－左京八条三坊九町の調査－」当調査研究センター福山博章調査員の計3本の発表を行った。

第1題では、これまでの発掘調査で恭仁宮の実態についての報告があった。また、今年度の発掘調査では、宝幢遺構が見つかり、現存する最古の正月の儀礼の遺構であること、恭仁宮では元日朝賀の際には必ず宝幢が立てられていた可能性が高く、この行事が国家にとって重要な儀式であったこと、恭仁京への遷都が元日朝賀の準備に間に合うタイミングだったことから聖武天皇が元日を恭仁宮で迎え元日朝賀を行うという強い意志を持っていたのではないか、という報告があった。

第2題では、発掘調査を行った長岡京跡右京六条二坊六町と十一町、西二坊坊間小路の遺構・遺物の報告があった。成果として、西二坊坊間小路西側溝の形状が、通有に見られる側溝と異なることが判明した点にある。この溝は排水のための機能ではなく、小型の船を利用した水運の機能があった可能性が報告された。

第3題では、平安京跡の鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物が検出し、その遺構・遺物から分かる調査地の周辺に住んでいた当時の職人たちの生活や流通経済活動の様子が報告された。

2年ぶりの長岡京市でのセミナー開催であったが、長岡京市はもとより府内外からの参加者も多かった。当日は激しい雨が降る中、80人の参加者を得て、盛況のうちに無事終了できた。

(岡村美知子)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 設立35周年記念事業の実施報告

岡村美知子

1. はじめに

昭和56年に設立された公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、平成27年度で35周年を迎えた。それを記念して以下の事業を実施した。本稿は、それらの関連事業の開催主旨と実施の状況の記録である。

なお、設立35周年記念事業として実施した事業は、平成27年11月28日(土)から平成28年1月11日(月・祝)まで開催した「^{やまとところとからざえ}和魂漢才ー京都・東アジア交流の考古学ー」と平成27年11月29日(日)に開催した展覧会と同じタイトルで実施した講演会・シンポジウムである。

また、この講演会・シンポジウムに先立ち、縄文時代から古墳時代を対象としたプレシンポジウムを平成27年8月22日(土)に実施した。プレシンポジウムの概略については、本誌第128号に掲載しており、参照願いたい。

2. 35周年記念事業の実施結果報告

(1) 設立35周年展覧会「和魂漢才ー京都・東アジア交流の考古学ー」

平成27年11月28日(土)から平成28年1月11日(月・祝)の45日間、京都文化博物館2階総合展示室にて、当調査研究センター設立35周年記念展覧会を開催した。

「和魂漢才ー京都・東アジア交流の考古学ー」をテーマに日本の文化が大陸の影響「漢才」を受けながら、やがて日本固有の文物を生成する「和魂」を生み出していく様子を京都府内の出土品と写真パネルや文字パネルなどによってわかりやすく展示を行った。

展示の全体的な構成は、「日本文化の源流(朝鮮半島起源の石器・くらしの変化・戦いのはじまり)」「新しい技術の波(武器の変化と馬具の登場・土器生産の変革・鏡)」「漢才から和魂へ(仏教の受容とひろがり・みやこの造営とくら



展覧会ちらし



展示会場の様子



列品解説風景（京都文化博物館提供）

し・仮名文字の誕生)」「広がる海の道(貿易とうつわ・現代につながる食器文化)」という4つの小テーマを設定し、それぞれを理解するうえで欠かせない考古資料を選択し、展示を行った。展示品の中には、重要文化財5件、府指定文化財7件などをはじめ、多くの優品を展示した。

展示では、東日本大震災の復興に職員を派遣している京都府教育委員会の復興調査に関するパネル展示をはじめ、京都府立山城郷土資料館

と京都府立丹後郷土資料館の活動内容を紹介するコーナーも併設した。

展示の最後には、昭和56(1981)に設立された当調査研究センターが発掘調査を行った遺跡を空中から撮影した画像を30分で振り返る映像コーナーも併設した。撮影された周辺が現在、どのように様変わりしたかを確認するかのように熱心に視聴する多くの見学者が印象的であった。

開催期間中には、当調査研究センター職員により5回の列品解説を行い、多くの観覧者から好評を得た。入場者数は、当初の予想をはるかに超える約13,000人を記録した。ほぼ同時期に開催された京丹後市『大丹後展』との相乗効果もあり、多くの方々に当調査研究センターの存在とその存在の社会的意義について広く知っていただけたばかりではなく、国民の共有財産である文化財を保護することの重要性をあらためて多くの方々に認識していただく機会となったことは、設立35周年記念事業としての展覧会開催が、非常に意義深いものとなったと確信している。今後、今回の記念展覧会で得た経験と確認できた問題点を当調査研究センターの業務に活かしていきたいと思う。

(2) 設立35周年記念講演会・シンポジウム

平成27年11月29日(日)に、向日市民会館ホールにて、当調査研究センター設立35周年記念講演



上田正昭理事長 記念講演

会・シンポジウムを実施した。記念展覧会と同じく「和魂漢才ー京都・東アジア交流の考古学ー」と題し、記念講演と基調講演、そして、基調報告及びシンポジウムを開催した。」

先に述べたように8月22日(土)に、プレシンポジウムとして第130回埋蔵文化財セミナーを行い、奈良平安時代以前の交流の歴史に迫った。

当調査研究センター上田正昭理事長が、「古代東アジアと京都盆地」と題し、記念講演をまず行った。平安京には秦氏などの多くの渡来系

氏族が居住し、平安京の造営が洛陽の影響を強く受けていたことを明らかにされた。今回のテーマである「和魂漢才」は、上田理事長が、早くからその意味と重要性について指摘されているところであり、約 1 時間に及ぶ講演により、このシンポジウムと展覧会の基本理念の解題ともなった。

続いて、当調査研究センター井上満郎理事が、「遣唐使“廃止”後の京都と東アジア—平安王朝の背後世界—」と題し、記念講演を行った。遣唐使の廃止後も民間による国際交流が頻繁に行われたことを詳述され、支配者階層の貴族が日本を強く意識するようになった過程が明らかにされた。

これらの講演を受けて、京都府立大学菱田哲郎教授により「飛鳥・奈良時代における東アジアの影響—仏教文化を中心に—」と題した基調講演を行った。都城や各地域に存在する古代寺院で出土した瓦から、仏教の拡がりに渡来人の果たした役割が大きかったことを明らかにされた。

基調報告では、当調査研究センター筒井崇史主査が「考古資料から見た奈良・平安時代における東アジアとの交流」と題し、「仏教」「都城」「文字」を中心にどのように外来文化「漢才」を取り入れ、独自の文化「和魂」へ発展させたかについて、その過程を明らかにした。また、当調査研究センター伊野近富副主査は「中世における東アジアとの交流」と題し、人々が好んだ輸入陶磁器が時代によって異なることや海外交流の実態について報告した。

これらの講演と報告を受けて、当調査研究センター上原真人理事による討論進行のもと、パネリストの意見を多角的に引出し、「和魂漢才」について深く掘り下げるシンポジウムとなった。

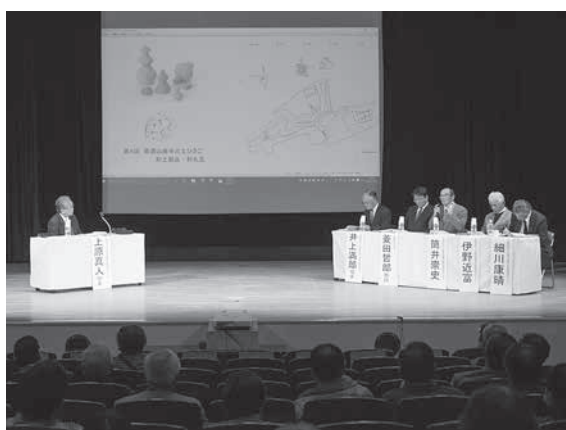
当日は天候にも恵まれ、190名の方々が参加され、「広範囲に渡る交流の歴史について興味深く聞くことができた」「展覧会にもぜひ行きたい」などの意見・感想をお寄せいただいた。35周年記念事業の概略は以上であるが、今後、ますます公益財団法人としての役割をわれわれが認識し、文化財保護に寄与しなければならないことを職員一同、認識する絶好の機会となった。また、展示などの共同作業を通して職員の連帯感を強められたことも大きな成果であった。

なお、記念展覧会図録および記念講演会・シンポジウム当日配布資料は、当調査研究センターホームページにアップロードしているので、参照願いたい。

(おかむら・みちこ＝当調査研究センター調査課企画調整係調査員)



基調報告の様子



シンポジウムの様子

センターの動向

(平成27年11月～平成28年2月)

月 日	事 項
11 2	岡田国遺跡(木津川市)発掘調査開始
4	藤森中学校「生き方探究・チャレンジ体験」(於：当センターほか、参加者3名)(～11/ 6)
7	京田辺市立松井ヶ丘小学校ふるさと体験学習(於：女谷荒坂横穴群、参加者116名)
14	向日市まつり「拓本体験ブース出展」(於：向日町競輪場、参加者143名)(～11/ 15)
17	阿良須遺跡(福知山市)発掘調査開始
21	佐伯遺跡(亀岡市)現地説明会(参加者84名)
25	美濃山遺跡(八幡市)発掘調査開始
	長岡京連絡協議会
27	出雲遺跡・中古墳群(亀岡市)発掘調査終了
28	当調査研究センター設立35周年記念展覧会開始(於：京都文化博物館観覧者13, 000人)
29	当調査研究センター設立35周年記念シンポジウム(於：向日市民会館 参加者：190人)
12 4	出雲遺跡・中古墳群(亀岡市)発掘調査終了
4	佐伯遺跡(亀岡市)発掘調査終了
10	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：広島市、増田総括主査)(～12/ 11)
16	長岡京連絡協議会
1 7	岨田遺跡(宇治田原町)発掘調査開始
11	当調査研究センター35周年記念展覧会終了(観覧者：約13, 000人)
26	芝山遺跡(城陽市)発掘調査開始
27	長岡京連絡協議会
29	岡田国遺跡(木津川市)発掘調査終了
2 4	下水主遺跡(城陽市)発掘調査終了
5	水主神社東遺跡(城陽市)発掘調査終了
20	第131回埋蔵文化財セミナー(於：長岡京市立産業文化会館、参加者80人)
24	長岡京連絡協議会
26	阿良須遺跡(福知山市)発掘調査終了

編集後記

桜のつばみも膨らみ春の訪れを告げ、春便りがうれしい季節となりました。平成27年度3冊目となる『京都府埋蔵文化財情報』第129号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、今年度の京都府内における埋蔵文化財の調査・普及啓発事業の成果をいち早くお伝えするとともに、当調査研究センター職員による論考を掲載いたしました。

さらに、当調査研究センター設立35周年記念事業である展覧会、記念講演会・シンポジウムの概略について掲載いたしました。

本年度刊行いたしました『京都府埋蔵文化財論集』第7集もあわせて、ご一読いただければ幸いです。

(編集担当 岡村美知子)

京都府埋蔵文化財情報 第129号

平成28年3月31日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

T e l (075) ~~833~~(代) F a x ~~92075~~189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 河北印刷株式会社

〒601-8461 京都市南区唐橋門脇町28

T e l (~~095~~) 6121(代) F a x (075) 3671-82



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

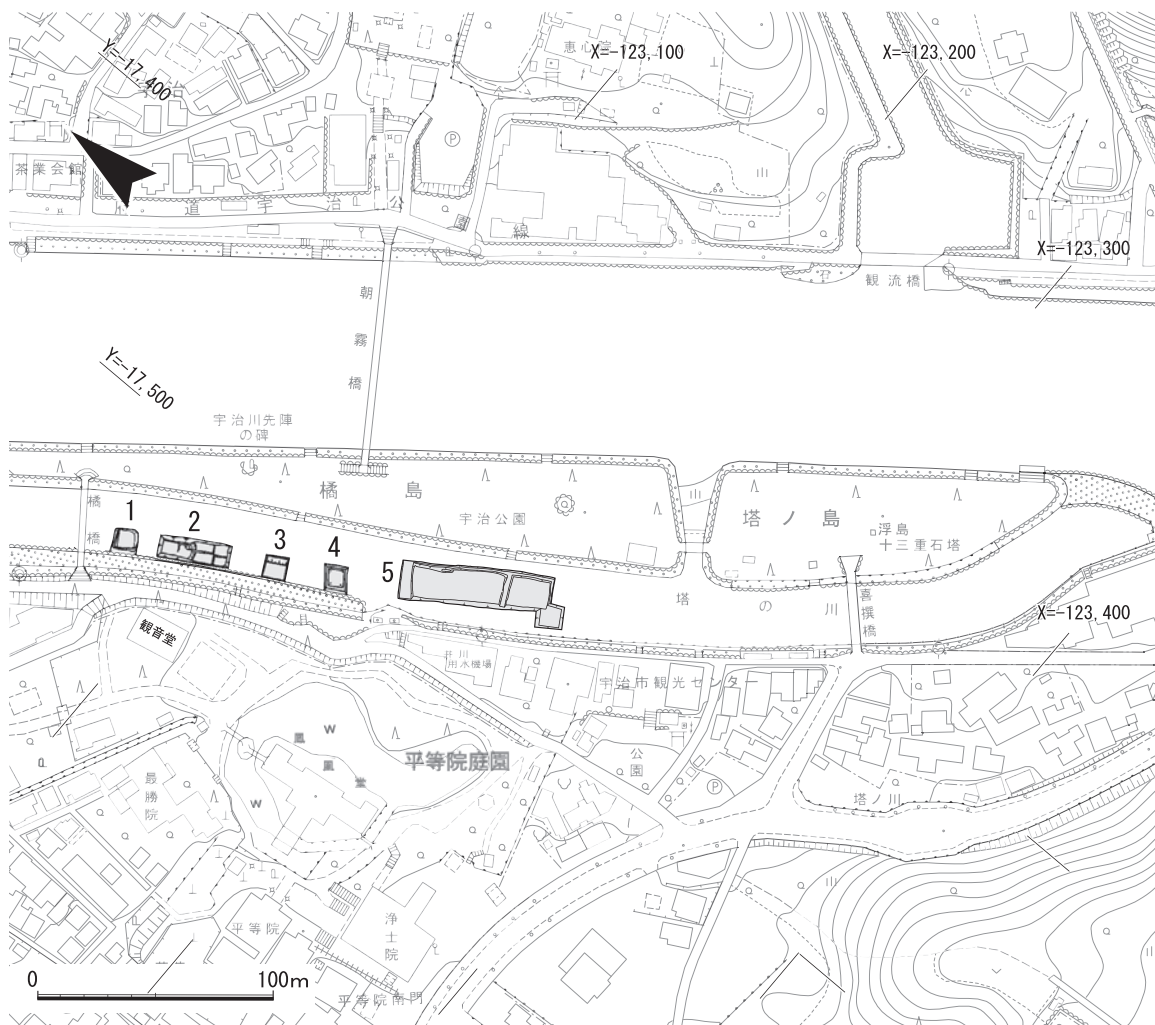
平等院旧境内遺跡(宇治川河床)出土の軒瓦

引原茂治

1. はじめに

平成26年度に実施した平等院旧境内遺跡の調査地は、宇治川の分流である塔の川の河床で、世界遺産平等院の東側に位置する。平等院は、父藤原道長から宇治の別業を継承した藤原頼通により、永承7(1052)年に寺として創建された。当時の境内地は現在よりかなり広範であったと考えられている。想定される旧境内地が平等院旧境内遺跡として捉えられている。

平成26年度は、河床に5か所のトレンチを設定して調査を実施した。遺構は5トレンチで検出した堤状遺構S X01のみであるが、遺物は瓦が多数出土した。特に、2トレンチと5トレンチに集中する。また、軒瓦が多く含まれる。平等院およびその周辺で出土した軒瓦については、『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書(宗教法人平等院 2003)』(以下、整備報告書とする)で分類して報告されている。それで、過去の調査で出土した軒瓦と整合性をもたせるため、軒瓦の型



第1図 トレンチ配置図

式名は整備報告書に準ずることとする。

2. 出土した軒瓦

(1) 2 トレンチ

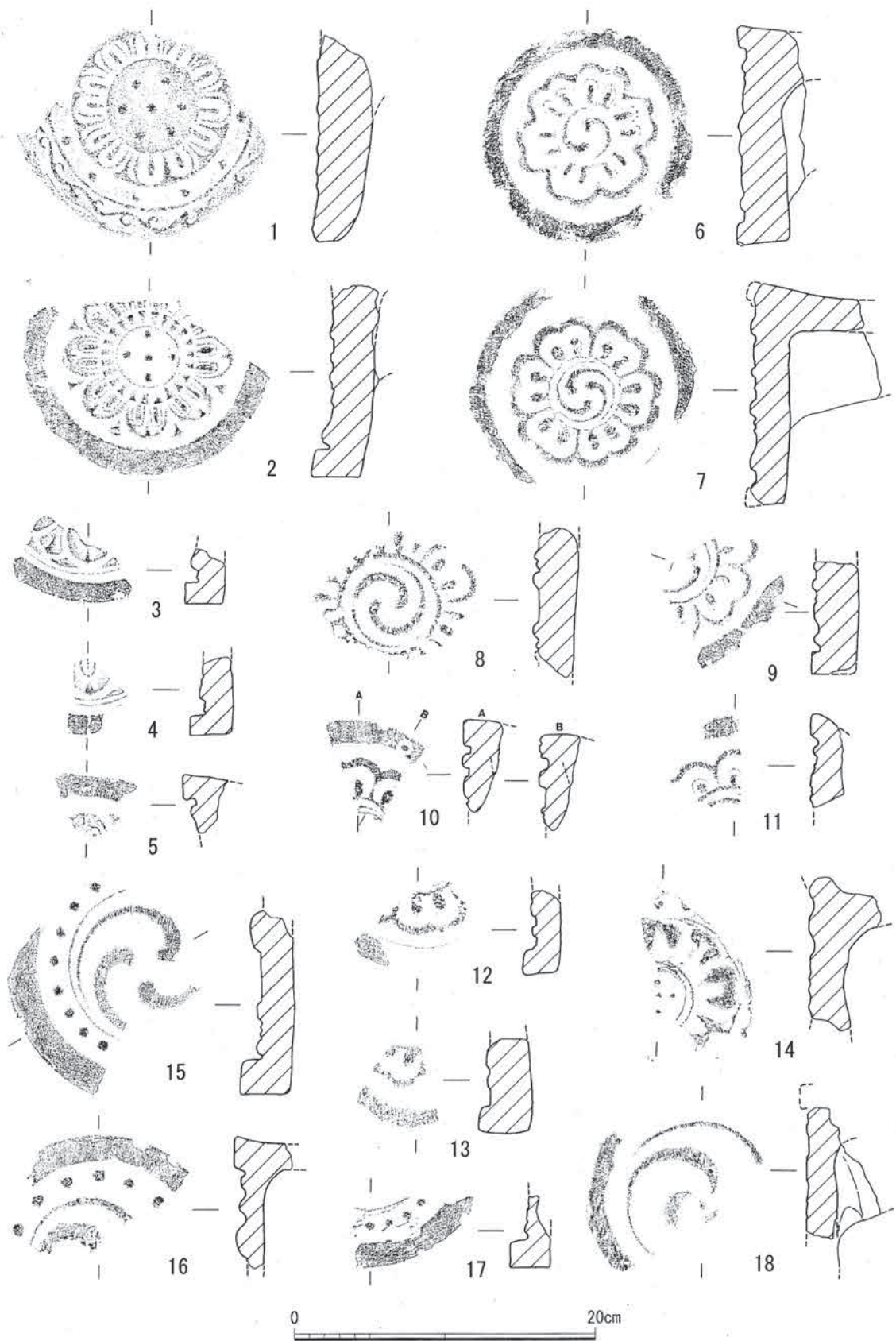
1は複弁蓮華文を内区主文とする軒丸瓦である。中房には1 + 6の蓮子を配する。蓮弁文の周囲には珠文と圏線が巡り、外周には唐草文が巡る。整備報告書のNM016系とみられるが、唐草文がやや萎縮気味である。平等院創建期の11世紀中葉頃の瓦と考えられるもので、南都系の瓦とみられる。2は複弁八葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房には1 + 4の蓮子を配する。中房の周囲には^{しべ}葉を表す。文様は扁平気味で角が立ち、シャープな印象を受ける。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、11世紀頃の瓦とみられる。3は単弁蓮華文を主文とする軒丸瓦である。11世紀頃の瓦とみられる。4は単弁蓮華文を主文とする軒丸瓦で、NM004系とみられる。11世紀頃のものとみられる。5は蓮華文を主文とする軒丸瓦である。小片のため詳細は不明であるが、2と同文とも考えられる。

6は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は右巻きの二巴文である。子葉の周囲に圏線をもつ。NM033系のものとみられる。12世紀初頭の平等院改修期に使用されたと考えられる瓦で、河内向山系である。7は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は右巻きの三巴文である。NM037系のものとみられる。12世紀中葉頃のものとみられ、河内向山系である。8～13は、上記2点と同様、河内向山系の軒丸瓦である。8は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は左巻の二巴文である。子葉に圏線はなく、NM038系とみられる。9～13は中房が不明であり、形式は不明である。10は周縁部に「○」の刻印がある。整備報告書の刻印瓦形式のK01にあたる。11は、子葉の周囲に圏線があり、NM032・033系とみられる。9・10・12・13は、NM034～039系にあたるものとみられる。

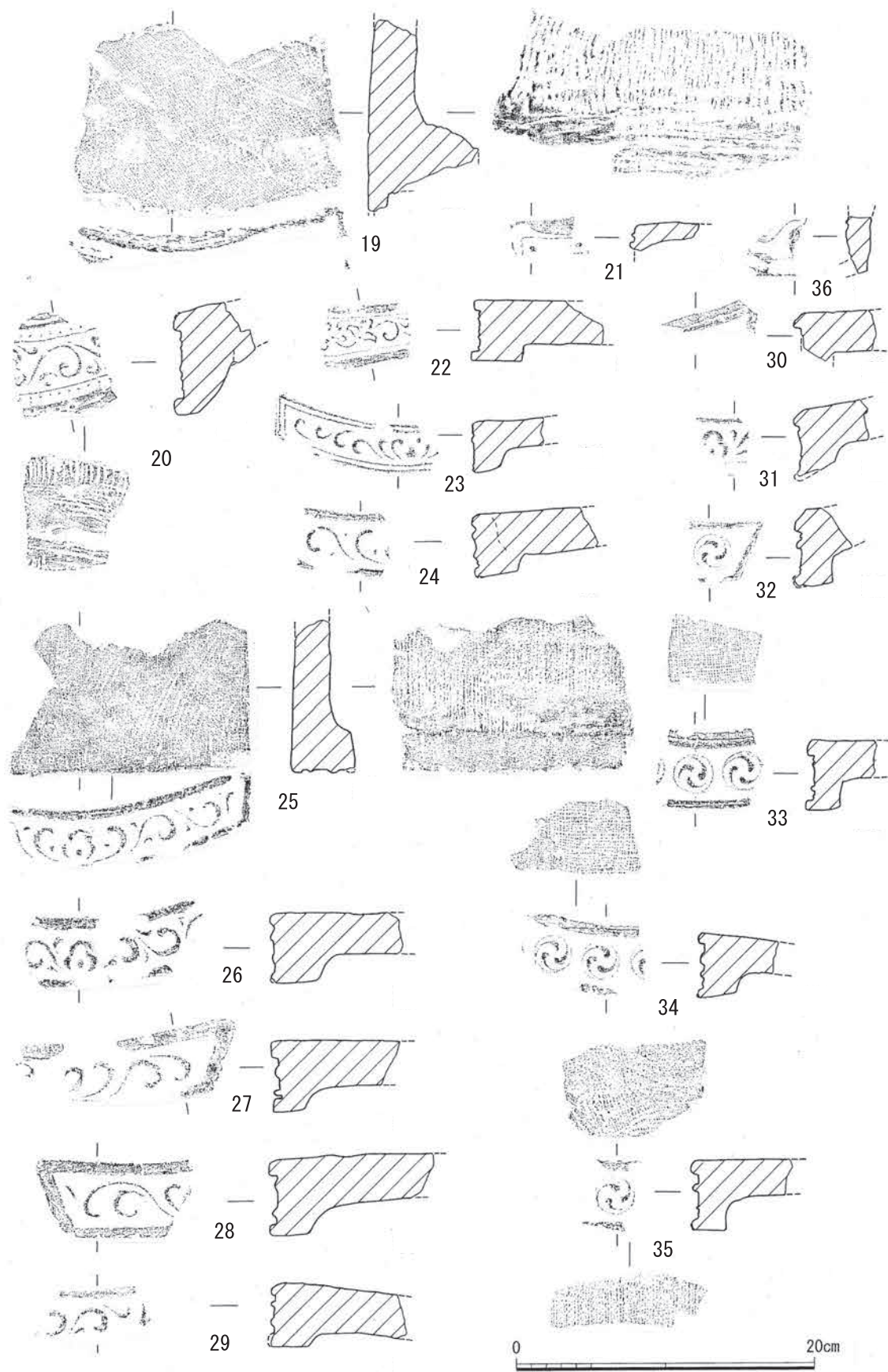
14は複弁八葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房には1 + 4の蓮子を配するものとみられる。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、平安時代の瓦とみられる。

15は左巻三巴文を主文とする軒丸瓦で、周囲を珠文が巡る。整備報告書のNM102系のものとみられ、近世瓦である。16も同様の三巴文軒丸瓦で、珠文が15より大き目であるが、同系の近世瓦とみられる。17は右巻三巴文軒丸瓦とみられるが、小片であり詳細は不明である。珠文が15・16より小粒で、中世の瓦の可能性も考えられる。

19は軒平瓦で、凹面に布目、凸面に縄タタキ痕が残る。顎部には粗いタタキ痕残り、丹波篠王子瓦窯の製品とみられる。瓦当面は剥落しており、文様は不明である。藤原道長が建立した法成寺跡からも同様の技法の瓦が出土しており、11世紀前半頃の瓦とみられる。20は唐草文を主文とする軒平瓦で、周囲を圏線および細かい珠文が巡る。顎部に粗いタタキ痕残り、丹波篠王子瓦窯の製品とみられる。19も同文である可能性も考えられる。整備報告書では、丹波系の軒瓦は報告されていない。なお、法成寺跡と考えられている京都府立鴨沂高校出土と伝える同文の軒平瓦が、同高校に所蔵されている。



第2図 2・3トレンチ出土軒丸瓦実測図



第3図 1・2トレンチ出土軒平瓦実測図

21は珠文と圈線が巡る軒平瓦で、主文は不明である。平安時代の瓦とみられる。22は宝相華唐草文を主文とする軒平瓦で、周囲に圈線が巡る。NH003系のもので、11世紀頃の瓦とみられる。やや小型の瓦である。

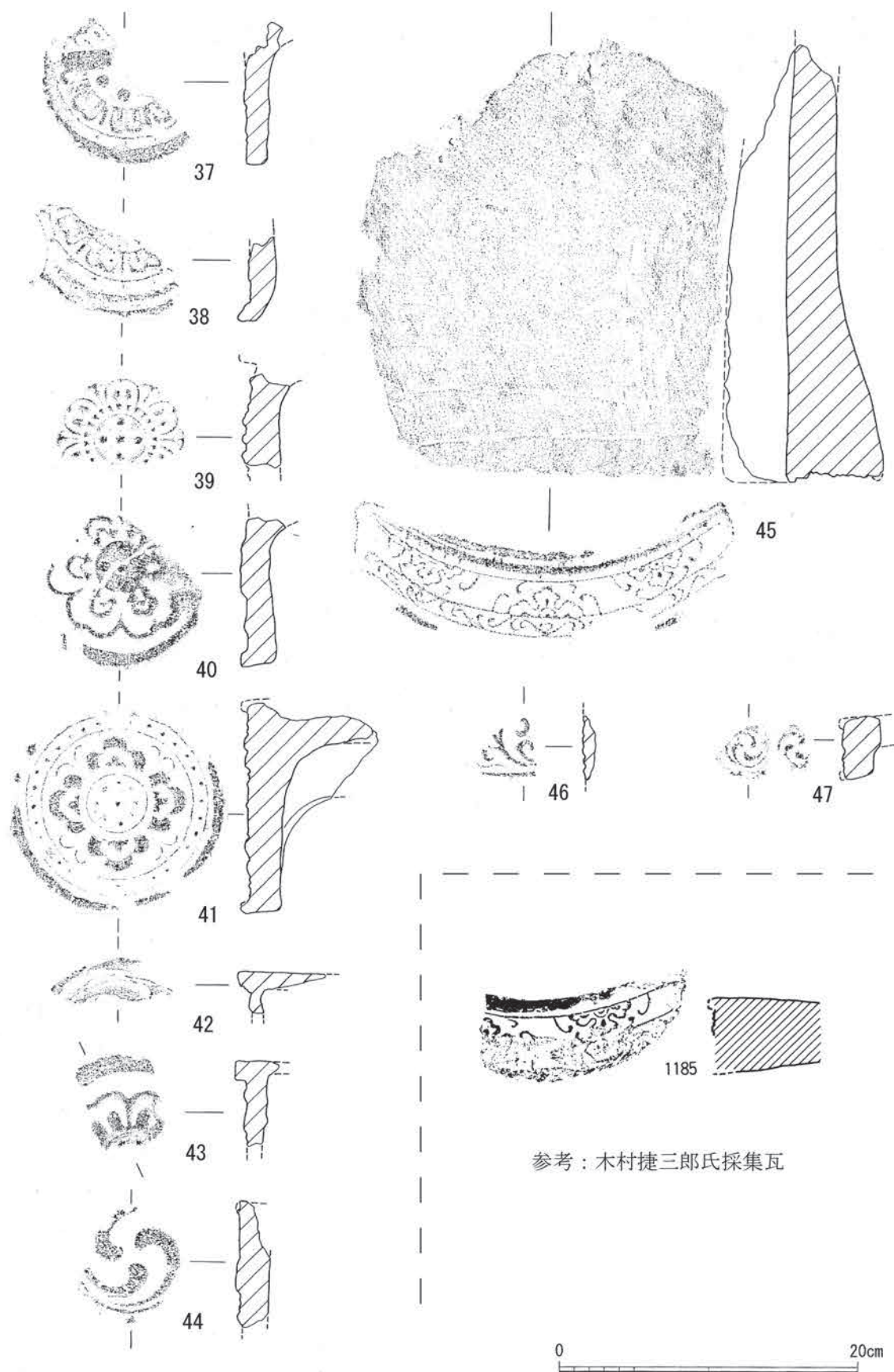
23～31は河内向山系の唐草文軒平瓦で、中房に巴文を持つ複弁六葉蓮華文軒丸瓦と対になるものとみられる。この系統の軒平瓦は多くの文様パターンがあり、拓本の比較ではどの形式に属するのか判断するのは困難である。25はNH058系に、28は唐草文の端部の形状からNH045系に属するものか。30は文様は不明であるが、胎土や整形の状況から河内向山系の瓦と考えられる。いずれも、12世紀初頭～中葉頃にかけての瓦とみられる。

32～35は連続する左巻三巴文の軒平瓦である。全容がわかるものはない。巴文の周囲に圈線がないので、NH064もしくは065系とみられる。河内向山系の瓦と考えられる。整備報告書によると、12世紀初頭頃の三巴文軒丸瓦と対になるものとみられるが、今回の調査では、それに該当する軒丸瓦は出土していない。

(2) 5 トレンチ

37は複弁八葉蓮華文軒丸瓦とみられ、中房に大粒の蓮子をもつ。瓦当面に帯状の范傷がある。蓮弁文の周囲に圈線・珠文が巡る。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、11世紀頃の瓦とみられる。38も複弁八葉蓮華文軒丸瓦とみられる。37に近い文様構成とみられるが、詳細は不明である。39は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には1 + 4の蓮子をもち、中房の周囲に葉が巡る。文様およびその表現は2トレンチ出土の軒丸瓦2に類似しており、ほぼ11世紀頃の瓦とみられる。40は六葉蓮弁文軒丸瓦で、中房には1 + 4の蓮子をもつ。整備報告書に同文瓦は掲載されていないが、弁の形状が、巴文の中房をもつ複弁六葉蓮華文軒丸瓦に類似しており、それと同じ時期の瓦とも考えられる。なお、この瓦当の文様は、子葉の形状から、宝相華文とも考えられる。41は四葉宝相華文軒丸瓦で、中房には1 + 8の蓮子をもつ。宝相華文の周囲を、圈線・珠文・圈線が巡る。NM041系の瓦とみられる。11世紀頃のものとみられる。42は軒丸瓦で、文様等は不明であるが、胎土等から平安時代の瓦とみられる。43は中房に巴文をもつ河内向山系の軒丸瓦である。子葉に圈線をもたない。12世紀の瓦とみられる。44は右巻の三巴文である。時期は不明であるが、中近世の瓦の可能性も考えられる。

45は半裁花文を主文とする軒平瓦である。半裁花文の周囲を圈線が巡り、その下方に均整唐草文が展開する。明瞭な顎部をもたない。凹面には布目痕が残る。整備報告書には同文瓦の記載がないが、ほかの半裁花文軒平瓦の例からみて、11世紀頃の瓦と考えられる。なお、この瓦と同文とみられる軒平瓦が『木村捷三郎収集瓦図録』に掲載されている。鳳凰堂南溝で採集されたものということである。この瓦も平等院と関係のある瓦とも考えられる。46は唐草文軒平瓦である。瓦当の一部が剥がれたもので、型式は不明であるが、平安時代の瓦とみられる。47は連続する左巻三巴文の軒平瓦である。巴文の周囲に圈線がないので、NH064もしくは065系とみられる。河内向山系の瓦で、12世紀初頭頃の瓦と考えられる。



第4図 5トレンチ出土軒瓦実測図

(3) その他のトレンチ

36は唐草文軒平瓦で、1 トレンチから出土した。文様の詳細は不明であるが、NH209系の可能性があり、近世瓦とみられる。18は左巻三巴文軒丸瓦で、3 トレンチから出土した。文様は扁平気味で、中世の瓦とみられる。

3. まとめ

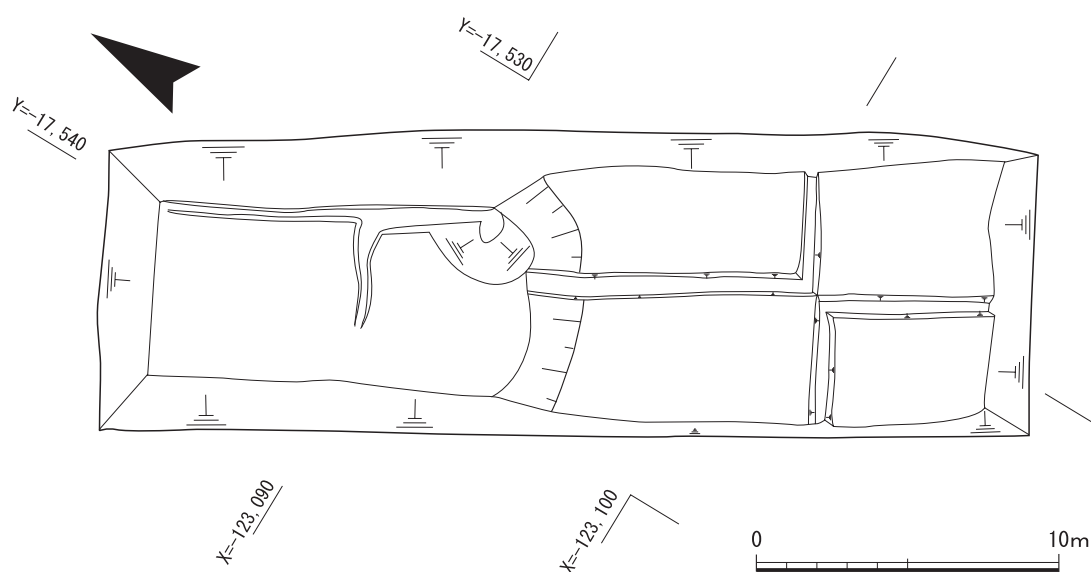
藤原道長は宇治に別業を所有していたが、万寿4(1027)年の道長の死後、子の藤原頼道に伝領された。頼道は、永承7(1052)年にこの別業を寺に改めて、平等院と号した。その後、康和3(1101)年以降に藤原忠実によって平等院の大規模な改修が行われたと考えられている。

平安時代には平等院本堂が現観音堂の位置にあったとされる。文献により、本堂から宇治川に向かって翼廊が延び、その先端に宇治川に張り出して釣殿があったと想定されている。『宇治旧記』によると、釣殿は中世後期まで残存しており、元亀・天正の頃に焼失したと伝える。

2 トレンチは観音堂の東側の位置に設定した。釣殿の想定地付近にあたる。トレンチ付近では、昭和48(1973)年の災害復旧工事中に大面取をした角柱が1本見つかり、釣殿の柱と考えられた。昭和48年2月23日付けの『洛南タイムス』第6048号に記事が掲載されている。

このトレンチの調査では、釣殿に関連する遺構の検出を主たる目的とした。調査の結果、このトレンチからは、釣殿に関連する遺構は確認できなかった。また、昭和48年に確認された釣殿の柱と考えられる柱材についてもトレンチ内には残存していなかった。しかし、平等院に関係すると考えられる瓦類が、あまり摩滅を受けていない状態で多数出土した。中世の土師器皿等も出土している。

調査地は、宇治川分流の塔の川の川底である。宇治川は急流として知られ、また、河川改修も行われている。洪水などにより、また工事により、多くの遺物が流下し失われたものと考えられ



第5図 2 トレンチ平面図

る。そのような状況の中で川底に残存したのが、今回の出土遺物と言える。

2トレンチからは平等院に関係すると考えられる瓦類が多数出土した。特に、12世紀前半期の藤原忠実による改修時に使用されたと考えられる瓦が多い。軒丸瓦では、中房が巴文となる河内向山系の瓦がそれにあたる。軒平瓦では、河内向山系の唐草文軒平瓦や連続する左巻三巴文の軒平瓦がそれにあたる。軒丸瓦では出土点数17点のうち8点で約47%を占める。軒平瓦では出土点数17点のうち13点で約76%と、多数を占める。これは、藤原忠実によって行われた改修事業の規模の大きさを示すものと考えられる。また、その改修により、平等院が最も栄えた時期を迎えたことをも示すと考えられる。

2トレンチの出土瓦で注目されるのは、丹波篠王子瓦窯産の軒平瓦が含まれていることである。上記のとおり、藤原道長が創建した法成寺の故地と考えられている京都府立鴨沂高校出土瓦に同文の軒平瓦が含まれている。このことから、今回出土した丹波産軒平瓦は、平等院創建以前の宇治別業に関係する遺物とも考えられる。別業の中に瓦葺きの仏堂的な建物があったことを示唆するものであろうか。そのように考えると、興味深い資料と言える。

2トレンチから出土した瓦は、これまでの平等院の修理等で不要になった瓦を付近に投棄したものともみることができよう。また、上記のとおり、出土した瓦には水流によって磨滅した痕跡がなく、遠隔地から流下したものとはみられない。付近に何らかの平等院関係の建物があった可能性も否定できないと考えられる。

(ひきはら・しげはる = 当調査研究センター調査課調査第1係副主査)

参考文献

- 『平等院境内遺跡発掘調査報告書』(宗教法人 平等院)2000
- 『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』(宗教法人 平等院)2003
- 『木村捷三郎収集瓦図録』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所)1996
- 福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」(『佛教芸術』68 毎日新聞社)1968
- 平安博物館編『平安京古瓦図録』(雄山閣出版株式会社)1977
- 引原茂治・竹村亮仁「平等院旧境内遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第165冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)2016

丹後の台付「甕」

桐井理揮

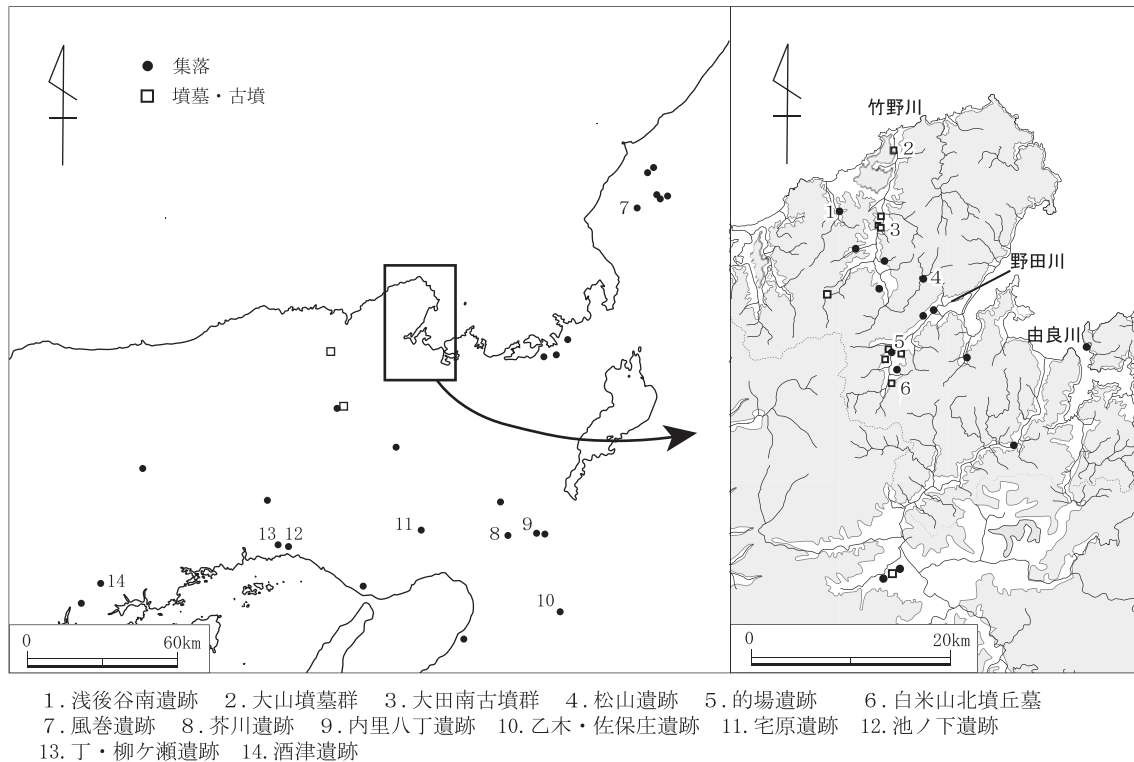
1. はじめに

弥生時代後期、近畿北部では甕形を呈する体部に「ハ」の字形の脚台がつく、脚台付甕がみられる。しかし、その評価に関しては報告者によって一様ではなく、台付の壺、甕、鉢など認識の差異がある。また、精製された胎土で製作されるものや朱が付着するもの、漆が塗られたものなど、明らかに日常的な用途から乖離したものもみうけられ、儀礼的な用途が想定されることもある。この種の土器は丹後を中心として北陸などで出土することは知られていたが、1遺跡からの出土量は1点ないし多くとも数点程度であり、とりたてて議論の俎上に挙げられることは多くなかった。

ところが、近畿北部系土器の集成を行った際に、^(注1)意外にも畿内地域およびその周辺にも類例が散見されることを知った。そこで、本論ではこの脚台付甕^(注2)の展開について整理することを目的とする。そして、周辺地域での出土例を挙げ、とくに当該期の地域間交流という側面に注意しながら、台付甕の意義について考えてみることにしたい。

2. 研究小史

本論で主題となる弥生時代後期の周辺地域を見渡すと、脚台をもつ甕は紀伊半島南部や伊勢湾



第1図 有段口縁をもつ台付甕の分布

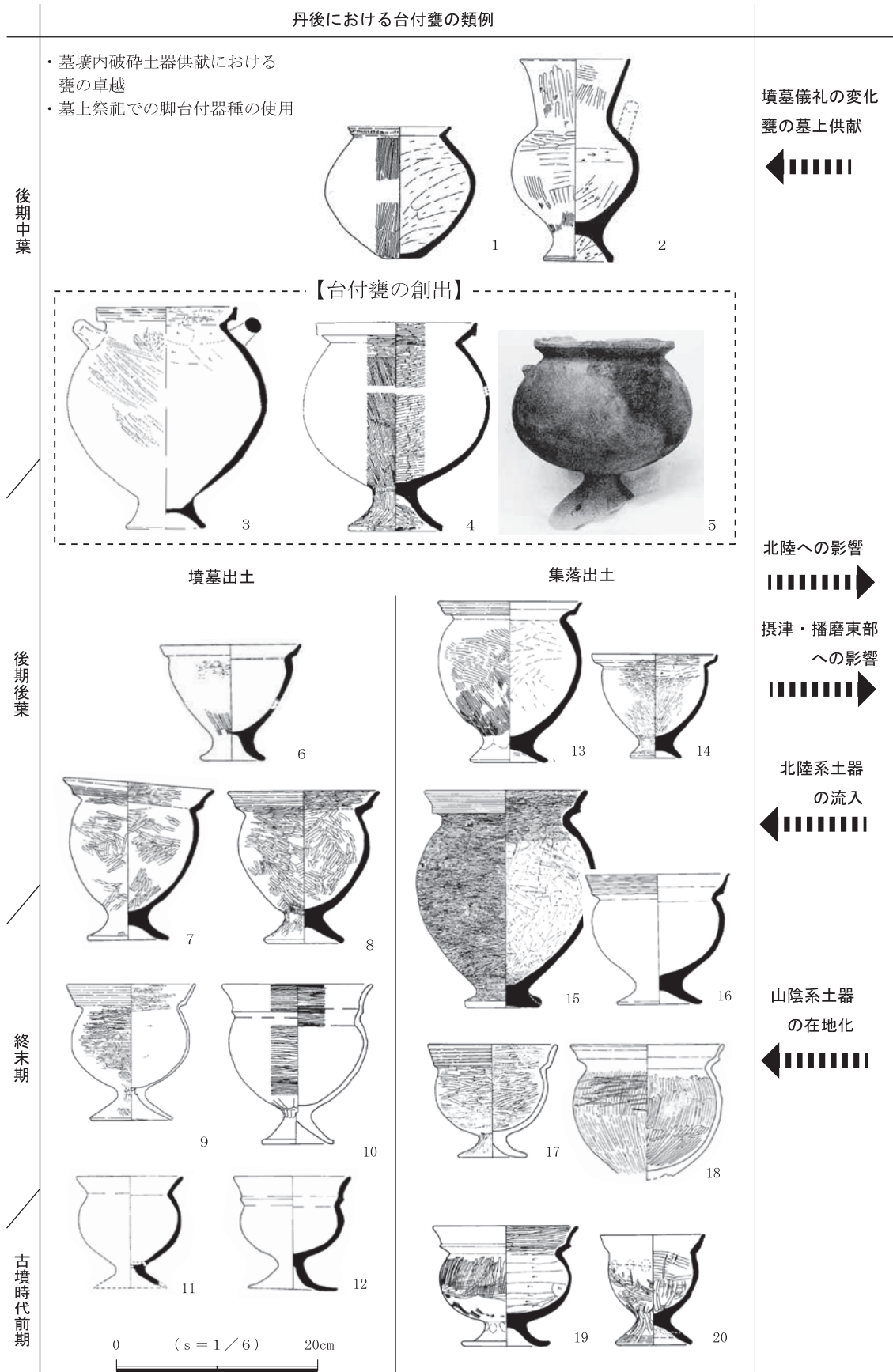
岸などで日常雑器として使用されている。また、中部高地でも中期後半の栗林式にすでに台付甕が認められるなど、その存在自体は珍しいものではない。これら日常雑器的な性格を有する台付甕に対して、本論で対象とする丹後の台付甕は1遺跡からの出土量が著しく少ないうえに、丁寧に作られるものも多く、周辺諸地域の台付甕とは性格を大きく異にしていると考えられる。丹後の弥生時代後期土器の編年を提示した肥後弘幸の器種分類では、装飾壺以外の台付壺の総称としての壺F、もしくは有段口縁の鉢Bbとされたものであり、特に詳述はされていない。^(注3)このように、丹後の土器様式の中でも付帯的な扱いとなることが多いが、これまで全く注目されてこなかったわけではない。白米山北墳丘墓墳裾の礫敷状遺構に供献された状態で3個体が原位置を保ったまま出土しており、報告者は在地産の精製された胎土を持つ台付鉢であるとの所見を述べ、「野田川流域に集中する器種らしい」と指摘している。^(注4)また、藤本康司は小羽山墳墓群の報告書の中でこれらの器種の類例を提示して検討を行い、甕と器台が結合した器種であり、「捧げる器」として特殊化したものであると論じた。そして、「丹後系台付甕」と呼称することを提唱し

- ① 有段口縁で口縁部内面及び体部外面がヘラミガキ調整であること
- ② 脚台は「ハ」の字状に横へ張り出す形状で端部が丸みを帯び、外面がヘラミガキを主体とすること

というように定義した。また、藤本は「丹後系台付甕」は弥生時代終末期以降、北陸と丹後の影響を受けて生まれた土器であると指摘する。^(注5)藤本の論は、丹後の土器祭祀の中で重要視された甕に祖型を求める点など参考にすべき点が多い一方、その発生に北陸からの影響を想定する点や出現時期を弥生時代終末期とした点など疑問点も残った。また、「ヘラミガキ」という点を重視したため、資料も限定的であった。終末期に白米山北墳丘墓でみられるような全面にヘラミガキを施す丁寧に製作されたものが一定数存在することは間違いないが、丹後ではその定義に入らないような台付甕も多く展開する。例えば藤本は大田南2号墳のものを(第2図12)台付鉢として認識しているが、ほかの類例を参照する限り、筆者は台付甕の系譜として捉えるべきであると考えられる。また、体部の最終調整がミガキでなく、通有の甕と同じようにハケ、ナデで終わるものも多くみられ、まさに甕に脚台を取り付けたものも存在する。以上のような理由から、本論では藤本のいう狭義の「丹後系台付甕」という定義からははずれるが、広く、丹後にみられる有段口縁の台付甕およびその類似資料を包括して台付「甕」と認定し、資料集成を行いたい。

3. 台付甕の出現と展開

他地域の事例に触れるまえに、丹後での台付甕の発生と展開について整理しておこう。今回集成しえた有段口縁の台付甕およびその類似資料は、丹後を中心に56遺跡90点である。網羅的に資料集成を行ったわけではないが、北陸にも分布がみられるなど東へは広く影響がみられるのに対して、山陰の土器組成のなかに台付甕は定着しない。また、後述するように畿内地域および東部瀬戸内地域においても類例は散見される。その出現の契機として、藤本は甕に器台が結合した形状を呈することから、墳墓に捧げる器として成立したと論じている。まずはこの視点から検証し



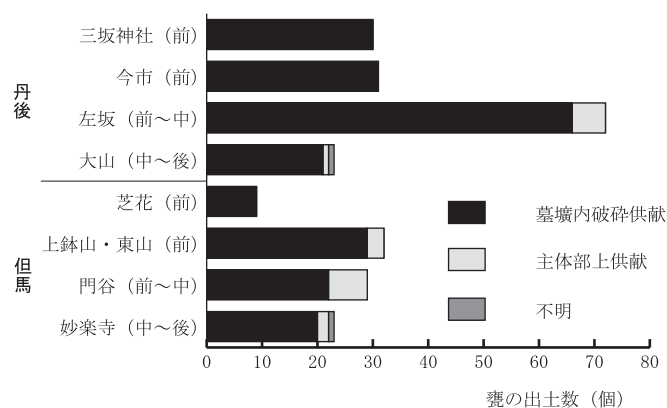
第2図 丹後における台付甕の出現と展開
(出土遺跡は、18頁参照)

てみよう。

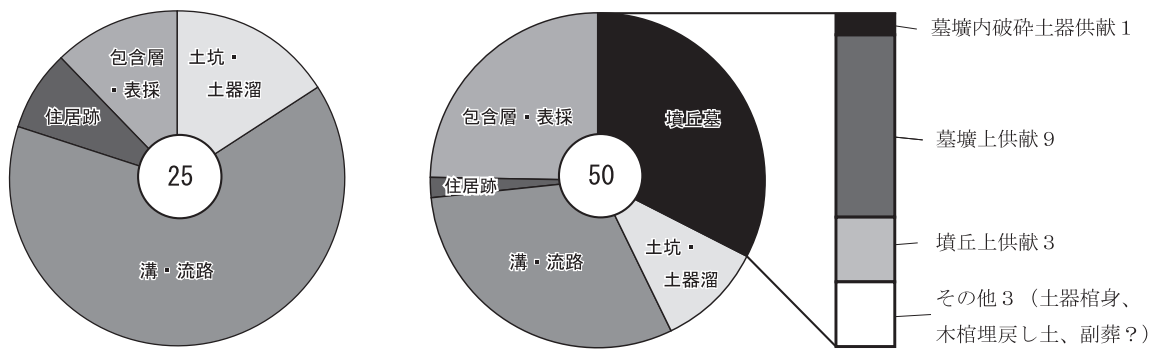
出現期の例として考えられるのは後期中葉に比定される大山墳墓群17主体部例である^(注7)。丹後の台付甕は出現の時点ですでに、体部にミガキを施し胴部最大径を中位に持つという、通有の甕とは異なった型式的特徴を備えているといえる。これに近い時期の所産と考えてよい古天王5号墓第10主体例や的場遺跡例をみても、体部に把手が取りつく以外は同様の特徴をもつ(第2図3～5)。そのようなことから、そもそも「甕」に脚台が取りついたものなのかという根本的な疑問が残るが、三坂神社3号墳第3主体部や大山墳墓群28号主体部に破碎供献されているような、体部中位に最大径を持つやや球胴形を呈する異形の甕は少数ながら存在する(第2図1)。この異形甕が台付甕の直接の系譜となったことを示す積極的な根拠は示しえないが、ほかに類似する器種も見当たらないうえ、後期後葉以降の台付甕の体部は通有の甕形を呈するものも増加することから、ひとまず甕に脚台を付けたものであり、後期中葉に登場するとして認識しておこう。

丹後の墓制において、「甕」という器種が重要視されていたことは従前から指摘されており、甕は後期を通じて墓壇内破碎土器供献の中心をなす器種として使用される。その構造に変化がみられるのが後期中葉であり、「後期中葉を境にそれまで調理容器(甕・水差し等)とともに墓壇内に破碎供献されていた飲食容器(高杯・鉢・台付壺・器台)^(注8)が分離して墓壇上で破碎供献される^(注9)」ようになり、同時に破碎土器の配置位置や副葬品構成にも若干の変化がみられる。この墓壇内破碎土器供献から墓壇上土器配置への変化には、中期後半からすでに墓壇上での土器供献がみられる中部瀬戸内地域や山陰地域を含めた広域の地域間交流の影響を想定する意見がある^(注9)。近畿北部地域内でも丹後に先行して但馬の東山墳墓群で後期初頭の段階ですでに甕を墳丘上に供献する事例も確認されている(第3図)。後期後葉の西谷2号墓で墓上供献に用いられていた甕は、ヘラミガキ調整で丁寧に仕上げられており、体部にはススが付着しないなど、台付甕と共通した特徴を有しており興味深い。また、初期の台付甕に把手がつく例が2例あることも示唆的である。丹後では高杯や水差しに半管状の把手が取り付くことはあっても甕に取り付く事例はほとんどみうけられず、それはむしろ但馬的な要素であるといえる。丹後では後期前葉から中葉を中心に水差しや壺など、通常脚台がつかない器種に脚台が取り付く例が散見されるが(第2図2)、これらは集

落で出土することは稀であり^(注10)、墳墓に供献するために創出された蓋然性が高い。このように後期中葉、すなわち墓壇内破碎土器供献から墓壇上土器配置への移行期に台付甕として、甕が墳丘上に供献されるために仮器化したと解釈することは許されよう。やや根拠に欠けるものの、丹後での墳墓祭祀の変化、そして台付甕の発生には西からの影響を考える



第3図 墳墓祭祀における甕の使用方法



第4図 台付甕出土遺構の性格

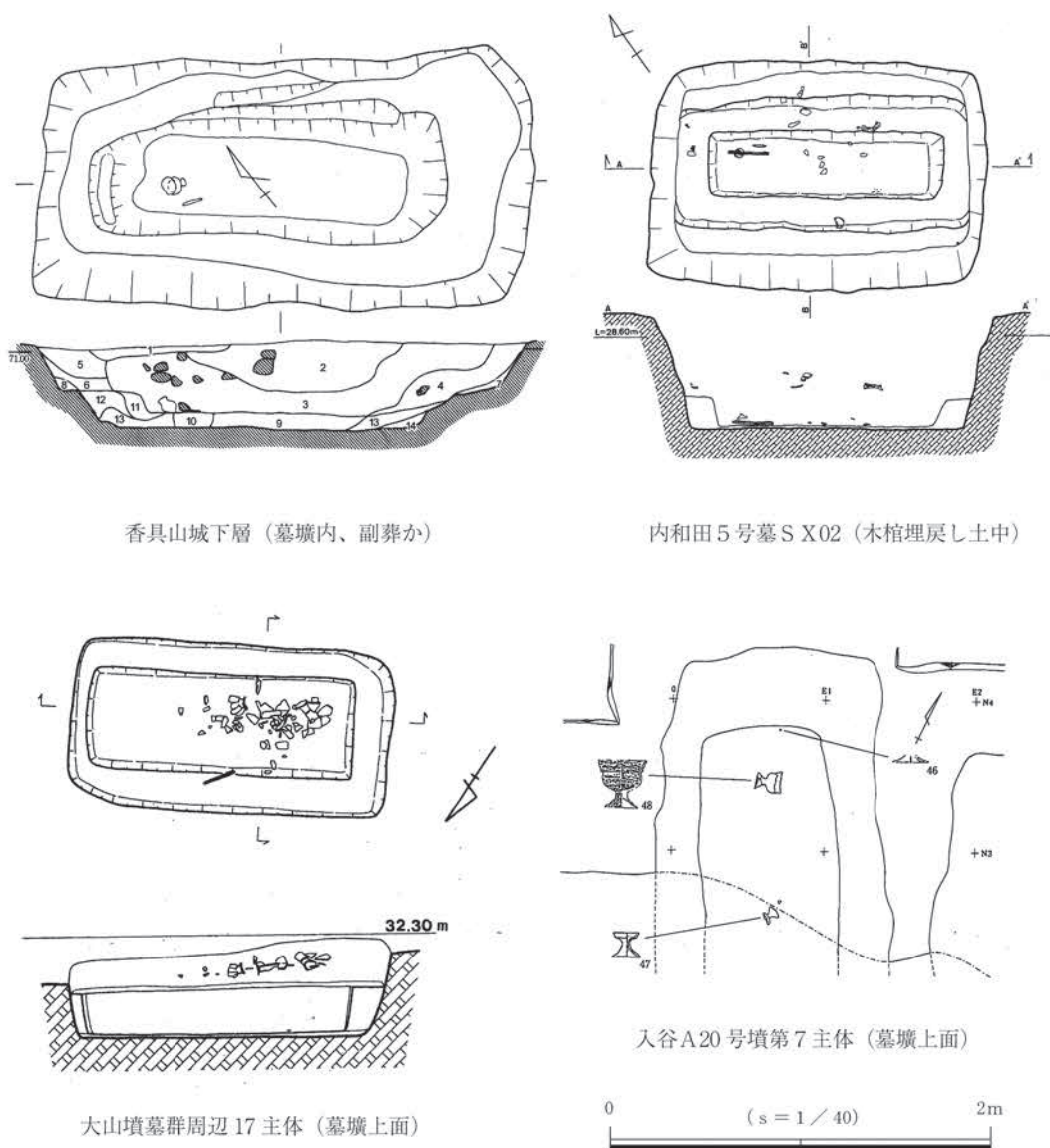
ことができる可能性を指摘しておきたい。

しかし、出現期の例を改めて確認すると、墓上供献に使用されているのは大山墳墓群例のみであり、第2図をみても、後期後葉の墳墓に台付甕が供献される例はそれほど多いとは言えない。出現の契機を墓上祭祀の変質に求めることには一定の蓋然性が得られようが、その後の展開は必ずしも墓上祭祀と結びついているわけではないのである。このことは、今回集成しえたもののうち墳墓の例はほぼ丹後半島に限られており、全体の7割以上が集落からの出土であることから推察されることである(第4図)。前述したように丹後では台付きの器種が散見されるが、それに対して台付甕はその出土が必ずしも墳墓に限定されるわけではない点で供献用の台付きの器種とは性格や使用用途を異にしているようである。台付甕の出現の契機を墓上祭祀の変質に求めることができる可能性はあるが、創出当初から、集落でも使用される器種であったのである。

では、その使用方法是甕と共通するのであろうか。出土状況から使用状況が復元可能な墳墓の事例で確認しておきたい。先述したように、近畿北部において甕は墓壇内破碎土器供献に用いられるなど墳墓祭祀の中心をなす器種となるが、台付甕の中で破碎供献に使用されているのは但馬の加陽土屋ヶ鼻の1点のみである。後期末の内和田2号墓では煮沸痕跡をもつ台付甕が木棺埋戻し土中から破碎された状態で出土しているなど、一部には甕と同じような使用状況を示す例もあるが、甕とは別の器種として認識され、異なる使用用途が付与されていたと推察される。墓上供献されたものは多く存在するが、筆者が知りえた範囲でススなど煮沸痕跡がみられるものは存在せず、台付甕は実際に調理や共飲共食を伴う儀礼には使用されないことを基本とする。注目すべき事例として白米山北墳丘墓の例を挙げておきたい。白米山北墳丘墓では墳裾の礫敷遺構で河内産、北陸系の壺の破碎儀礼が行われ、その後礫敷上面に台付甕、器台、高杯が配置された状況が復元されている。供献土器のなかに煮沸用の甕が含まれないことから、埋葬儀礼に際しては実際に共飲共食を伴う儀礼は行われなかったと考えられる。また集落では、出土状況から明確に使用方法がわかる事例は確認できていないが、近畿北部以外の地域でみられるものはすべて集落からの出土であることから、前述したように台付甕の使用は墳墓での祭祀に限定された性格ではないことは明らかである。出土遺構も生活域というよりもむしろ、土器を一括廃棄したような溝や土壇などからの出土が多いことも示唆的である。特殊な事例ではあるが、口縁部に朱が塗布さ

れ、体部にはススが付着した石田谷遺跡例や、口縁部に漆が塗られ体部に煮沸痕跡が認められる風巻遺跡例など、日常的な用途とは乖離したような状況を呈するものも存在する。このようなことから、具体的な使用状況を復元しうる材料は持ち合わせていないが、墳墓と同様何らかの祭祀行為に用いられたと考えたい。

台付甕のその後の展開についても簡潔に整理しておこう。丹後では後期末から終末期にかけて北陸や山陰の強い影響を受け、後期に発展した擬凹線文土器様式が急速に衰退する。台付甕は後期末から終末期前半には白米山北墳丘墓や内和田墳墓群で内外面にミガキを施した祭祀用土器として展開し、体部も丸みを帯び器高が低くなるなど小型化する。また、他地域からの影響が著しく、北陸系の口縁部を持つものや脚台にやや段を持つようなものが散見されるようになる。山陰系の要素が顕在化してくる終末期後半から古墳時代初頭にかけては、香具山城下層墳墓や浅後谷南遺跡などで出土した台付甕のように山陰系口縁を持つものが増加し、本来の「丹後系」の口縁



第5図 台付甕の出土状況の諸例(報告書に加筆)

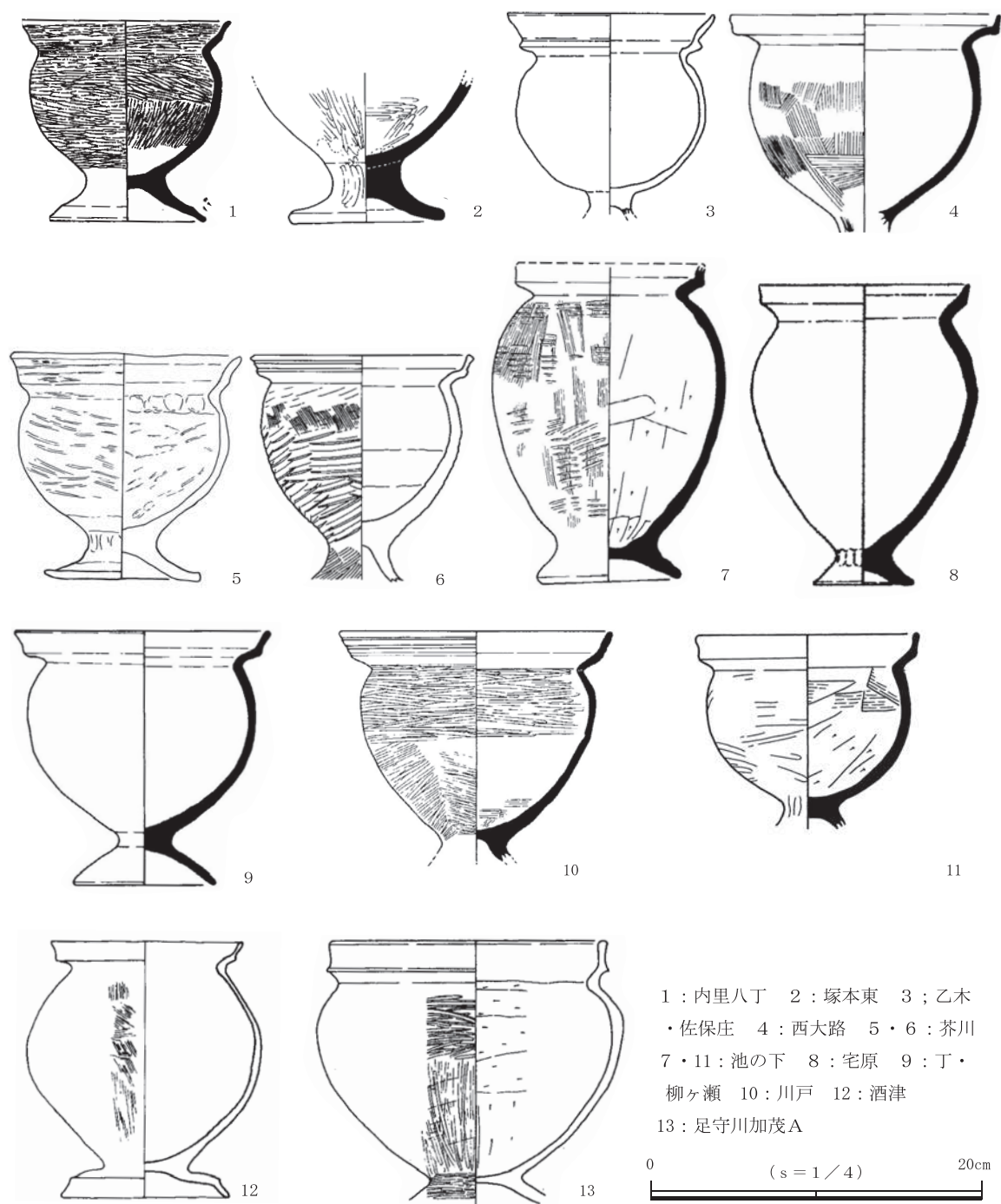
部を持つ台付甕は著しく減少する。このように、他地域の強い影響を受けながらも、北陸や山陰の土器様式には本来存在しない台付甕という独自の器種を丹後地域内では保持し続けるということとを重視したい。台付甕の墳墓への供献は大田南2・5号墳まで続き、古殿遺跡では古墳時代に入っても使用されるなど、弥生時代後期以降の丹後では確実に看過することのできない器種として存在し続ける。脚台付きの甕は祭祀用という特別な意義を与えられ、弥生時代後期から古墳出現期にかけての丹後の土器様式の中に存在することとなったのであろう。

4. 周辺地域での事例

このように台付甕は丹後では何らかの特殊な意味を付与されて使用されていた器種であると考ええる。そして前述したように、意外にもこの台付甕は丹後以外の地域でも一定数出土例がみられる。丹後でも多量に出土する器種ではないにも関わらず、近畿北部の土器様式外でみられる近畿北部系土器の総量に対しては比較的高率で出土するのである。主要な事例に関して以下概略を述べたい。^(注11)

播磨・摂津 弥生時代後期後半、摂津から播磨東部では土器様式じたいに近畿北部系土器の影響が強くみられ、地元で変容した形の近畿北部系土器が多数みられる。そのため、筆者は畿内地域と近畿北部地域との交流ルートの一部として機能していたと考える。^(注12) 台付甕も畿内地域ではもっとも多く得られており、播磨で4遺跡、摂津で2遺跡からの出土がある。宅原遺跡では、畿内第Ⅴ様式系の体部に口縁端部をつまみあげた、近畿北部の影響下で製作された甕に脚台がつくものが存在する(第6図8)。同様の資料は池ノ下遺跡でも出土している(第6図7)。両者ともススなどの使用痕跡を確認することはできず、甕本来の用途である煮炊具としては使用されていないといえる。摂津ではほかにも芥川遺跡で後期後葉の溝から2点が出土している(第6図5・6)。一方は丹後のものと類似度が高く、外面をヘラミガキし、内面にはケズリが施される。もう一方は外面にタタキ痕を顕著に残すなど折衷型式の甕に脚台が取りついたものである。後者には著しくススが付着しており、少なくとも1回の調理を経験したことは確実である。また、今回図示しえなかったが、吉田南遺跡では後期後葉の土器群に伴って台付甕が1点出土している。内外面に橙色の塗布が部分的に認められる。これらは東海や紀伊半島南部を故地とする台付甕とも製作技術を根本的に異にしており、播磨・摂津の在地の甕そのものに脚台を付ける例は存在しないことから、丹後の台付甕を意識して製作された土器であるといえる。このように、近畿北部でみられる土器そのものではなく、近畿北部の影響を受けた甕に脚台をつけるものがあるということは、折衷型式の土器を製作した集団を考えるうえで示唆的である。

播磨西部では川戸遺跡や丁・柳ヶ瀬遺跡で丹後のものと類似度の高いものが出土している(第6図9・10)。川戸遺跡のものは胎土分析で地元の胎土で製作されたものであることが示されており、丹後、もしくはその周辺の集団が移動した先で製作した蓋然性が高い。いずれも終末期の溝状遺構から出土しており、同じ遺構からは他にも甕や西谷式高杯、有孔鉢などの近畿北部系土器が得られている。



第6図 有段口縁台付甕の類例

河内・大和・山城 大和では乙木・佐保庄遺跡で、古墳時代初頭の土器が一括廃棄されたと考えられる遺構から台付甕が出土している(第6図3)。脚部を欠くものの、山陰系の口縁部にミガキを施した体部をもつ。先述したように山陰地域では台付甕はみられず、むしろ丹後の大田南古墳や古殿遺跡などで類例が認められることから、近畿北部を故地とすると考えられる。平等坊・岩室遺跡ではほかにも近畿北部系土器が得られているが、时期的には終末期前半のものであり、本例よりも前出する資料である。山城では内里八丁遺跡で近畿北部系の口縁部を持ち、体部の形状なども近畿北部のものと類似度が高い精製品が出土している(第6図1)。同じ遺構からは他に

も精製された胎土で製作された完形の土器が出土したと報告されており、土器を一括廃棄した土坑であろう。ともに布留Ⅰ式に並行する時期のものであり、搬入品の可能性も考えられる。

中部瀬戸内 中部瀬戸内では吉備で2点、美作に1点の類例がある。筆者自身で実見していないが、参考資料として挙げておきたい。足守川加茂A遺跡の住居跡から出土したものは、「外面に丹塗りがされ、内面に朱が付着」していると報告されている。同一の遺構からは朱生産と関連のあるL字状石杵が共伴しており、興味深い事例である。また、酒津遺跡出土資料の中にも類例が認められる。口縁部の形状や体部の器形は丹後の台付甕に類似するが、脚部形状から故地を北陸に持つ可能性も考えられる^(註13)。いずれも後期末の所産である。

以上のように、後期には播磨東部から摂津に在地で変容した形のがみられ、終末期には広域で類似度の高い臨地製土器、もしくは搬入品と考えても大過ないものがみられるようになるという、ほかの近畿北部系の器種と同じような出土傾向にあるといえる。筆者が実見した限り、摂津・播磨の例にかんしていえば被熱痕跡は認められないものが多数を占め、通常の甕としての使用状況は考え難い。台付甕は日常的な用途で使用されていない器種であるにも関わらず、近畿北部系土器の様式圏外でも散見されるのである。出土遺構からみても、墳墓からの出土がみられないことを除いては近畿北部での様相と大きく変わることはない。住居跡など生活域と想定される区域ではなく土器が一括廃棄された溝や土坑から出土する事例が多いということも台付甕の使用実態の一端を示しているのであろう。近畿北部での出土事例をさらに整理する必要があるが、集落においても何らかの祭祀に用いられたと考えるならば、他地域で出土する台付甕の持つ意義は当該期の地域間交流を考える上で軽視することはできない。

5. 小結

以上、丹後にみられる特殊な台付甕について集成と若干の検討を行った。この特殊な台付甕は後期中葉に丹後で誕生し、墳墓祭祀だけでなく集落での祭祀にも使用されたと考えた。そして、他地域においてもしばしば丹後の台付甕に影響をうけて製作されたと考えられる資料がみうけられることから、ある意味「重要な」器種であった可能性を指摘しておきたい。小稿では資料集成に終始し、その出現の契機や拡散の背景に関しては推論に推論を重ねたきらいがある。また、自身で実見しえなかった資料も少なくなく、実際の使用状況にまで踏み込んで言及することはできなかった。検討不足ではあるが、今後の課題としておきたい。

(きりい・りき＝当調査研究センター調査課調査第3係調査員)

【第2図】 1：大山墳墓群第28号主体部 2：左坂墳墓群G支群 3：古天王5号墓第10主体部 4：大山墳墓群第17主体部 5：的場遺跡 6：金谷1号墓 7・8：白米山北墳丘墓礫敷遺構 9：内和田2号墓 10：香具山城下層墳丘墓 11：大田南2号墳 12：大田南5号墳 13・14：松山遺跡 15：石田谷遺跡 16：浦入遺跡 17・18：浅後谷南遺跡 19・20：古殿遺跡

なお、遺構・遺物の実測図および写真は各報告書から引用したが、その出典の多くは紙幅の関係で省略せざるを得なかった。ご容赦願いたい。

- 注1 拙稿「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」（『京都府埋蔵文化財論集』第7集 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2016
- 注2 以下、台付甕とする。
- 注3 肥後弘幸「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年（上）」（『太邇波考古』第7号 両丹考古学研究会）1995
- 注4 河野一隆「白米山北古墳」（『京都府遺跡調査概報』第57冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター）1994
- 注5 藤本康司「丹後系台付甕点描－弥生時代終末における有段口縁台付甕の様相－」（『小羽山墳墓群の研究』清水町教育委員会）2010
- 注6 本論での時期区分は高野陽子「丹後地域」（『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター）2006に拠る。三坂神社式＝後期前葉、大山式＝後期中葉、西谷式＝後期後葉とする。
- 注7 前掲・河野1994、藤本2010においても、出現の1点を示す可能性があると示唆されている。
- 注8 肥後弘幸「墓壇内破碎土器供献」（『みずは』14・15号 大和弥生文化の会）1994
- 注9 石井智大「第2節 北近畿の弥生墳墓における二種の土器出土状況とその意義」（『香住門谷遺跡群』豊岡市教育委員会）2003
古屋紀之『古墳の出現と葬送祭祀』雄山閣 2007
- 注10 ただし、後期前葉の集落の調査事例自体が寡少であることに起因する可能性はある。
- 注11 紙幅の関係で、第5図の出典のうち、前掲・注1文献と重複するものは省略した。
芥川：橋本久和編『芥川遺跡発掘調査報告書―縄文・弥生集落跡の調査―』高槻市文化財調査報告書第18集 高槻市教育委員会 1995 5は筆者実測・製図。資料見学に際しては高槻市教育委員会、三好裕太郎氏に便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げる。
宅原（有井地区）：安田 滋・斎木 巖「31. 宅原遺跡（有井地区）」（『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会）1992
乙木・佐保庄：鈴木裕明編『乙木・佐保ノ庄遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告代第92冊 奈良県立橿原考古学研究所 2005
足守川加茂A：島崎 東編『足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡（本文）』足守川河川改修工事に伴う発掘調査 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94 岡山県教育委員会 1995
酒津：間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」（『瀬戸内考古学』第2号）1958
- 注12 前掲・注1文献
- 注13 吉備では津守遺跡で北陸系の甕と装飾器台が出土しており、北陸との土器交流を示す資料が散見される。それに対して、近畿北部系土器が直接搬入された例は知られていない。

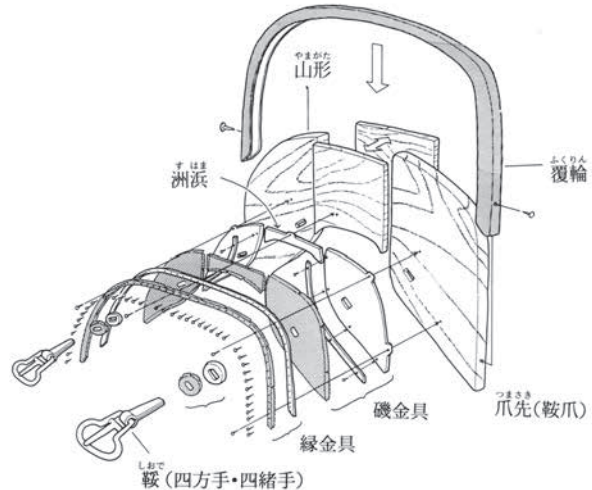
古墳時代の鞍金具における法量検討

清水早織

1. はじめに

古墳時代の鞍は様々な技術を集結させたものであり、多くの部材から構成されている。しかし、大部分は木製で製作されるため、腐食が起こり全貌を復元することが難しい。

鞍は前輪と後輪に区分され、左右の磯金具、その両者に挟まれた中央に洲浜金具を取り付ける。それらは鉄板の上に金銅板を取り付けて、縁金具を鋳で固定する構造となっている(第1図)。鞍の規格性は田中由理氏が磯金具の外形線を重ね合わせ2種類の形態に分類した。そして、磯金具の長さが共通しているとし、規格性を示した。^(注2)



第1図 後輪の鞍の構造(注1から転載)

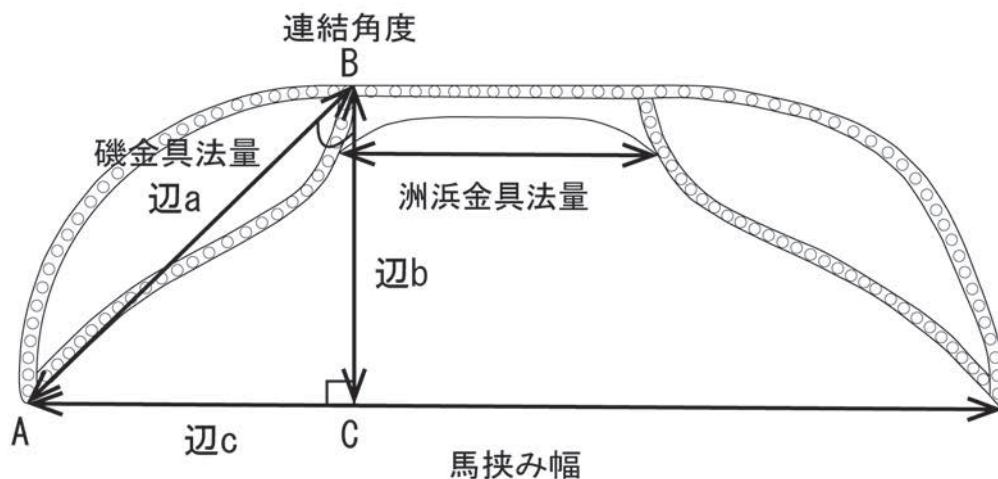
今回は、磯金具の計測だけではなく、金銅製鞍金具の各部材が規格化されているか否かについて資料を通してみていきたい。

2. 法量計測

まず、金銅製鞍金具には、磯金具と洲浜金具が繋がった状態の一体造りのものと磯金具と洲浜金具が別々に取り付けられる別造りのものがある。今回、磯金具と洲浜金具の法量がなければ計測できない部分を含むことから、別造りで製作されたものを取り扱った。法量検討では磯金具の先端部分の斜辺の数値、洲浜金具は金具の最下部両端の法量、馬挟み幅を対象として計測した。各部位の計測を行うとともに、磯金具と洲浜金具は連結していることが分かることから、その連結角度の差異についても計測を行った。計測位置は第2図に示した通りである。ただし、法量の検討を行う上で、馬挟みの法量については、数値を正確に検出するために磯金具・洲浜金具が完存していることを条件とした。時期としては、6世紀前半から7世紀前半の資料を中心として取り上げる(表1)。

なお、法量の計測においては、発掘調査報告書や論文に掲載されている図面からデータを抽出した。また、金銅板の下に鉄を使用していることから錆による形状変化のために正確な数値を計測するのは難しいことを念頭においておく必要がある。

鞍金具の前輪と後輪は基本的に同じ形状をしている。しかし、区別がないわけではない。それ

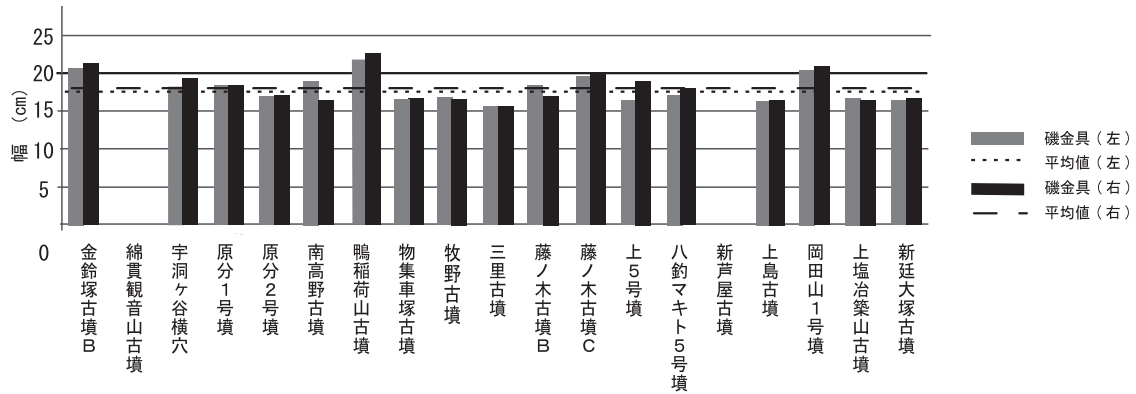


第2図 鞍計測位置模式図

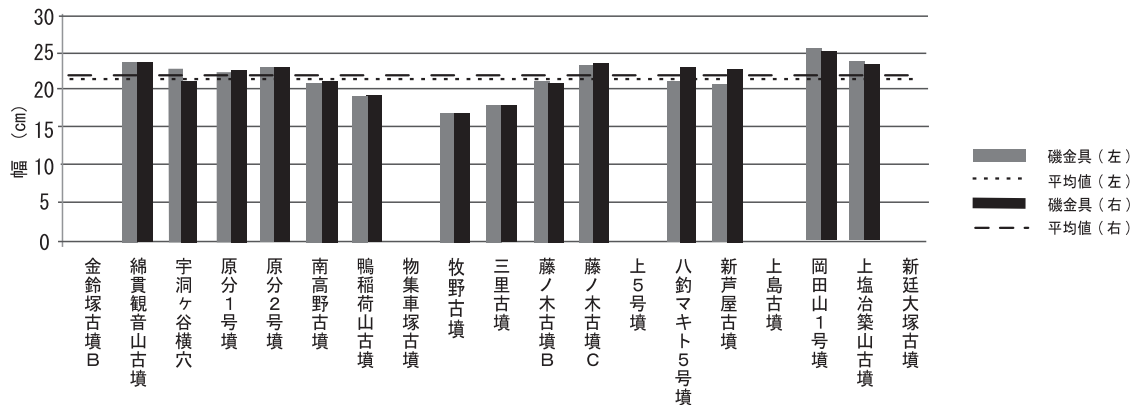
表1 法量検討資料

番号	出土古墳・ 横穴墓	出土地	磯金具 (cm)				馬挟み幅 (cm)		洲浜金具 (cm)		連結角度 (°)		参考文献
			前輪		後輪		前輪	後輪	前輪	後輪	前輪	後輪	
			計測値 (左)	計測値 (右)	計測値 (左)	計測値 (右)							
1	金鈴塚古墳 B	千葉県	20.8	21.2	—	—	—	41.2	—	—	—	—	注 3
2	綿貫観音山古墳	群馬県	—	—	23.8	23.8	30.2	41.6	—	14.9	33	38	注 4
3	宇洞ヶ谷横穴	静岡県	18.6	19.2	22.5	21.3	30.0	36.6	13.2	12.9	31	34	注 5
4	原分 1 号墳	静岡県	18.6	18.6	22.2	22.5	30.6	43.2	11.7	15.0	30	41	注 6
5	原分 2 号墳	静岡県	18.3	18.3	23.1	23.1	29.7	39.5	9.0	13.1	33	37	
6	南高野古墳	岐阜県	18.9	17.1	21.6	21.6	27.1	43.8	10.2	14.1	32	44	注 7
7	鴨稲荷山古墳	滋賀県	21.6	22.0	19.2	19.2	—	—	—	—	—	—	注 8
8	物集女車塚古墳	京都府	16.8	16.9	—	—	33.9	—	5.7	—	40	—	注 9
9	牧野古墳	奈良県	17.6	17.0	17.0	17.0	26.2	—	8.8	—	29	—	注 10
10	三里古墳	奈良県	15.6	15.9	18.3	18.3	30.6	37.7	9.6	12.2	42	46	注 11
11	藤ノ木古墳 B	奈良県	18.6	17.8	21.8	21.6	29.2	40.6	6.6	13.8	41	40	注 12
12	藤ノ木古墳 C	奈良県	19.8	20.0	23.2	23.6	34.2	40.6	10.2	13.0	37	36	
13	上 5 号墳	奈良県	17.1	18.9	—	—	30.9	—	9.9	—	36	—	注 13
14	八釣マキト 5 号墳	奈良県	18.2	18.6	21.6	23.0	—	42.6	—	13.0	—	43	注 14
15	新芦屋古墳	大阪府	—	—	20.7	22.5	—	—	—	—	—	—	注 15
16	上島古墳	島根県	17.6	17.8	—	—	31.6	—	10.4	—	36	—	注 16
17	岡田山 1 号	島根県	20.5	20.9	26.3	25.3	33.0	—	10.9	—	33	—	注 17
18	上塩冶築山古墳	島根県	17.6	17.2	23.8	23.2	29.2	43.9	10.4	15.1	33	40	注 18
19	新廷大塚古墳	福岡県	17.4	17.7	—	—	28.5	—	10.5	—	29	—	注 19
平均値			18.4	18.5	21.8	21.9	30.3	41.1	9.6	13.7	34.1	40	

は馬の尻には雲珠や辻金具、杏葉といった飾り金具を装着することから判断することができる。それらをつなぐ繫といわれるものを鞍金具で固定する。鞍金具は一部例外もあるが後輪に取り付けられることが多く、鞍金具の有無によって鞍の前輪と後輪の認識がなされている。しかし、本稿では、法量を前輪と後輪の両方を計測することで前後の関係性について数値から確認していく。



第3図 前輪礮金具法量



第4図 後輪礮金具法量

①礮金具

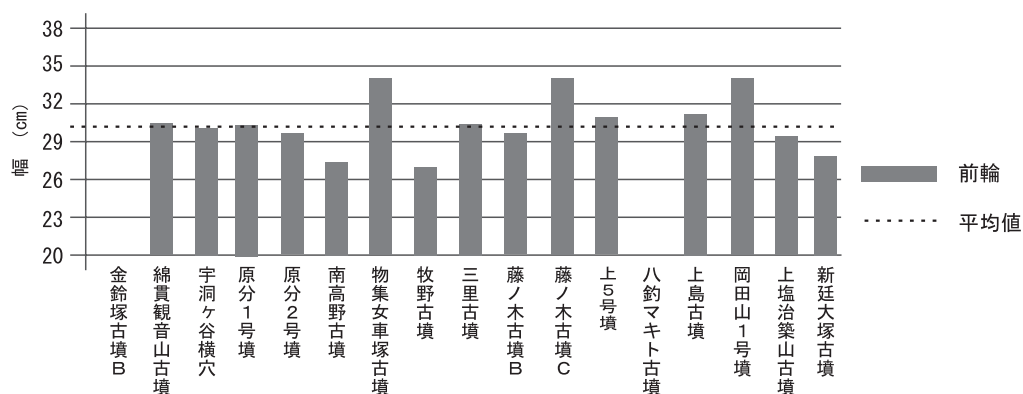
礮金具を計測するために取り扱った資料は左右の礮金具が完存しているものに限定した。計測位置は第2図の左側の礮金具に示している。第2図のA点とB点を結ぶ線「辺a」と示された斜辺の数値を計測した。なお、礮金具は左右にあることから、右側の礮金具も左側の礮金具の計測位置と同様に計測した。計測結果は表1の通りである。

その数値をグラフ化したものが第3図と第4図である。このグラフを見ると、若干の誤差は見取れるが、どの古墳から出土した礮金具も、左右ともほとんど同じ数値であることが見て取ることができる。つまりは、左右に取り付けられる礮金具は、精密に同じ形状をしていることがこのグラフから読み取れ、両者の礮金具は左右対称に製作されていると考えられる。

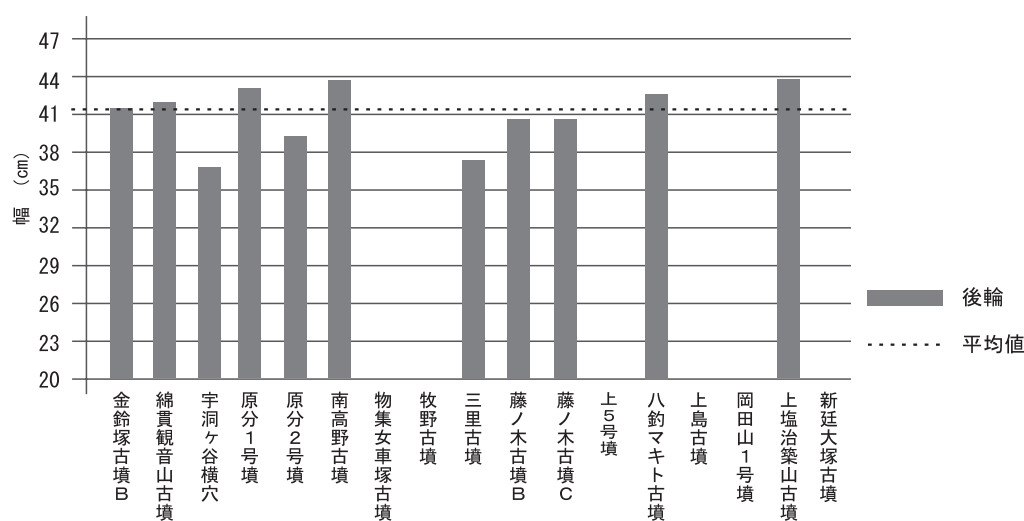
なお、前輪と後輪に分けて平均値を計測すると、前輪は左側が18.4cm、右側が18.5cm、後輪は左側が21.8cm、右側が21.9cmである。そして、前輪と後輪の礮金具が両者とも完存している資料を計測すれば、前輪の数値が後輪の数値よりも大きくなることはなく、礮金具の形状から前輪と後輪では規模に差があることが分かる。

②馬挟み幅

馬挟み幅の計測は、左右の礮金具の先端を結んだ距離を指す(第2図)。ただし、左右の礮金具と洲浜金具が完存していなければ計測することはできないので、この条件を満たす資料を計測の対象とした。この計測結果も表1に示している。表1に記載した数値をグラフ化したものが第5



第5図 前輪馬挟み幅法量



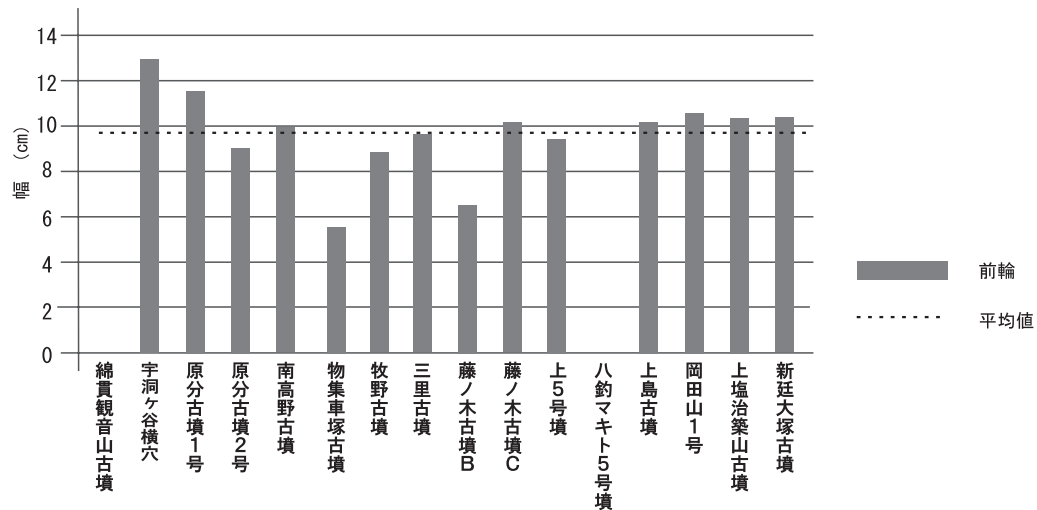
第6図 後輪馬挟み幅法量

図と第6図である。この両者は数値に多少のばらつきが認められるが、その数値が大きく変わるものではない。

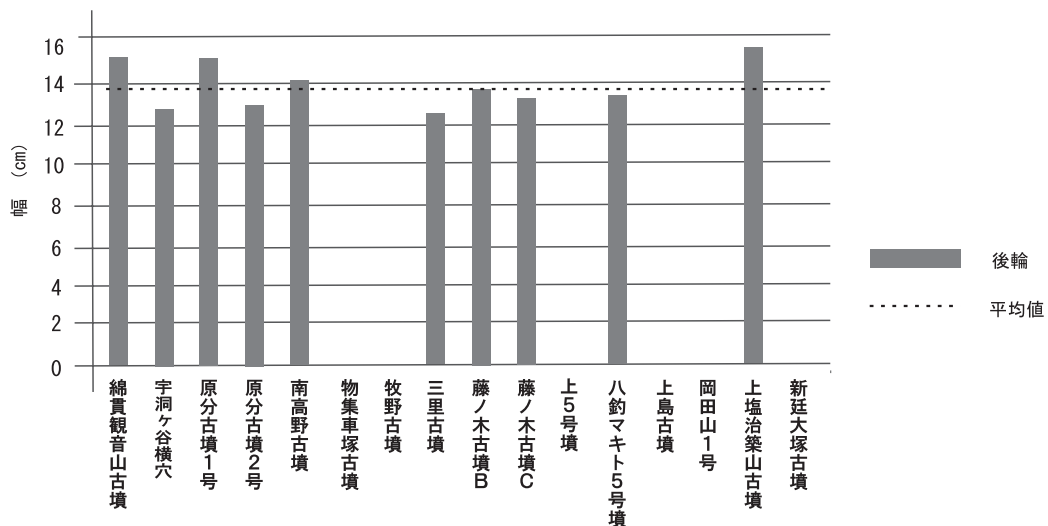
ところで、馬挟み幅の前輪の平均値は30.3cm、後輪の平均値は41.1cmという算出結果になった。その平均値を比べると、前輪と後輪で10.8cmの差が認められる。馬挟み幅に差があるということは、単純に考えると左右の磯金具の幅が離れているということである。つまり、左右の磯金具を繋ぐ洲浜金具の法量と磯金具と洲浜金具の接続部分の角度に差があると考えられるため、次はこの洲浜金具の法量を見ていきたい。

③洲浜金具

洲浜金具は、下部の爪先の先端部分の幅を計測した(第1図)。計測結果は、表1に示した通りである。第7図と第8図で個々の前輪と後輪の数値を比べても後輪の方が前輪より大きい。また、前輪の平均値が9.6cm、後輪の平均値が13.7cmである。この平均値で前輪と後輪の洲浜金具を比較しても、どの鞍金具においても後輪の洲浜金具の法量の方が大きい。ここで鞍の製作が洲浜金具の法量において前輪と後輪の規模に差がつけられていることが分かる。しかし、洲浜金具の法量のみで規模の差がついているわけではない。それを確認するには前輪と後輪の洲浜金具の法量



第7図 前輪洲浜金具法量

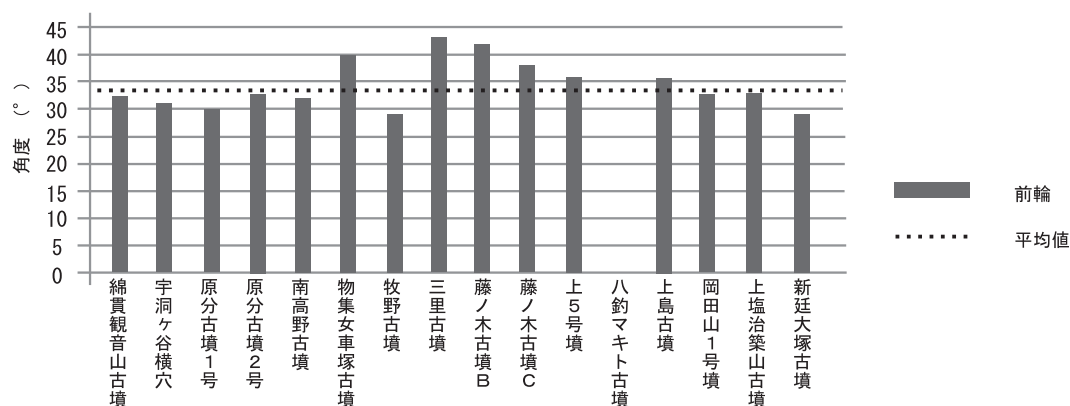


第8図 後輪洲浜金具法量

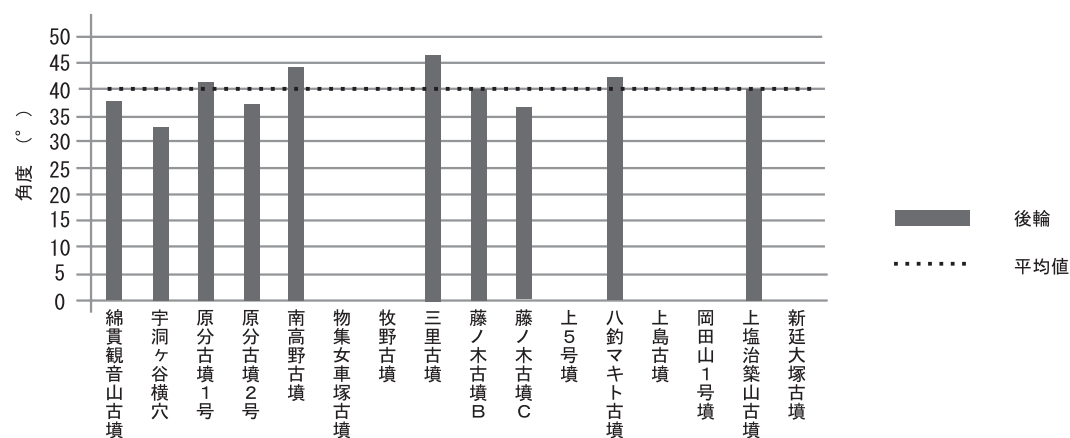
が同じか、ほぼ変わらないものを比較し、馬挟み幅の法量が異なっていることを明らかにしなければならない。ここでは、宇洞ヶ谷横穴の前輪の洲浜金具と原分2号墳の後輪の洲浜金具について見ていきたい。宇洞ヶ谷横穴の前輪の洲浜金具は13.2cmで原分2号墳の後輪の洲浜金具は13.1cmである。両者の洲浜金具は0.1cmの差異しか見受けられないが、馬挟み幅の数値が9.5cmも異なる。洲浜金具の法量がほぼ同じであるにも関わらず、馬挟み幅の法量に差がある。つまり、馬挟み幅の法量が確定するのは洲浜金具の法量だけではないということである。それは、洲浜金具と磯金具の接続部分における連結している角度の差が、関係していると考えられる。次にこの角度の差(以下、連結角度と称する)を計測することによって金銅製鞍金具を製作する際に、法量だけでなく角度も関係していることを見ていきたい。

④連結角度

これまで、磯金具、馬挟み幅、洲浜金具といった直線的な法量を計測してきたが、これらは部材単体の法量であった。馬挟み幅においてはこの連結角度の計測方法に関しては若干の工夫をほ



第9図 前輪連結角度



第10図 後輪連結角度

どこした(第2図)。まず、先述した磯金具の先端部分のA点とB点を繋ぐ磯金具の法量の部分を辺aとし、B点と馬挟み幅の線上に90°のばした線で直角三角形を作る。その際に磯金具と洲浜金具が接続されている角度を連結角度とした。その結果、計測した結果は表1の通りである。第9図と第10図で前輪と後輪がそろっている資料を個々で見比べても前輪より後輪の方が角度が広がっていることが分かる。また、全ての連結角度の平均値は、前輪が34.3°、後輪が40°であり、この平均値からも前輪と後輪の大きさの関係は後輪の方が大きいことが分かる。

3. まとめ

今回、金銅製鞍金具の各部材の計測を行った。磯金具、馬挟み幅、洲浜金具、連結角度について順番に見てきたが、磯金具は前輪の左側が18.4cm、右側が18.5cmで、後輪では左側が21.8cm、右側が21.9cmという平均値が検出できた。前輪・後輪ともに計測した左右の磯金具の法量はほとんど変わりのないものであり、磯金具の形状だけで見ると左右対称に製作されていることが分かる。磯金具の後輪は前輪より大きく製作されている。馬挟み幅も前輪と後輪との平均値では10.8cmの差異が確認され、後輪は前輪より大きく製作されていることが分かる。また、その馬挟み幅の確定は洲浜金具の長さや磯金具の傾きによって変化した。その連結角度においても、前輪

は34.1°で後輪は40°という平均値を確認した。法量だけでなく連結角度においても大幅に異なる角度が表れることはなかったことから、金銅製鞍金具の各部材の法量だけでなく、左右の磯金具の傾きにも規格があったと考えられる。

金銅製鞍金具の各部材の法量計測により鞍製作に規格性があったと考えられる。今回計測したどの部分においても、前輪と後輪の関係性は、後輪の方が前輪より馬挟み幅が大きく製作されているということが明らかになった。この関係性は馬の体形が関係していると考えられる。また、鞍は馬に装着させる際に、馬の皮膚を傷つけないためのクッションとして使用された下鞍を装着させる。そのクッションが馬の腰と鞍の間に挟まれており、馬挟み幅が馬の腰幅に合う規模で製作されているとは考えにくい。一方、馬の背で鞍を固定し、安定させるためには前輪と後輪の馬挟み幅に馬の体形に合わせて違いを持たせる必要があり、規格性を持って製作されたと考えられる。また、各鞍は汎用性を持たせるために実際の馬の体形よりも少し大きく製作されていることも考えられる。馬の体格との関係性は今後の課題としたい。

(しみず・さおり＝当調査研究センター調査課調査第2係調査員)

- 注1 『黄金に魅せられた倭人たち』 鳥根県八雲立つ風土記の丘資料館 1996
- 注2 田中由理「馬具製作における技法の差異と規格性」(『菟原Ⅱ－森岡秀人さん還暦記念論文集－』菟原刊行会) 2012
- 注3 宮代栄一「金鈴塚古墳出土馬具の研究」(『金鈴塚古墳研究』第2号 木更津市郷土博物館金のすず)2014
- 注4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫観音山古墳Ⅱ石室・遺物編』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第225集 群馬県教育委員会・(財)群馬県文化財調査事業団 1999
- 注5 静岡県教育委員会『掛川市宇洞ヶ谷横穴発掘調査報告』静岡県文化財保存協会 1971
- 注6 鈴木一有『原分古墳 平成19年度(都)沼津三島銭重点街路整備事業(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 調査報告編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第184集 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008
- 注7 青木健太郎 他『南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡 岐阜県文化財保護センター調査報告書』第51集 (財)岐阜県文化財保護センター 2000
- 注8 小野山節「琵琶湖周辺の6世紀を探る」(『平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査研究成果報告書』 京都大学文学部考古学研究室) 1995
- 注9 向日市教育委員会『物集女車塚古墳』向日市教育委員会 1988
- 注10 広陵町教育委員会『史跡牧野古墳』奈良県立橿原考古学研究所 2005
- 注11 右島和夫『平郡・三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第33集 奈良教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1977
- 注12 奈良県立橿原考古学研究所編『斑鳩藤ノ木第一次調査報告書』 1990
- 注13 奈良県立橿原考古学研究所編「上5号墳」(『奈良県文化財調査報告書』第92集) 2003
- 注14 明日香村教育委員会文化財課編『明日香村遺跡調査概報－平成11年度－』 1999

注15 新芦屋古墳においては筆者が資料調査において実際に計測した数値である。

注16 『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』 第17集 出雲市教育委員会 2007

注17 西尾良一『出雲岡田山古墳』 島根県教育委員会 1987

注18 松尾充晶『上塩冶築山古墳の研究』 島根県古代文化センター調査研究報告書4 島根県教育委員会・島根県古代文化センター 1999

注19 「新廷大塚古墳」(『鞍手町文化財調査報告』第3集 鞍手町教育委員会) 1985

謝辞

本論は2015年に提出した修士論文を一部加筆修正したものである。執筆するに当たって当時担当教員である奈良大学文学部の豊島直博先生、副担当教員坂井秀弥先生に暖かいご指導とご鞭撻を得たことを記したい。また資料調査やご意見、ご教示などを以下の方々から賜った。(敬称略)

安倍みき子、諫早直人、梅本康広、大江克己、岡田大、春日井恒、阪口英毅、澤田正明、清水篤、高木清生、高橋真希、田中由理、塚本敏夫、中西克宏、西田絢香、初村武寛、花谷浩、桃崎祐輔、森本徹

美濃山廃寺出土新羅系軒丸瓦について

筒井崇史

1. はじめに

美濃山廃寺は、京都府八幡市美濃山古寺に所在する古代寺院である(第1図)。昭和初期から軒瓦などが出土することや「古寺」という小字名などから古代寺院の存在が考えられていた。昭和52年に初めて発掘調査が行われ、瓦や掘立柱建物などが確認されたものの、寺院の概要を明らかにするまでには至らなかった。^(注1)その後、平成11～15年の5か年にわたって、八幡市教育委員会による美濃山廃寺の範囲確認調査が行われた。その結果、寺域がほぼ確定するとともに寺域の内外で多数の掘立柱建物が検出された。しかし、礎石建物や基壇等は確認できず、塔や金堂は発見されなかった。一連の調査で出土した遺物から美濃山廃寺は奈良時代前半ごろに創建され、平安時代前期には廃絶したものと考えられた。^(注2)

その後、新名神高速道路の整備事業が本格化するとともに、美濃山廃寺の立地する丘陵に対する開発計画が明らかになり、関係機関と調整の上、当調査研究センターと八幡市教育委員会が調査を実施することとなった。調査は平成23・24年度に実施し、その調査の成果についてはすでに報告済みである。^(注3)これらの報告によって、美濃山廃寺の寺院としての構造や変遷を明らかにするとともに、美濃山廃寺における渡来系要素の存在を指摘した。

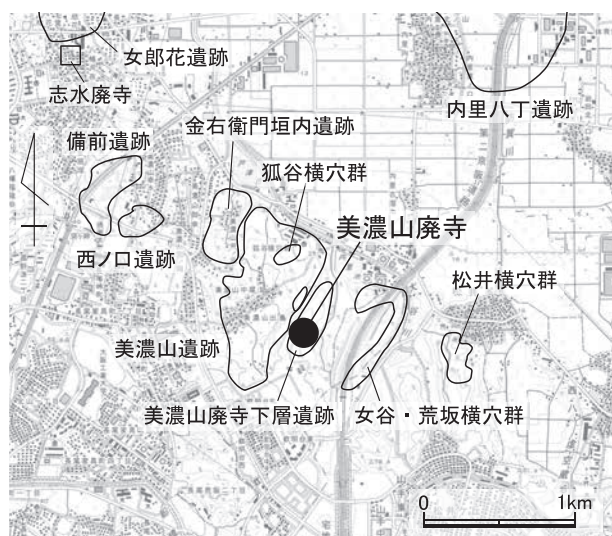
本稿では、報告で指摘した美濃山廃寺における渡来系要素のうち、新羅系とされる軒丸瓦について再検討を行い、この軒丸瓦の出自について私見を述べることにしたい。

2. 新羅系軒丸瓦と美濃山廃寺

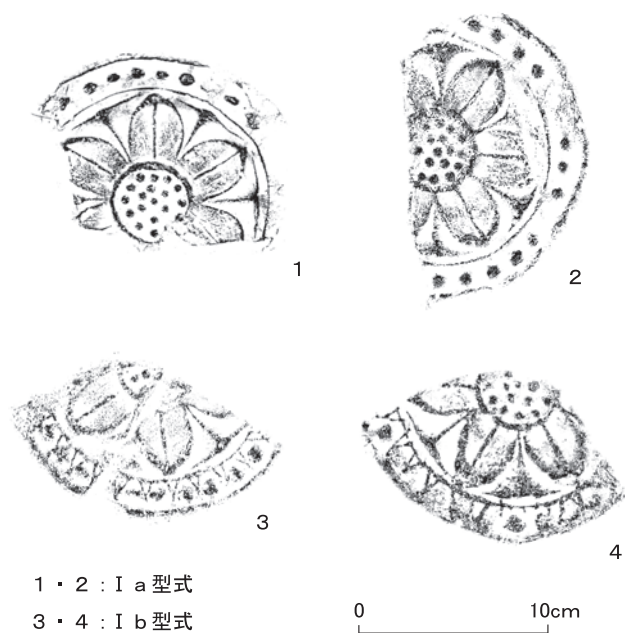
①美濃山廃寺出土の新羅系軒丸瓦

報告では美濃山廃寺軒丸瓦Ⅰ型式に分類しており、範の掘り直しから細分型式としてaとbに分けることができる(第2図)。

軒丸瓦Ⅰ型式は、単弁六葉蓮華文で、瓦当径16cm前後に復元できる。Ⅰa型式(第2図1・2)は内区の各蓮弁の中央には稜線を入れ、根元が窪み、弁端にいくにしたがって反り上がっている。中房の蓮子は1+6+16である。外区には大粒の珠文が密にめぐっている。このことが本型式の大きな特徴となっている。瓦当と筒部は、瓦当裏面上端で接合する。接合部である瓦当裏面にはヘラに



第1図 美濃山廃寺および主要遺跡分布図
(国土地理院 1/50,000 京都南西部)



第2図 美濃山廃寺出土軒丸瓦Ⅰ型式拓影

を施し、刻みは認められない。瓦当側面は縦方向のケズリである。瓦当部上面はナデ、丸瓦筒部凸面はケズリ、凹面は布目である。胎土、焼成、色調はほぼⅠa型式に準じる。なお、先述の九頭神廃寺では、この軒丸瓦と同範もしくは同文様のものは出土していない。

②美濃山廃寺の概要と軒丸瓦Ⅰ型式の出土状況

美濃山廃寺では、近世以降の農地開墾等により、大きく攪乱を受けており、発掘調査では塔や金堂の痕跡を確認することはできなかった。しかし、寺域を区画する一辺93～96mの方形区画の存在や礎石と掘立柱を併用した建物跡、多数の掘立柱建物を検出し、さらに大量の瓦類の出土から一定の寺観を整えた寺院跡であることが明らかになった(第3図)。そして、瓦が集中的に出土した寺域南部に塔や金堂が存在した可能性が高いと考え、「金堂相当施設」を推定した。

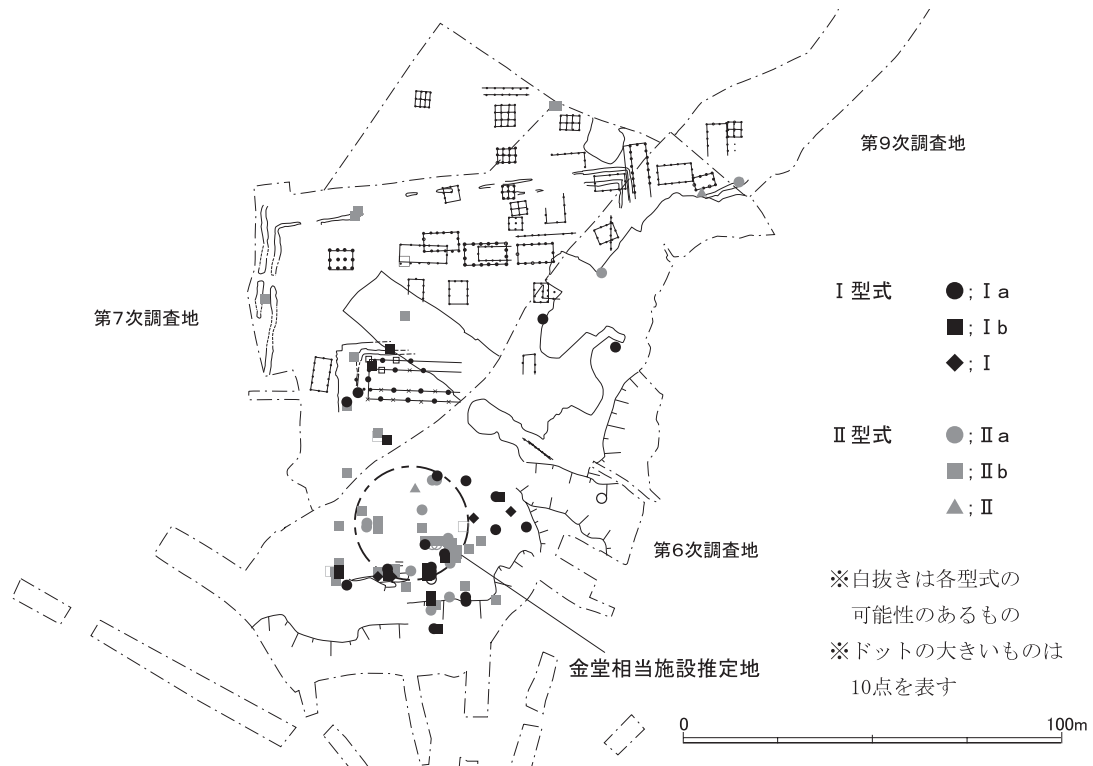
ところで、美濃山廃寺では軒丸瓦を9型式、軒平瓦を3型式確認した。このうち、軒丸瓦Ⅲ型式以降のものは寺域の拡充期や堂宇の補修時のものと考えている。また、軒平瓦には軒丸瓦Ⅰ型式と組み合うものはないと考えている。

軒丸瓦Ⅰ型式は、上述の「金堂相当施設」の推定地とした寺域の南部で集中して出土した(第3図黒点の分布)。Ⅰa・Ⅰb両型式を合わせて47点^(注5)が出土している。ただし、金堂相当施設推定地周辺では、軒丸瓦Ⅱ型式(複弁八葉蓮華文)の出土点数(131点)がⅠ型式の出土点数を大きく上回っており、その出土量からⅡ型式が美濃山廃寺の創建瓦と判断した。しかし、Ⅰ型式も一定の出土量がみられることや型式学的に古い特徴を有することなどから、Ⅰ型式もⅡ型式とともに、美濃山廃寺の創建瓦の1つである可能性を考えた。

③美濃山廃寺の時期区分

美濃山廃寺では、上記の瓦類の分析や出土器の型式、遺構の重複関係などから、大きく4期区分(第Ⅰ～Ⅳ期)の遺構の変遷を考えている。このうち、第Ⅰ期が軒丸瓦Ⅰ型式と同Ⅱ型式が使用

より刻みを入れる。瓦当部側面はケズリあるいはナデで調整し、裏面の調整はナデである。色調は黒灰色ないし青灰色を呈する。胎土は密で、砂粒をほとんど含まない。焼成は軟質なものが多い。大阪府枚方市九頭神廃寺出土軒丸瓦K Z M24型式と同文様^(注4)である。Ⅰb型式(第2図3・4)は内区の特徴はほぼⅠa型式と同じであるが、外区に線鋸歯文を施す点が異なる。線鋸歯文は本来の範を掘り直すことで追加されており、Ⅰb型式がⅠa型式に後出することは明らかである。また、瓦当と筒部の接合部である瓦当裏面にはナデ



第3図 美濃山廃寺遺構配置図および軒丸瓦 I・II 型式出土分布図

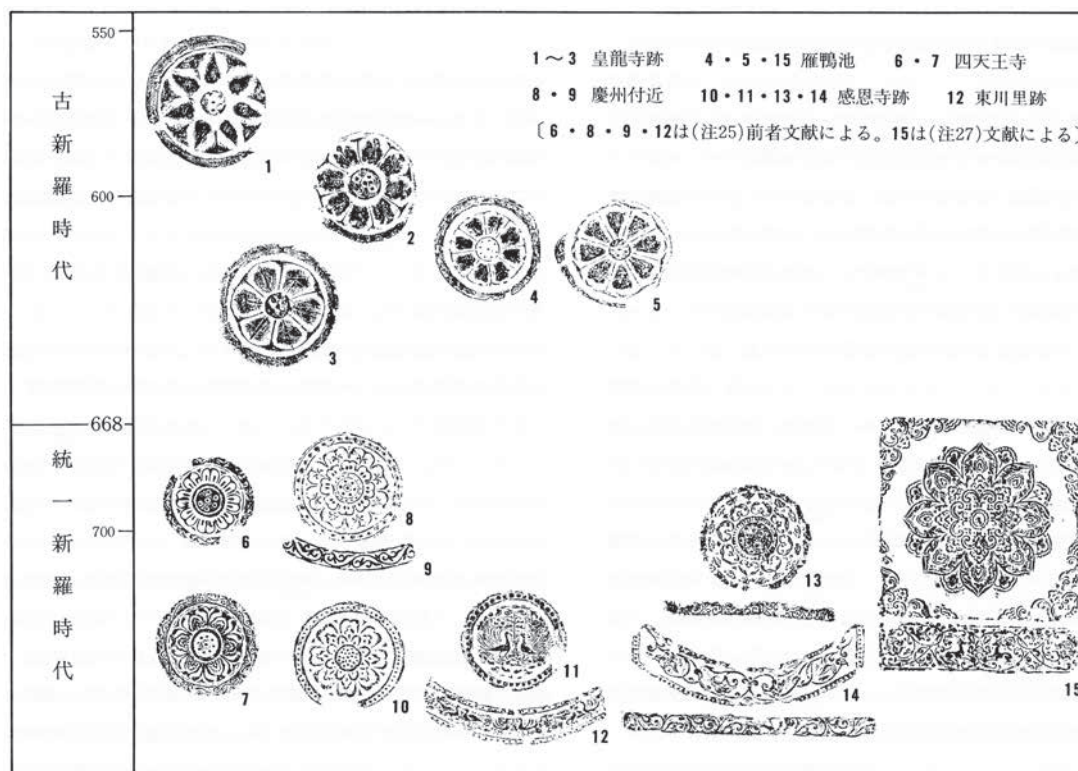
された、美濃山廃寺の創建期と考えている。その年代については、出土した土器等から7世紀後半～8世紀初頭の年代を与えた。

3. 軒丸瓦 I 型式の再検討

①軒丸瓦 I 型式と新羅出土軒丸瓦の比較

軒丸瓦 I 型式の最大の特徴は、外区に大粒の珠文を密にめぐらせる点である。このように外区に珠文をめぐらす軒丸瓦について、亀田修一氏は「外区に珠文だけをめぐらすものは日本ではあまりみられず、新羅の瓦では比較的多くみられる特徴」と指摘されている。^(注6) 亀田氏が作成された新羅軒瓦の変遷図(第4図)によると、外区に珠文を有するものとして8・10がある。これらの内区には蓮華文や宝相華文を主体とし、かつ複合花文となっているものも多いという。8は慶州市雁鴨池で出土したもので、創建時の軒丸瓦とされる資料であるが、同時期の軒平瓦の類例資料に「儀鳳四年(679年)」銘のものがあることからそのころのものと推定されている。また、10は同じく慶州市感恩寺で出土したもので、8のような軒丸瓦から変化したものとされるが、感恩寺の創建は『三国遺事』によると、「682年創建」と伝えられている。こうした年代観から8や10のような軒丸瓦は、668年の三国統一以降の統一新羅時代に盛行するとされている。^(注7)

一方、稲垣晋也氏によれば、珠文(なお、稲垣氏は「連珠文」と表記されているが、以下でも「珠文」と表記する)を有する軒丸瓦は、唐の2代皇帝太宗(在位626～649年)の陵墓である昭陵で使用されていた軒丸瓦にみられ、初唐(7世紀代)にこうした珠文が盛行するという。^(注8) これが70年代には新羅に伝わったとされる。



第4図 新羅軒瓦変遷図(注7文献より引用)

次に、内区の単弁蓮華文は統一新羅以前(古新羅時代)の軒丸瓦によく見られ、その外区外縁は素縁文であることが多い(第4図2・3)。また、必ずしも6葉とは限らず、8葉の例も多い。第4図の2・3はともに皇龍寺跡出土資料で、特に3は同文様のものが芬皇寺跡、雁鴨池などで出土しており、その後の統一新羅時代に創建された寺院からは出土していないことから、7世紀前半から680年代まで使用されたと考えられている。

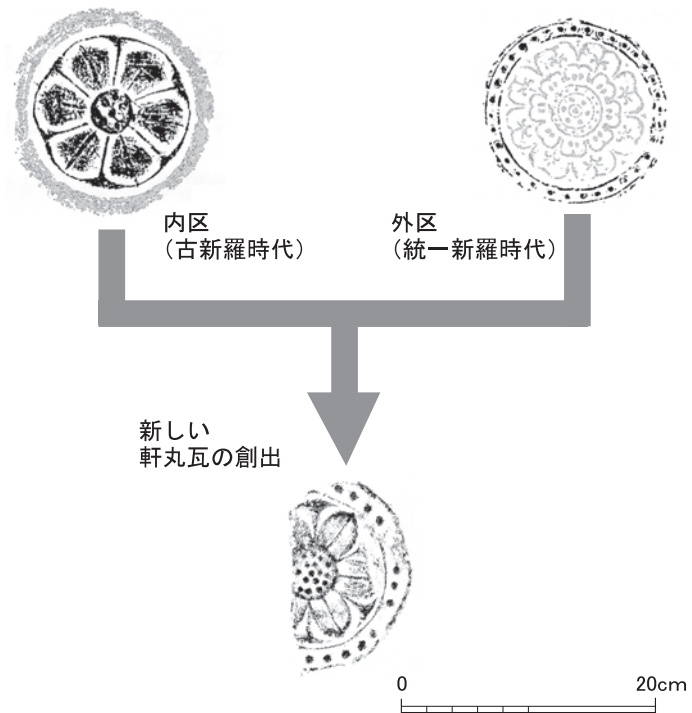
②軒丸瓦Ⅰ型式の創出とその年代

以上の点をふまえて、軒丸瓦Ⅰ型式の特徴をまとめると、内区に古新羅時代の軒丸瓦の特徴とされる単弁六葉蓮華文を配するのに対して、外区に統一新羅時代以降に顕著になる珠文を配していることになる。すなわち「新旧の要素が複合した軒丸瓦」ということができる(第5図)。なお、稲垣氏はこうした外区の珠文が新羅を経由して初唐の瓦様式の影響を受けたものとの考え方を示^(注9)しておられる。

軒丸瓦Ⅰ型式の特徴を以上のようにまとめると、このような軒丸瓦がどこで考案、製作されたのが問題になる。しかし、今のところ、この軒丸瓦の考案地やその製作地を明らかにするための材料に乏しいのが実情である。朝鮮半島の実態は不明であるが、日本国内における同文様の例が美濃山廃寺と九頭神廃寺に限られること(かつ両者は同範ではない)は、両寺院の近くで生産されたと考えることは可能であろう。したがって、考案地も両寺院の周辺であると考えた方がよさそうである。このように考えるならば、新羅による朝鮮半島の統一後、間もない頃に外区の珠文に関する情報が日本に伝わり、それまでの内区の文様に、新たな外区の珠文を複合させた新しい

軒丸瓦を日本国内で創出したと考えることができよう。

その製作時期については、以上のような過程あるいは影響が想定できるとすれば、軒丸瓦Ⅰ型式の出現は、外区における珠文の存在から、新羅による朝鮮半島の統一以降であることになる。その具体的な時期は、断定しにくいだが、古新羅時代の軒丸瓦の特徴を残していることからみて、7世紀第4四半期と考えるのが妥当であろう。このことは、同じく外区に珠文を有する軒丸瓦Ⅱ型式の存在とともに、美濃山廃寺の創建年代を7世紀後半ないし末と想定した報告時の見解ともうまく整合する。



第5図 軒丸瓦Ⅰ型式創出過程(イメージ)

4. まとめ

八幡市に所在する美濃山廃寺出土の新羅系とされる軒丸瓦について検討を加えた。瓦当文様の比較による検討にとどまり、製作技法について議論することができなかった。しかし、報告時に十分な検討ができていなかった新羅系軒丸瓦について、先行研究の成果を参考にしながら、多少なりともまとめることができたのではないかと考えている。ただ、軒丸瓦Ⅰ型式が美濃山廃寺の創建瓦の1つとして採用された経緯については明らかにできなかった。

軒丸瓦Ⅰ型式が主体的でない点を踏まえれば、必ずしも渡来系氏族を美濃山廃寺の造営氏族と断定することはできない。しかし、美濃山廃寺をめぐる渡来系要素は軒丸瓦だけにとどまらず、ほかにも見出すことができる。今回は触れることができなかったが、これらも合わせて検討しなければ美濃山廃寺の造営氏族や造営の背景を明らかにすることは困難と考える。今回検討できなかった遺物や遺構についても機会を見て再検討を加えることにしたい。

(つつい・たかふみ＝当調査研究センター調査課調査第3係主査)

注1 江谷寛『美濃山廃寺発掘調査報告』八幡市教育委員会 1977

注2 大洞真白『美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査(1～5次)報告書』(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第39集 八幡市教育委員会) 2006

- 注3 ①村田和弘・関広尚世ほか「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013
- ②筒井崇史・山崎美輪ほか「美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013
- ③小森俊寛・大洞真白ほか「美濃山廃寺(第8次)・美濃山廃寺下層遺跡(第11次)発掘調査報告書」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集 八幡市教育委員会) 2013
- ④竹原一彦・加藤雅士ほか「八幡インター線関係遺跡発掘調査報告 八幡美濃山廃寺第9次・美濃山廃寺下層遺跡第12次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第160冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2014
- 注4 竹原伸仁『九頭神遺跡－九頭神廃寺－』(『枚方市文化財調査報告』第32集 枚方市教育委員会) 1997
- なお、九頭神廃寺の瓦当径は17.1cm前後と美濃山廃寺のものよりも一回り大きいのが特徴である。
- 注5 ただし、個体数ではなく、破片の点数である。軒丸瓦Ⅱ型式についても同様である。
- 注6 亀田修一「朝鮮半島からみた枚方の寺院と瓦生産」(『枚方歴史フォーラム 継体大王と渡来人』大巧社) 1998
- 注7 亀田修一「百済の瓦・新羅の瓦」(『佛教藝術』第209号 毎日新聞社) 1993
- 注8 稲垣晋也「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅的要素」(『新羅と日本古代文化』吉川弘文館) 1981
- 注9 注8文献

4. ^{しもみずし}下水主遺跡第 8 次 (L・M・O 地区)

所在地 城陽市寺田今橋

調査期間 平成27年 4 月24日～10月 9 日

調査面積 6, 000m²

はじめに 下水主遺跡は城陽市の南西部に位置し、木津川右岸の微高地とその後背湿地に立地する遺跡である。遺跡は南北1,200m以上、東西540m以上と広範囲に分布する(第1図)。今回の調査は、一般国道24号城陽 I C 関連寺田地区改良事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。

調査地は、遺跡の北端にあたる O 地区と、平成26年度に調査を実施した L・M 地区の隣接地に当たる。(今回の調査地を L 2 区・M 2 区と呼称する：第2図)。

調査概要 今回の調査は、平成26年度の調査で確認された島畑の全容と縄文時代晩期の氾濫流路の延長部を明らかにすることを目的として調査を実施した。また、M 地区と L 地区の境界が、東西方向の坪境部分にあたることから、その坪境における島畑の状況を明らかにすることにも留意して発掘調査を実施した。

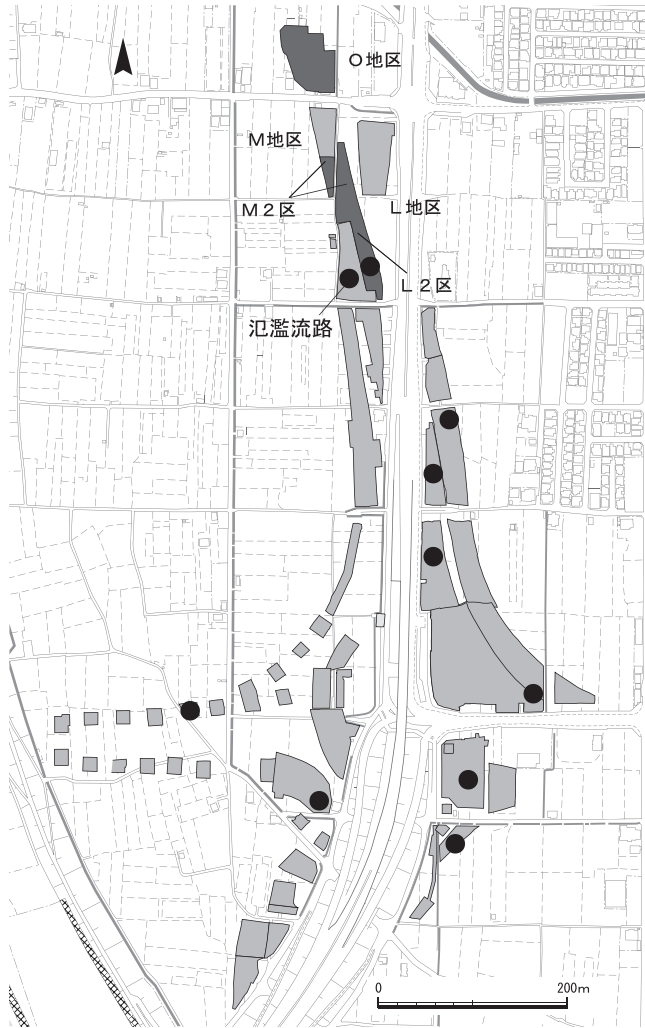
①上層遺構(第3図) L 2 区では、南北方向の島畑 3 か所を検出した。いずれも平成26年度に確認している島畑の北半部にあたる。島畑69は幅9.5m、長さ46m以上、島畑71は幅7.2m、長さ68.6mであることが明らかとなった。また、L 2 区西端で検出した島畑72は、他の島畑のような



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25, 000 宇治)

堅く締まった黄褐色系のシルトである基盤層の削り出しが認められず、小河川の堆積層である粗粒砂上面に盛土を行って島畑を造成していた。島畑72は幅9.3m、長さ20.9m以上で、断面観察では島畑71の造成後、一時期遅れて造成されていることが明らかとなった。

M 2 区では、西半部で平成26年度に検出した島畑80の南延長部を検出し、長さが60m以上であることを明らかにすることができたが、南端部分は調査地外となり確認できなかった。また、調査区東側で南北方向の島畑90を検出した。島畑90は幅11m、長さ35.4m以上で、南半部部分を検出したものの北端部は調査地外となり、確



第2図 下水主遺跡・水主神社東遺跡調査区配置図
(●：縄文遺構・遺物検出地点)

時代の遺構を検出した。弥生時代の遺構としては、島畑80の北半部で円形の土坑2基(S K51・75)が、島畑90の南半部で土坑2基(S K68・69)がある。

S K51は、東西83cm、南北55cm、深さ21cmの楕円形土坑である。S K75は、直径30cm、深さ10cmの円形土坑である。S K69とS K68は約3mと近接した位置にあり、S K68は東西125cm、南北205cm、深さ33cm、S K69は東西185cm、南北330cm、深さ56cmで、いずれも弥生時代中期の土器が出土した(写真1)。また、S K69では土器とともに有茎式石鏃・石槍各1点が出土した。

L2区では明確な弥生時代の遺構は検出できなかったが、島畑の基底面を除去し、さらに掘り下げたところ、標高13.5m付近で平成26年度のL地区調査で検出した縄文時代晩期の氾濫流路を3条検出した(第4図)。

これらの流路は、軟弱な堆積土が木津川の洪水による強い力で生じた氾濫流路である。流路内には極粗粒砂・粗粒砂・細粒砂・シルトが何層にも堆積していた。さらにシルト層を中心に倒木・流木・堅果類の種実などが多量に出土した。

認できなかった。

島畑90の南では、N地区で検出した島畑73の西端部分を検出した。島畑73は島畑72と同様、泥質細粒砂を基盤として成形したものである。なお、島畑上面で認められ耕作土と判断した堆積土からはイネ科植物の花粉が多量に出土している。

島畑73の南側の条里坪境ラインでは、上面幅3.0m、深さ2.0mの幅広で深い東西溝を検出した。

O地区では、南北方向の島畑を5か所検出した。島畑92・93は幅8m、長さ約65mで、島畑の配置は南北方向の長地形を呈している。各島畑間の溝底部には、排水を意図した溝幅0.5～1.0m、深さ0.2～0.3mの小溝が島畑に平行して数条掘削されている。

②下層遺構 島畑の調査終了後、島畑上面から10～15cm掘削して、島畑造成以前の下層遺構の調査を実施した。その結果、O・L2区では検出できなかったが、M2区では島畑の基底面で、弥生

果、O・L2区では検出できなかったが、M2区では島畑の基底面で、弥生

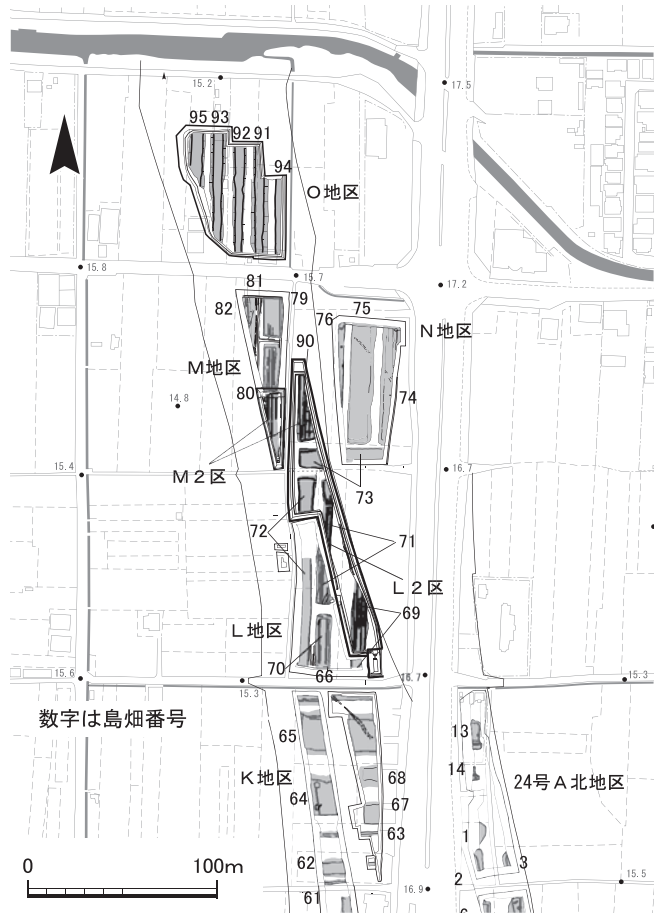
最下層の流路N R60は、砂粒の状況から北西から南東方向に流れており、さらに東側に延びているものと思われる。流路N R60の上面最大幅(南北)は40mである。なお、狭い調査区であるため安全を考慮して流路の底まで調査していないが、流路の深さは1.5mまで確認した。流路内からは大木のほか、堅果類の種実などが多量に出土した。土器は出土しなかったが、植物遺体の放射性炭素年代測定では 2820 ± 30 年yrBPという年代を得ている。

流路N R60が埋没した後、新たに洪水によって生じた上面幅9.8～17.1mの流路N R42がある。流路N R42も流路N R60と同様、大木に混じって堅果類の種実が多く含まれていた(写真2)。平成26年度の調査では、多数の土器が出土しているが、今回の調査では、コンテナ・バット1箱にも満たない出土量である。出土した縄文土器の中には篠原式浅鉢がある。なお、流路N R42の植物遺体の放射性炭素年代測定では 2730 ± 30 年yrBPという年代を得ている。

流路N R42のさらに上層には調査区東壁の観察で幅3.4～5.9m、深さ0.6～0.8mの流路N R38を確認しているが、平面としては明確に確認することができなかった。流路N R38では土器の出土はなかったが、植物遺体の放射性炭素年代測定では 2290 ± 30 年yrBPという年代を得ている。

③出土遺物 調査面積6,000㎡に対して出土遺物はコンテナ・バットで27箱である。出土遺物の内容は、13世紀以降の土師器・陶磁器、弥生時代中期の壺・甕・高杯、石鏃・石槍の石製品、縄文時代晩期の浅鉢などである。

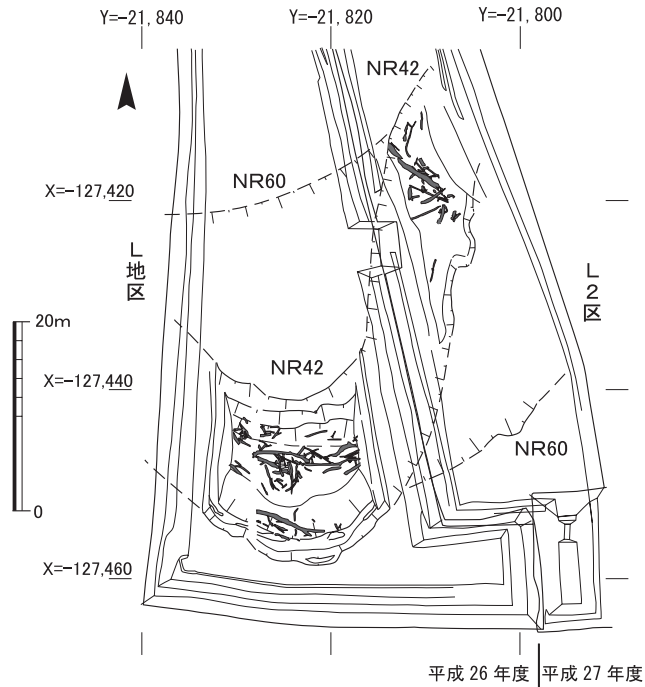
まとめ 下水主遺跡第8次(L・M・O地区)調査では、島畑を検出するとともに、下層遺構として弥生時代の土坑や縄文時代の流路を検出した。今回の調査成果をまとめると、以下の通りで



第3図 下水主遺跡北辺部検出島畑分布図



写真1 M2区土坑S K68・69全景(北から)



第4図 L2区流路NR42・60平面図



写真2 L2区流路NR42樹木出土状態

多くの自然木や堅果類の種実が埋没していた。現在、種実や樹木の種類について分析中であるが、縄文時代晩期の調査地周辺における植生の復原や栽培食物の有無について検討できる材料が得られることと思われる。

ある。

①平成26年度の調査で検出していた島畑の規模を明らかにすることができた。

②島畑は一斉に造成されたのではなく、島畑72のように一時期遅れて造成されているものが存在することが明らかとなった。

③島畑73は、花粉分析の結果、イネ科植物の花粉が多量に含まれていることが明らかとなった。高まりの上で稲作を行っていたのか、今後の検討課題である。

④下層遺構として弥生時代中期の土坑を検出した。弥生時代の遺構は、平成26年度のL・M地区のほか、今回の調査区の東にあるN地区でも確認しており、竪穴建物などの検出には至っていないものの、周辺に弥生時代中期の集落が存在したと思われる。

⑤L2区南部で縄文時代の流路を3条検出した。この流路は、放射性炭素年代測定結果からみると、縄文時代晩期の100年前後の間に洪水による強い力で生じた流路であることが確認できた。

⑥流路内には流木あるいは倒木などの

(石井清司)

5. ^{さえき}佐伯遺跡第 7 次

所在地 亀岡市葎田野町佐伯

調査期間 平成27年 5 月25日～12月 4 日

調査面積 4, 920㎡

はじめに 佐伯遺跡は、亀岡市葎田野町佐伯に所在する平安時代から中世にかけての遺物が出土する散布地として知られている遺跡である(第 1 図)。西側の丘陵裾部には佐伯古墳群が所在する。

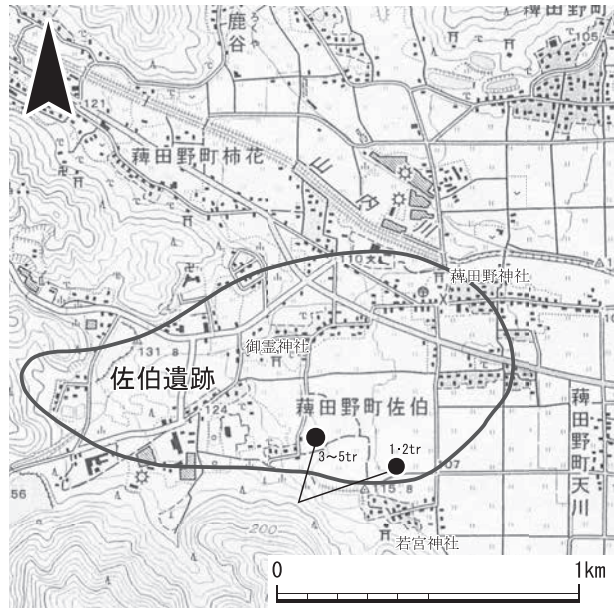
これまで 6 度の調査が実施され、平成18 年度(第 1 次調査)の菰川の河川改修および付け替え工事に伴う試掘調査で縄文土器や中近世の土器が出土したが、明確な遺構は検出できなかった。

今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受け、京都府教育委員会と亀岡市教育委員会の調査結果を踏まえ、5 か所のトレンチを設定して発掘調査を実施した(第 2 図)。

調査概要 調査地周辺は畑地および水田地帯であり、西から東へ緩やかに傾斜し、各調査トレンチでは現地表面(耕作土上面)から約20cmの深さで遺構を検出した。遺構を検出したのは 1・4・5 トレンチで、そのほかのトレンチは少量の遺物が出土したのみであった。

① 1 トレンチ 自然流路 1 条を検出した。自然流路からは平安時代の須恵器杯蓋を転用した硯や中世の土器片が多く出土し、これらに混じって縄文時代中期(約5,500～4,500年前)の土器片が出土した。

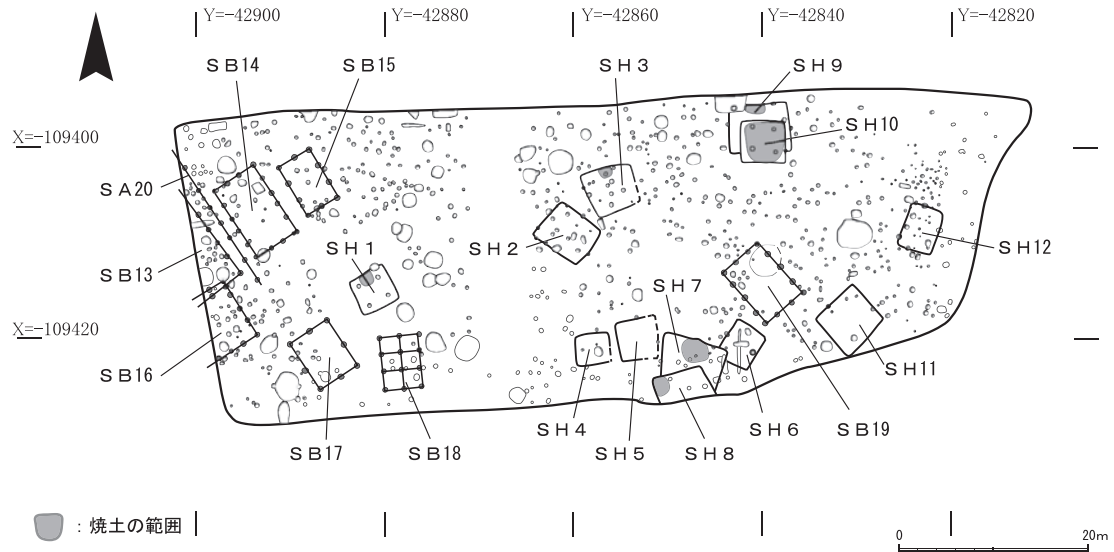
② 4 トレンチ 古墳時代後期と考えられる竪穴建物が12棟、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物 7 棟や柵 1 列、土坑や柱穴などの多くの遺構を検出した(第 3 図)。



第 1 図 調査地位置図(国土地理院 1 / 25, 000 亀岡)



第 2 図 調査トレンチ配置図



第3図 4トレンチ平面図

竪穴建物 一辺が約3.5～6mの方形を呈する12棟の建物を検出した。そのうち床面が焼けたものや、カマドの痕跡を検出した。SH1の床面から古墳時代後期(6世紀後半)の須恵器の杯身などが出土した。竪穴建物SH6～8や9・10のように重複しており、建て替えが行われていたことも確認できた。

掘立柱建物 真北から西に約30度傾いた建物(掘立柱建物SB13～17・19)と真北から西に約5度傾いた2間×3間の総柱建物(SB18)を検出した。SB13～17と柵SA20については向きをそろえて建てられたものと考えられる。柱穴から奈良時代から平安時代にかけての土器が出土した。

③5トレンチ 竪穴建物1棟や土坑などの遺構を検出したが、4トレンチに比べると希薄な状況であった。また、堆積層から古墳時代の耳環が1点出土した。

まとめ 今回の調査によってわかったことを時代ごとに整理する。

①縄文時代：1トレンチから縄文時代中期の深鉢の破片が出土したことから、周辺に縄文時代の集落があったことが考えられる。

②古墳時代：遺跡範囲内の西部で調査した4・5トレンチで、古墳時代後期の竪穴建物を13棟検出し、古墳時代の集落があったことがわかった。また、遺物では耳環や須恵器の特殊器台片など古墳の埋葬品と思われるものが出土しており、近隣古墳との関連も想定される。

③奈良時代から平安時代：4トレンチで掘立柱建物7棟や柵1列、土坑などを検出した。奈良時代から平安時代の集落があったことがわかった。平安時代には、近隣に京から丹波、但馬へ向かう「山陰道」が通っており、この周辺は交通の要衝であったと考えられ、今後注目すべき遺跡である。

これまで佐伯遺跡は、遺物の散布地として周知されていたが、今回の発掘調査で建物群が見つかったことから、断続的にはあるがこの一帯に集落が営まれていたことがわかった。集落の広がりや周辺の遺跡との関連など、今後の発掘調査に期待したい。(村田和弘)

6. いずも 出雲遺跡第20次・みっかいち 三日市遺跡第13次・くるまづか 車塚遺跡第11次

所在地 亀岡市千歳町千歳

調査期間 平成27年 5 月 7 日～12 月 4 日

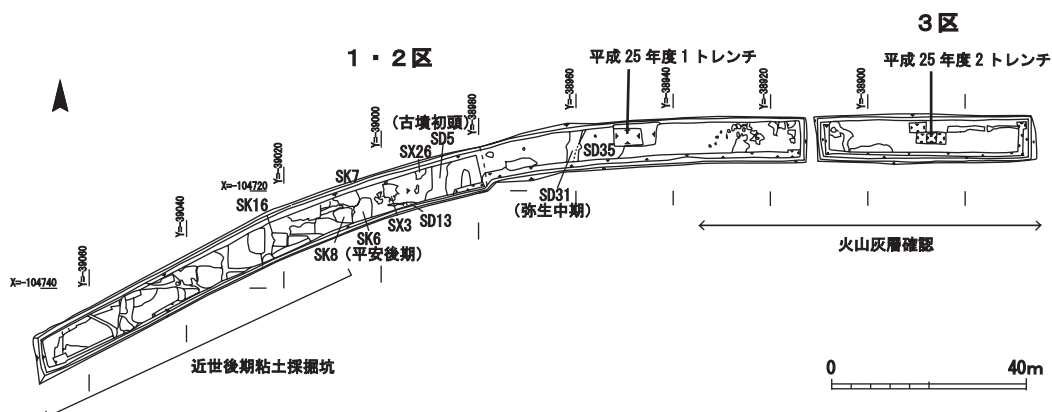
調査面積 2, 600㎡

はじめに 今回の発掘調査は、主要地方道路亀岡園部線(北々伸)防災・安全交付金事業に先立ち、京都府建設交通部の依頼を受け、実施した。調査は、計画路線上において、南北に約 1 km 離れた 2 か所の地点で実施した。北部調査地は、三日市遺跡・車塚遺跡の遺跡範囲にあり、南部調査地は出雲遺跡と中古墳群の遺跡範囲にある。中古墳群については、今回の調査によって、その範囲は調査地の南を中心に展開し、調査対象地にまで拡がらないことが判明した。北部調査地は、調査面積1, 900㎡を測り、南部調査地は700㎡を測る。

調査概要 平成25・26年度の計画路線上における部分調査の成果を受け、三日市遺跡・車塚遺跡の範囲となる北部調査地では、1～3 区の 3 か所の調査区を設定した。1 区では、不整形の掘形をもつ土坑群(長軸長約 3～4 m)を検出した。土坑の底面は不規則な平面形状を呈し、深さ 0.5～0.8m を測る。土坑の 1 基から合子形の曲物が出土し、共伴土器から平安時代後期の土坑と推定される。この周辺の基盤層は良好な緑灰色粘土であり、土坑の形状から粘土採掘坑である可能性が高い。1 区西半は攪乱が著しく、江戸時代後期から近現代に至る大形の方形を呈する攪乱坑群を確認した。一部から、廃棄されたとみられる多量の瓦や焼土とともに、天明 8 年(1788 年)の銘をもつ火舎が出土した。これらの攪乱坑は、瓦造りのための粘土採掘坑とみられる。1 区東では、幅約 2 m の古墳時代初頭の流路を検出し、2 区では幅約 1.5m の弥生時代中期の流路を検出した。また、その下層では縄文時代の可能性がある流路の一部を確認している(幅 4～5 m)。いずれの流路も旧地形に規制され、北東から南西に流れる。3 区では、基盤層の下層で旧石器時代の 2 層の火山灰層を確認した。表土下約 1.7～2.2m (標高 97.8～98.3m) で、大山東火山灰(DH g)と始良 T n 火山灰(AT)の 2 層のテフラを検出した。約 3 万年前に降下した始良 T n 火山灰は、3 区東端から 2 区中央までの範囲で検出し、3 区東半では水性堆積とみられる良好な状態で約 20cm の厚さで検出している。こ



第 1 図 調査地位置図
(国土地理院 1 / 25, 000 亀岡)



第2図 三日市遺跡・車塚遺跡平面図(北部調査地点)



写真 出雲遺跡(南部調査地点・北東から)

うした点から周辺部は湖沼とその水際を含む湿原にあったと考えられるが、旧石器時代の石器等は出土していない。出雲遺跡を対象とした南部調査地点では、弥生時代後期後半の流路、平安時代前期の溝や、平安時代後期と推定される石組み井戸や柱穴群などを検出した。柱穴群は、出土土器から平安時代後期以降と推定されるが、建物を復元するには至っていない。

まとめ 三日市遺跡・車塚遺跡の範囲にある北部調査地では、旧石器時代の始良Tn火山灰層など2層の火山灰層を確認し、旧石器時代の古環境を復元する資料を得た。また、弥生時代中期後半と古墳時代初頭の流路などを検出したことから、調査地の周辺に弥生時代～古墳時代の集落が近在するとみられる。一方、平安時代後期の土坑群は、粘土採掘坑の可能性が高いものである。三日市遺跡では、丹波国分寺の創建瓦を生産した平安時代前期の瓦窯の灰原が検出されており、今回の調査で検出した土坑群は、平安時代の瓦生産との関係が注目される。南部調査地の出雲遺跡では、弥生時代後期の流路のほか、平安時代の溝や井戸、柱穴群を確認した。特に平安時代後期を中心に遺跡南部にも集落が拡大することが明らかとなった。(高野陽子)

7. 岡田国遺跡第3次

所在地 木津川市木津地先

調査期間 平成27年11月2日～平成28年1月29日

調査面積 900㎡

はじめに 今回の調査は一般国道163号木津東バイパス事業に伴い、国土交通省京都国道事務所の依頼を受けて発掘調査を実施した。岡田国遺跡は井関川中流域右岸に位置し、調査地北東には岡田国神社が位置する。昭和52年度に発掘調査が実施され、旧石器が出土している。

調査概要 対象地内の11か所に調査トレンチを設定した。

①古墳時代 古墳時代の遺構は検出していないが、調査地西側の遺物包含層より車輪石2点が出土した。周辺に副葬された古墳が存在したか、製作した遺跡が存在したと想定されるが、後世に移動したものであると考えられる。

②奈良時代 調査地中央部で南北方向の溝と掘立柱建物を検出した。溝は南北方向に掘削されており、溝底部から奈良時代の須恵器杯と土師器壺が出土した。掘立柱建物は東西棟である。柱穴の平面形は隅丸方形で、最大で長辺80cm、短辺70cmを測る。調査区外に広がるため、建物規模は不明である。柱穴の埋土より奈良時代の須恵器杯と土師器甕が出土した。また、各トレンチより奈良時代の瓦片が出土している。

③平安時代 調査地南側より井戸と掘立柱建物が出土した。井戸は平面形が長方形であり、井戸枠などは遺存していなかった。掘形と井戸枠内埋土の土層区分が見られず、人為的に埋め戻された埋土であるため、井戸枠が抜き取られたと考えられる。埋土から黑色土器が出土した。掘立柱建物は調査区外に広がるため、建物規模は不明である。柱穴の埋土から黑色土器が出土した。

④鎌倉時代以降 各トレンチより耕作に伴う素掘溝を検出した。鎌倉時代以降は耕作地になっていたと考えられる。

まとめ 今回の調査では、全トレンチより4時期の遺構、遺物を検出したことから、調査対象地全域に遺構が広がると考えられる。特に、奈良時代には計画的に建物が配置されていることが判明した。
(福山博章)

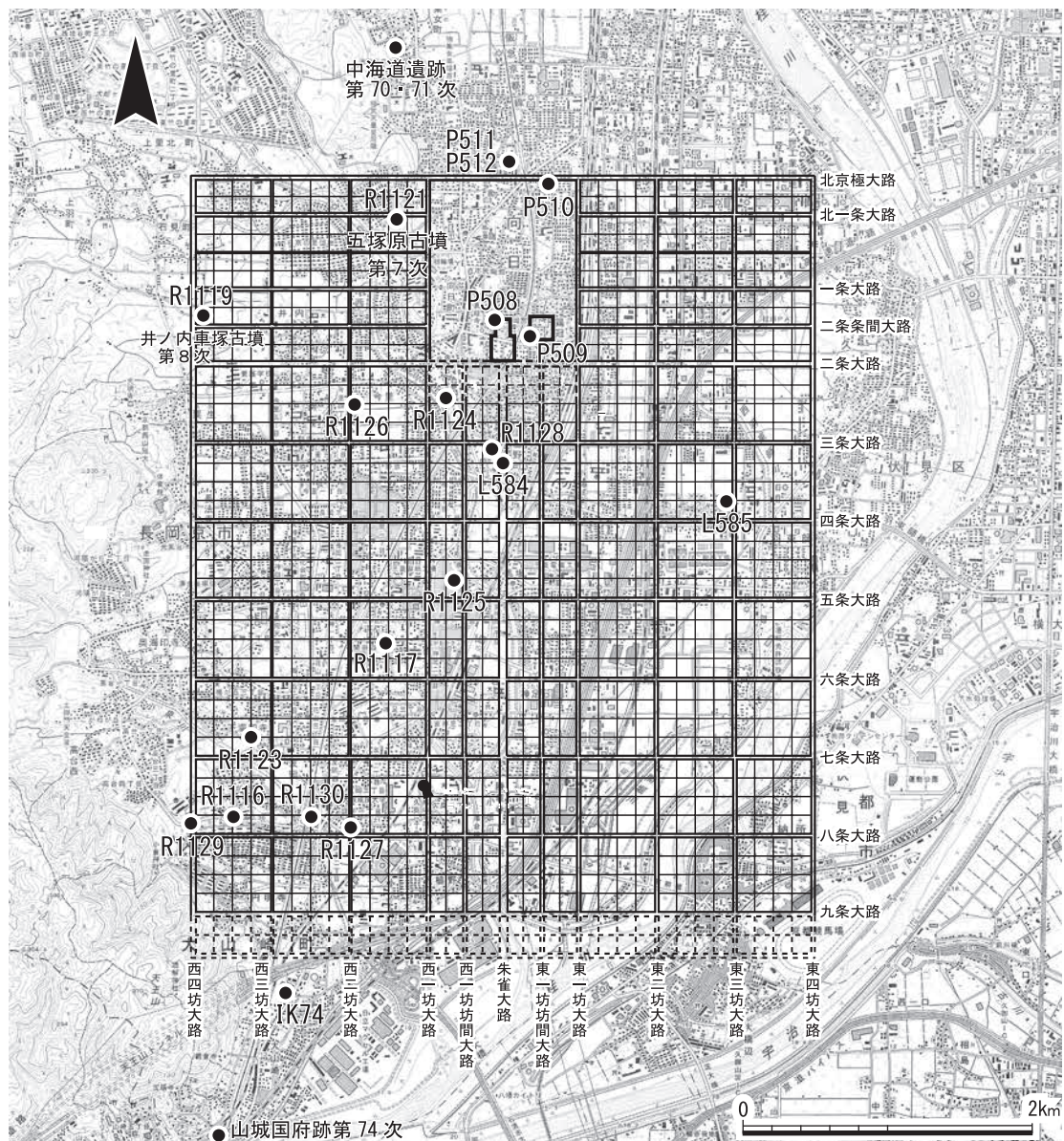


調査地位置図(国土地理院 1/25,000 奈良)

長岡京跡調査だより・125

長岡京跡における発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成27年11月から平成28年2月の例会では、宮域5件、左京域2件、右京域12件、京域外4件の合計23件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域 大極殿院回廊の北西部が確認されていた第508次調査(向日市鶏冠井町)では、下層で古墳時代の周濠2条と土器棺が新たに検出された。古墳は宮第46次で検出されていた山畑4号墳(方墳)の周濠とみられ、内部から武器形埴輪が出土した。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

第509次調査(向日市鶏冠井町)では、第二次内裏の西面を画す内郭築地回廊の雨落ち溝および築地本体の寄柱・廂柱、瓦溜まりが検出された。

長岡宮北辺官衙域に位置する第510次調査(向日市寺戸町)では、長岡京期の南北棟と推定される掘立柱建物の柱穴が検出された。

阪急電鉄「東向日」駅の西に隣接する第511・512次調査(向日市寺戸町)では、316次で確認されていた東西棟の掘立柱建物の南側柱の延長が検出され、南北2間×東西7間の建物形式が確定した。北側約47mの地点に妻柱筋を揃える東西棟建物があり、長岡宮「北苑」における建物配置を知る上で資料を提供した。

左京域 第584次調査(向日市上植野町)は朱雀大路路面位置であるが、小畑川旧流路が長岡京期の遺構を開析した状況が確認された。

羽束師菱川城の堀遺構が検出された調査区の南に隣接する第585次調査(京都市伏見区菱川町)では、規模の大きな柱掘形をもつ長岡京期の掘立柱建物が検出された。

右京域 規模の大きな側溝を付随する西二坊坊間小路が確認されていた第1117次調査(長岡京市開田)では、この小路に西面する六条二坊十一町を東西に二分する位置で南北区画溝が検出された。その西側で甕据え付け穴を有する規模の大きな南北棟の掘立柱建物が検出された(第131回埋蔵文化財セミナー要旨を参照)。墳丘の西側くびれ部に造り出しをもつ全長39mの前方後円墳の井ノ内車塚古墳(長岡京右京第1119次調査、長岡京市井ノ内)では、後円部墳丘に位置する攪乱穴から人頭大の礫が二次的に集積し、その下部から赤色顔料や須恵器(6世紀中ごろ)が出土した。巨石は未確認ではあるが、横穴式石室の存在を示唆する成果を得た。西造り出しの周辺から多量の埴輪類が出土し、新たに鶏形埴輪の存在も確かめられた。

第1121次調査(五塚原古墳第7次、向日市寺戸町)では、3段築盛された後円部墳丘の各斜面に施された葺石と段間の平坦面が良好な状況で遺存しており、墳丘盛土の築成と葺石施行が同時に行われていることが判明した。これまでの調査成果も総合すると後円部の平面形は正しく円形を呈することが明らかとなった。古墳時代の遺物は全く出土しなかったが、葺石基底石に長岡京期の土師器皿が据え置かれた状態で出土した。第1124次調査(向日市上植野町)では、小畑川の河道の歴史的変遷を追跡できる情報を得ることができた。

第1125次調査(長岡京市馬場)では、堀状の溝や礎板をもつ柱穴などの中世の遺構が散在するなかで、長岡京期の土器を多量に出土する土器溜まりを1基検出した。第1126次調査(長岡京市今里)では、甕据え付け穴をもつ掘立柱建物の南庇柱列を検出し、流路状堆積土から旧石器から平安時代にかけての遺物が出土した。なかでも平安時代の遺物は多種多様で、猿投産の緑釉陶器や鳥形硯の出土は、乙訓寺との関連性が窺われ注目される。

京域外 西国街道に面する大山崎町 I K74次調査(百々遺跡、大山崎町字大山崎)では、集石を伴う遺構や礫敷広場、平面方形の炭化物を埋土に多く含む土坑が検出され、緑釉・灰釉陶器・西寺同範瓦類など9世紀の遺物および瓦器を含む中世の遺物が出土した。(伊賀高弘)

現地公開状況(平成27年11月～平成28年2月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査をしている京都府内の遺跡の現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

現地見学会

11月7日(土)、八幡市の女谷・荒坂横穴群にて、京田辺市立松井ヶ丘小学校のふろさと体験学習として現地見学会が実施された。

新名神高速道路の橋脚横での調査を見学し、当日は116名の方が参加され、調査中の御毛通2号墳の説明を聞き、展示された過去の横穴調査の写真パネルや出土した遺物の説明を受けた。



古墳周溝を見学

者の説明に聞き入り、数多くの質疑のやりとりがあった。

参加した子どもも大人も熱心に調査担当

現地説明会

11月21日(土)に、亀岡市の佐伯遺跡にて現地説明会を実施した。

今回の調査では、縄文時代中期の土器や古墳時代後期の竪穴建物、奈良時代から平安時代の掘立柱建物などの遺構が見つかった。

この地域で竪穴建物や掘立柱建物のまとまった遺構が出土したのは初めてであり、一帯には集落があったとみられる。



佐伯遺跡現地説明会

当日は、風は強かったが晴天に恵まれ、84名の方が参加された。地域の方だけでなく、他府県からも多くの方が来られ、地域の歴史についての質問をされたり、説明を熱心に聞かれたりして、関心の高さが感じられた。

(岡村美知子)

普及啓発事業(平成27年11月～平成28年2月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

藤森中学校「生き方探究チャレンジ体験」

11月4日(水)・5日(木)・6日(金)に京都市立藤森中学校2年生3名が、京都市の推進事業である「生き方探究チャレンジ体験」で発掘現場と当調査研究センターにて体験学習をした。

「生き方探究チャレンジ体験」は、京都市が平成12年度から行っている事業で、中学生が自ら考える力などの「生きる力」を身につけるとともに、集団や社会の一員としての自己の在り方を考えるきっかけを生み出すために、生徒の興味・関心に応じた勤労体験・職場体験・ボランティア体験などを行うものである。

11月4日(水)・5日(木)は京都市内の発掘現場にて、発掘調査の説明を受け、土層断面の観察・遺構の検出作業・レベルや光波測距機での測量・土坑の平面図作成などを体験した。

11月6日(金)は当調査研究センターにて、遺物洗浄・ネーミング・実測・拓本・報告書作成・写真撮影・展示についてなど、整理作業→報告書作成→展示の時系列の順を追って体験した。

生徒は、初めての発掘調査に参加し、緊張感をもった3日間を過ごした。特に、生徒からは働くことの大変さ、厳しさを知り、今回の経験を将来の職業に生かしたいと感想が聞かれた。



藤森中学校生き方探究チャレンジ体験

2015.向日市まつり

11月14日(土)・15日(日)の2日間、向日町競輪場を会場として開かれた向日市まつりに「拓本にチャレンジ! 美しい拓本とのであい!」と題して、出展した。

このブースでは、江戸時代後期に屋根の飾りとして使われていた小菊瓦の歴史について説明し、実際に墨を使って画仙紙に模様を写しとる拓本を行った。小さなお子さんは大人と一緒に、



向日市まつり拓本

小学生から年配の方まで幅広い年齢の方々に拓本のとり方を知っていただき、細かい作業を丁寧に取り組んでいただけた。できた拓本は、持ち帰っていただいた。1日目は雨であいにくの天候となったが、2日目は快晴と天候に恵まれ、2日間の催しで143名の方々に拓本を経験していただくことができた。



第131回埋蔵文化財セミナー

埋蔵文化財セミナー

第131回埋蔵文化財セミナーを、2月20日(土)に長岡京市立産業文化会館1階大会議室で実施した。

今回のセミナーでは、『京都・三都城ものがたり』と題して、「1. 恭仁宮跡の発掘調査成果について－最古級の正月行事を示す遺構－」京都府教育庁指導部文化財保護課古川匠副主査、「2. 長岡京跡の発掘調査成果について－右京第1117次調査を中心に－」公益財団法人長

岡京市埋蔵文化財センター木村泰彦総括主査、「3. 平安京跡の発掘調査成果について－左京八条三坊九町の調査－」当調査研究センター福山博章調査員の計3本の発表を行った。

第1題では、これまでの発掘調査で恭仁宮の実態についての報告があった。また、今年度の発掘調査では、宝幢遺構が見つかり、現存する最古の正月の儀礼の遺構であること、恭仁宮では元日朝賀の際には必ず宝幢が立てられていた可能性が高く、この行事が国家にとって重要な儀式であったこと、恭仁京への遷都が元日朝賀の準備に間に合うタイミングだったことから聖武天皇が元日を恭仁宮で迎え元日朝賀を行うという強い意志を持っていたのではないか、という報告があった。

第2題では、発掘調査を行った長岡京跡右京六条二坊六町と十一町、西二坊坊間小路の遺構・遺物の報告があった。成果として、西二坊坊間小路西側溝の形状が、通有に見られる側溝と異なることが判明した点にある。この溝は排水のための機能ではなく、小型の船を利用した水運の機能があった可能性が報告された。

第3題では、平安京跡の鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物が検出し、その遺構・遺物から分かる調査地の周辺に住んでいた当時の職人たちの生活や流通経済活動の様子が報告された。

2年ぶりの長岡京市でのセミナー開催であったが、長岡京市はもとより府内外からの参加者も多かった。当日は激しい雨が降る中、80人の参加者を得て、盛況のうちに無事終了できた。

(岡村美知子)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 設立35周年記念事業の実施報告

岡村美知子

1. はじめに

昭和56年に設立された公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、平成27年度で35周年を迎えた。それを記念して以下の事業を実施した。本稿は、それらの関連事業の開催主旨と実施の状況の記録である。

なお、設立35周年記念事業として実施した事業は、平成27年11月28日(土)から平成28年1月11日(月・祝)まで開催した「^{やまとところとからざえ}和魂漢才ー京都・東アジア交流の考古学ー」と平成27年11月29日(日)に開催した展覧会と同じタイトルで実施した講演会・シンポジウムである。

また、この講演会・シンポジウムに先立ち、縄文時代から古墳時代を対象としたプレシンポジウムを平成27年8月22日(土)に実施した。プレシンポジウムの概略については、本誌第128号に掲載しており、参照願いたい。

2. 35周年記念事業の実施結果報告

(1) 設立35周年展覧会「和魂漢才ー京都・東アジア交流の考古学ー」

平成27年11月28日(土)から平成28年1月11日(月・祝)の45日間、京都文化博物館2階総合展示室にて、当調査研究センター設立35周年記念展覧会を開催した。

「和魂漢才ー京都・東アジア交流の考古学ー」をテーマに日本の文化が大陸の影響「漢才」を受けながら、やがて日本固有の文物を生成する「和魂」を生み出していく様子を京都府内の出土品と写真パネルや文字パネルなどによってわかりやすく展示を行った。

展示の全体的な構成は、「日本文化の源流(朝鮮半島起源の石器・くらしの変化・戦いのはじまり)」「新しい技術の波(武器の変化と馬具の登場・土器生産の変革・鏡)」「漢才から和魂へ(仏教の受容とひろがり・みやこの造営とくら



展覧会ちらし



展示会場の様子



列品解説風景（京都文化博物館提供）

し・仮名文字の誕生)」「広がる海の道(貿易とうつわ・現代につながる食器文化)」という4つの小テーマを設定し、それぞれを理解するうえで欠かせない考古資料を選択し、展示を行った。展示品の中には、重要文化財5件、府指定文化財7件などをはじめ、多くの優品を展示した。

展示では、東日本大震災の復興に職員を派遣している京都府教育委員会の復興調査に関するパネル展示をはじめ、京都府立山城郷土資料館

と京都府立丹後郷土資料館の活動内容を紹介するコーナーも併設した。

展示の最後には、昭和56(1981)に設立された当調査研究センターが発掘調査を行った遺跡を空中から撮影した画像を30分で振り返る映像コーナーも併設した。撮影された周辺が現在、どのように様変わりしたかを確認するかのように熱心に視聴する多くの見学者が印象的であった。

開催期間中には、当調査研究センター職員により5回の列品解説を行い、多くの観覧者から好評を得た。入場者数は、当初の予想をはるかに超える約13,000人を記録した。ほぼ同時期に開催された京丹後市『大丹後展』との相乗効果もあり、多くの方々に当調査研究センターの存在とその存在の社会的意義について広く知っていただけたばかりではなく、国民の共有財産である文化財を保護することの重要性をあらためて多くの方々に認識していただく機会となったことは、設立35周年記念事業としての展覧会開催が、非常に意義深いものとなったと確信している。今後、今回の記念展覧会で得た経験と確認できた問題点を当調査研究センターの業務に活かしていきたいと思う。

(2) 設立35周年記念講演会・シンポジウム

平成27年11月29日(日)に、向日市民会館ホールにて、当調査研究センター設立35周年記念講演



上田正昭理事長 記念講演

会・シンポジウムを実施した。記念展覧会と同じく「和魂漢才ー京都・東アジア交流の考古学ー」と題し、記念講演と基調講演、そして、基調報告及びシンポジウムを開催した。」

先に述べたように8月22日(土)に、プレシンポジウムとして第130回埋蔵文化財セミナーを行い、奈良平安時代以前の交流の歴史に迫った。

当調査研究センター上田正昭理事長が、「古代東アジアと京都盆地」と題し、記念講演をまず行った。平安京には秦氏などの多くの渡来系

氏族が居住し、平安京の造営が洛陽の影響を強く受けていたことを明らかにされた。今回のテーマである「和魂漢才」は、上田理事長が、早くからその意味と重要性について指摘されているところであり、約 1 時間に及ぶ講演により、このシンポジウムと展覧会の基本理念の解題ともなった。

続いて、当調査研究センター井上満郎理事が、「遣唐使“廃止”後の京都と東アジア－平安王朝の背後世界－」と題し、記念講演を行った。遣唐使の廃止後も民間による国際交流が頻繁に行われたことを詳述され、支配者階層の貴族が日本を強く意識するようになった過程が明らかにされた。

これらの講演を受けて、京都府立大学菱田哲郎教授により「飛鳥・奈良時代における東アジアの影響－仏教文化を中心に－」と題した基調講演を行った。都城や各地域に存在する古代寺院で出土した瓦から、仏教の拡がりに渡来人の果たした役割が大きかったことを明らかにされた。

基調報告では、当調査研究センター筒井崇史主査が「考古資料から見た奈良・平安時代における東アジアとの交流」と題し、「仏教」「都城」「文字」を中心にどのように外来文化「漢才」を取り入れ、独自の文化「和魂」へ発展させたかについて、その過程を明らかにした。また、当調査研究センター伊野近富副主査は「中世における東アジアとの交流」と題し、人々が好んだ輸入陶磁器が時代によって異なることや海外交流の実態について報告した。

これらの講演と報告を受けて、当調査研究センター上原真人理事による討論進行のもと、パネリストの意見を多角的に引出し、「和魂漢才」について深く掘り下げるシンポジウムとなった。

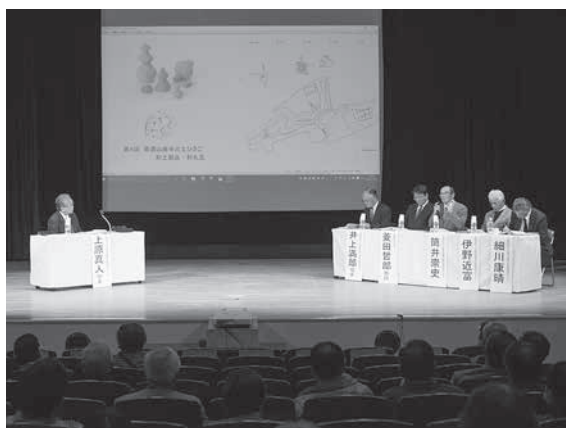
当日は天候にも恵まれ、190名の方々が参加され、「広範囲に渡る交流の歴史について興味深く聞くことができた」「展覧会にもぜひ行きたい」などの意見・感想をお寄せいただいた。35周年記念事業の概略は以上であるが、今後、ますます公益財団法人としての役割をわれわれが認識し、文化財保護に寄与しなければならないことを職員一同、認識する絶好の機会となった。また、展示などの共同作業を通して職員の連帯感を強められたことも大きな成果であった。

なお、記念展覧会図録および記念講演会・シンポジウム当日配布資料は、当調査研究センターホームページにアップロードしているので、参照願いたい。

(おかむら・みちこ＝当調査研究センター調査課企画調整係調査員)



基調報告の様子



シンポジウムの様子

センターの動向

(平成27年11月～平成28年2月)

月 日	事 項
11 2	岡田国遺跡(木津川市)発掘調査開始
4	藤森中学校「生き方探究・チャレンジ体験」(於：当センターほか、参加者3名)(～11/ 6)
7	京田辺市立松井ヶ丘小学校ふるさと体験学習(於：女谷荒坂横穴群、参加者116名)
14	向日市まつり「拓本体験ブース出展」(於：向日町競輪場、参加者143名)(～11/ 15)
17	阿良須遺跡(福知山市)発掘調査開始
21	佐伯遺跡(亀岡市)現地説明会(参加者84名)
25	美濃山遺跡(八幡市)発掘調査開始
	長岡京連絡協議会
27	出雲遺跡・中古墳群(亀岡市)発掘調査終了
28	当調査研究センター設立35周年記念展覧会開始(於：京都文化博物館観覧者13, 000人)
29	当調査研究センター設立35周年記念シンポジウム(於：向日市民会館 参加者：190人)
12 4	出雲遺跡・中古墳群(亀岡市)発掘調査終了
4	佐伯遺跡(亀岡市)発掘調査終了
10	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：広島市、増田総括主査)(～12/ 11)
16	長岡京連絡協議会
1 7	岨田遺跡(宇治田原町)発掘調査開始
11	当調査研究センター35周年記念展覧会終了(観覧者：約13, 000人)
26	芝山遺跡(城陽市)発掘調査開始
27	長岡京連絡協議会
29	岡田国遺跡(木津川市)発掘調査終了
2 4	下水主遺跡(城陽市)発掘調査終了
5	水主神社東遺跡(城陽市)発掘調査終了
20	第131回埋蔵文化財セミナー(於：長岡京市立産業文化会館、参加者80人)
24	長岡京連絡協議会
26	阿良須遺跡(福知山市)発掘調査終了

編集後記

桜のつばみも膨らみ春の訪れを告げ、春便りがうれしい季節となりました。平成27年度3冊目となる『京都府埋蔵文化財情報』第129号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、今年度の京都府内における埋蔵文化財の調査・普及啓発事業の成果をいち早くお伝えするとともに、当調査研究センター職員による論考を掲載いたしました。

さらに、当調査研究センター設立35周年記念事業である展覧会、記念講演会・シンポジウムの概略について掲載いたしました。

本年度刊行いたしました『京都府埋蔵文化財論集』第7集もあわせて、ご一読いただければ幸いです。

(編集担当 岡村美知子)

京都府埋蔵文化財情報 第129号

平成28年3月31日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

T e l (075) ~~833~~(代) F a x ~~92075~~189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 河北印刷株式会社

〒601-8461 京都市南区唐橋門脇町28

T e l (~~095~~) 6121(代) F a x (075) 3671-82